根来寺遺跡

— 旧県会議事堂移転予定地における発掘調査報告書 —

平成２４年３月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

根来寺遺跡

旧県会議事堂移転予定地における発掘調査報告書

平成24年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は、平安時代の終わり保延六年(1140)、興教大師覚鑁により開創された寺院であります。最盛期の中世後半には堂塔坊舎の数が二千にもおよぶと言われ、全国でも屈指の規模をもった寺院集団であったことが知られています。

こうした繁栄をきわめた根来寺ではありますが、天正十三年（1585）羽柴秀吉による根来攻めの結果、大塔・大師堂などの一部の建物を遺し全山ことごとく灰燼に帰してしまいました。

昭和 50 年代から山内の発掘調査が進められ、我が国の中世寺院遺跡としてきわめて重要な遺跡であることが確認され、平成 19 年には山内の中心部が国の史跡に指定されています。

このたび和歌山県の旧県会議事堂の移転予定地におきまして平成 16 年度から実施してまいりました発掘調査の成果をとりまとめ報告書として刊行するはこびとなりました。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の方々の活用に資することができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、現地での調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力をいただきました地元の皆様はじめ関係各機関の皆様方に改めて厚くお礼申し上げます。

平成 24 年３月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長　森　　郁　夫

例　　言

1　本書は、和歌山県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）が実施した和歌山県岩出市に所在する旧県会議事堂移転予定地における根来寺遺跡発掘調査報告書である。

2　調査は、平成16年度は１次調査、平成17年度は２次調査、平成22年度に３次調査及び平成23年度に４次調査を実施し、更に平成23年度には出土遺物等整理も合わせて実施した。

3　２次調査は県教育委員会が実施した。１次調査、３次調査及び４次調査ならびに出土遺物等整理業務は、県教育委員会から財団法人和歌山県文化財センター（平成23年４月１より公益財団法人和歌山県文化財センター、以下「県文化財センター」という。）が受託して実施した。

4　１次調査を県文化財センター井石好裕、２次調査を県教育委員会武内雅人、３次調査及び４次調査ならびに出土遺物等整理業務を県文化財センター佐伯和也が担当した。

5　本書は佐伯が執筆、編集し、第１章を黒石哲夫（県教育委員会）が執筆した。

6　図版遺構写真は、各年度の担当者が撮影し、遺物写真は佐伯が撮影した。

7　調査・整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料および出土遺物は県教育委員会が保管している。

8　現地調査並びに報告書作成に際し、関係機関および地元の方々から助言・協力を得た。

凡　　例

1　地区割および遺構実測図の基準線は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）に基づき、方位は座標北を示す。また、座標値の単位はｍである。

2　遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T．P．＋）である。

3　調査で使用した調査コードは、以下の通りである。

　04 － 11・16（2004年度－岩出町・根来寺坊院跡）

　05 － 11・16（2005年度－岩出町・根来寺坊院跡）

　10 － 11・16（2010年度－岩出市・根来寺遺跡）

　11 － 11・16（2011年度－岩出市・根来寺遺跡）

4　遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。

5　遺物実測図の縮尺は、1/4を基本とし、大形品については1/5・1/6・1/10で掲載した。
遺物写真の縮尺は、統一していない。

6　土器および調査時の土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修　小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』による。
平成16・17年度は「2000年版」、平成22・23年度は「2005年版」を使用した。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過 1
第２章　位置と環境 2
　第１節　地理的環境 2
　第２節　根来寺の歴史的環境 3
　第３節　既往の調査 5
第３章　調査の方法と成果 8
　第１節　調査の方法 8
　　第１項　調査体制 8
　　第２項　調査の方法 9
　第２節　発掘調査の成果 11
　　第１項　１次調査・２次調査 11
　　第２項　１次調査・２次調査のまとめ 26
　　第３項　３次調査・４次調査 28
　　第４項　３次調査・４次調査のまとめ 63

挿　図　目　次

第１図　根来寺遺跡の範囲と周辺の遺跡 4
第２図　主な既往の調査位置図 6
第３図　１次調査・２次調査　調査地位置図 11
第４図　１次調査・２次調査遺構平面図 12
第５図　１次調査・２次調査土層柱状図 13
第６図　Ａ・Ｂ・Ｄ～Ｆ区　出土遺物実測図 18
第７図　Ｇ・Ｈ区　出土遺物実測図 20
第８図　Ｇ区遺構 30 平面図及び断面図 21
第９図　Ｉ区階段状遺構　平面図及び断面図 22
第 10 図　Ｉ・Ｊ区　出土遺物実測図 22
第 11 図　Ｊ区遺構 44 平面図及び断面図 24
第 12 図　１次調査・２次調査地周辺の古絵図（根来寺伽藍古絵図） 27
第 13 図　３次調査・４次調査　調査区位置図 28
第 14 図　３次調査遺構平面図 31
第 15 図　３次調査Ａ・Ｂトレンチ南北及び東西土層図、Ｃトレンチ東西土層図 32
第 16 図　３次調査・４次調査　調査地位置図 33
第 17 図　昭和 55 年測図の地形図 34
第 18 図　井戸・溝６　平面図及び井戸立面図、溝６断面土層図 34
第 19 図　４次調査遺構平面図 ..... 35・36
第 20 図　溝１平面図及び土層図・断面図 38

第 21 図　中央セクションベルト・上段現代盛土土層図、調査区北壁土層図 41
第 22 図　階段・石垣・集水口１・溜桝状遺構１・溜桝状遺構２・溝４平面図及び
石垣立面図、溜桝状遺構１土層断面図 42
第 23 図　階段･階段南側側石･溜桝状遺構２立面図､集水口１及び石垣掘形･階段南側側石･溝５断面図.. 44
第 24 図　半地下式倉庫１　平面図及び断面土層図､立面図､井戸状遺構断面土層図及び立面図.. 46
第 25 図　溝２・溝３・溝７・集水口２・竈状遺構平面図、溝２・溝３・溝５・溝７・竈状遺構土層図、
集水口２平面図及び立面図、集水口２瓦製品及び溝２瓦製土管実測図 ..... 47・48
第 26 図　半地下式倉庫２　平面図及び土層図 50
第 27 図　半地下式倉庫１・半地下式倉庫２　出土遺物実測図 51
第 28 図　半地下式倉庫３　平面図および土層図、立面図 53
第 29 図　半地下式倉庫３　出土遺物実測図１ 54
第 30 図　半地下式倉庫３　出土遺物実測図２ 55
第 31 図　半地下式倉庫４・溝１・溝２・溝５　出土遺物実測図 56
第 32 図　包含層・崩落土・盛土　出土遺物実測図 58
第 33 図　出土瓦実測図 59
第 34 図　鯱瓦実測図 62
第 35 図　３次調査・４次調査地周辺の古絵図（根来寺伽藍古絵図）..... 63
第 36 図　根来寺山内における調査地位置図 63
第 37 図　既往の調査及び子院想定図、大規模農道調査地及び３次調査地縦断面図 69

図　版　目　次

図版１～６　１次調査　図版７・８　２次調査
図版９～ 13　３次調査　図版 14 ～ 24　４次調査　図版 25 ～ 27　遺物

図版１
１　Ａ区 西半部遺構検出状況(東から)
２　Ａ区 遺構３土坑検出状況(東から)
３　Ａ区 南半部遺構検出状況(北東から)

図版２
１　Ｂ区 東西方向トレンチ全景(東から)
２　Ｂ区 遺構 11 土坑状遺構遺物出土状況(南東から)
３　Ｂ区 遺構7土坑･遺構8土坑･遺構9溝検出状況(北から)

図版３
１　Ｃ区 北半部掘立柱建物検出状況(南東から)
２　Ｄ区 西半部掘立柱建物検出状況(北西から)
３　Ｄ区 遺構 18 土坑検出状況(東から)

図版４
１　Ｅ区 遺構 24 溝･遺構 25 道路検出状況(北から)
２　Ｅ区 遺構 24 溝検出状況(南西から)
３　Ｅ区 基壇状遺構検出状況(北から)

図版５
１　Ｆ区 遺構 27 石垣検出状況(南東から)
２　Ｇ区 調査区全景(北から)
３　Ｇ区 遺構 30 暗渠排水溝･遺構 31 素掘り溝検出状況(東から)

図版６
１　Ｈ区 西半部遺構検出状況(北東から)
２　Ｈ区 遺構 32 石組井戸・遺構 33 土坑検出状況(北東から)
３　Ｈ区 遺構 33 土坑半裁状況(南西から)

図版７
１　Ｉ区 全景(南西から)
２　Ｉ区 遺構 42 雨落溝検出状況(東から)
３　Ｉ区 階段状遺構(南から)

図版８
１　Ｊ区 全景(西から)
２　Ｊ区 遺構 44 石組排水溝(北から)
３　Ｊ区 遺構 45 石垣(北から)

図版 9
1 調査前(北西から)
2 調査前(東から)
3 調査地伐木状況(北西から)
図版 10
1 Aトレンチ全景(南から)
2 Aトレンチ西壁土層堆積状況(北から)
3 Aトレンチ東端南壁岩盤露出状況(西から)
図版 11
1 Aトレンチ重機による削平痕(南から)
2 Bトレンチ全景(北から)
3 Bトレンチ北壁土層堆積状況(東から)
図版 12
1 Bトレンチ石垣検出状況(西から)
2 Bトレンチ階段状遺構検出状況(西から)
3 Bトレンチ階段状遺構検出状況(北上から)
図版 13
1 Cトレンチ全景(西から)
2 Cトレンチ石列1検出状況(南から)
3 Cトレンチ石列2検出状況(南西から)
図版 14
1 調査地全景(北西から)
2 調査地全景(南から)
3 調査地下段全景(北から)
図版 15
1 上段 井戸および溝6検出状況(北から)
2 上段 井戸および溝6検出状況(東から)
3 上段 井戸・溝6接合部(北から)
図版 16
1 上段 溝1検出状況(北から)
2 上段 溝1付近瓦溜まり状況(北から)
3 上段 現代盛土(北から)
図版 17
1 石垣・階段検出状況(西から)
2 上段 石垣・溝4検出状況(南から)
3 上段 石垣排水口(西から)
図版 18
1 上段 集水口1(東上から)
2 階段踏石検出状況(東上から)
3 階段南側石(北西から)
図版 19
1 下段 溝2・3検出状況(北から)
2 下段 集水口2検出状況(南西から)
3 下段 溜桝状遺構2(西から)
図版 20
1 下段 溝7検出状況(南から)
2 下段 溝5検出状況(南から)
図版 21
1 下段 半地下式倉庫1全景(西から)
2 下段 半地下式倉庫1焼土層検出状況(北東から)
3 下段 半地下式倉庫1内井戸状遺構半裁状況(南西から)
図版 22
1 下段 半地下式倉庫2全景(東から)
2 下段 半地下式倉庫2全景(西から)
3 下段 半地下式倉庫2貼り壁状況(南から)
図版 23
1 下段 半地下式倉庫3全景(南から)
2 下段 半地下式倉庫3甕埋設坑検出状況(南から)
3 下段 半地下式倉庫4検出状況(南東から)
図版 24
1 上段 調査区北壁土層堆積状況(南東から)
2 厓部ー下段 調査区北壁土層堆積状況(南から)
3 下段 整地土確認トレンチ土層堆積状況(北東から)
図版 25 ～図版 27 出土遺物

文 中 写 真

写真1 丘陵部の子院調査状況（昭和 63 年度大規模農道建設に伴う調査）..... 5
写真2 道路及び子院敷地検出状況（根来地区普通農道整備事業）..... 7
写真3 調査前（1次調査・2次調査）..... 11
写真4 C区遺構 17（1次調査）..... 15
写真5 E区遺構 26 土師器皿出土状況（1次調査）..... 17
写真6 昭和 63 年度出土鯱瓦（昭和 63 年度大規模農道建設に伴う調査）..... 61
写真7 航空写真（昭和 33 年撮影）..... 67

第１章　調査に至る経緯と経過

旧県会議事堂は、明治 31 年に和歌山市一番丁で竣工した木造２階建て、建築面積 937 ㎡の規模を誇る建築物で、県政の重要な舞台としてのみならず、公会堂や展示場として県民に親しまれていた。また、明治 44 年には夏目漱石が「現在日本の開化」と題した講演を行ったとされ、近代史を考える上で重要な舞台となった建築物である。その後、昭和 13 年に和歌山市小松原通に現在の県庁舎及び議場が完成したため、旧県会議事堂は保證責任和歌山県信用購買販売利用組合連合会（現和歌山県農協中央会）に委譲されて、昭和 16 年に和歌山市美園町に移築された。さらに、農協ビルの新築に伴い、昭和 37 年に現在地の根来寺境内に再移築されて、「一乗閣」と命名されて、現在に至る。

根来寺では、宿泊施設や文化施設として広く県民に開放して活用が行われていたものの、建物の損傷が進行した昭和 50 年代以降には活用されることが少なくなり、現在は使用されていない。しかしながら、現存する県会議事堂としては、国内２番目の古さ、和風県会議事堂としては、最古の建築物で、平成 17 年２月に国登録原簿に登載され、平成 17 年５月には県有形文化財として指定されている。

このような経過を経て現在に至る旧県会議事堂について、平成に入る頃から県政史の重要な記念碑的建築物として保存修理の実施と活用の要望が上がりはじめた。平成 15 年には保存修理や活用を目的として募金活動（「緑のサポーター事業」）が行われ、岩出町（現岩出市）を中心として約 5,000 万円の募金が寄せられた。

このような状況の中、県教育委員会においても、旧県会議事堂の保存修理を行うとともに、紀の川流域の文化財を保存活用する事業である紀の川緑の歴史回廊事業の拠点施設として活用するために、旧県会議事堂保存整備事業の計画を策定した。

その事業計画を実施するにあたり、現在一乗閣として旧県会議事堂を管理する根来寺及びその所在地である岩出市と協議を行うとともに、地元の要望を鑑みて、岩出市根来地内での旧県会議事堂の移転を検討した。

その結果、旧県会議事堂移転候補地として、菩提院西側の敷地があげられたため、平成 16・17 年度に埋蔵文化財の確認調査（１次・２次調査）並びに平成 18 年度にボーリング調査等を実施したものの、調査の結果、旧県会議事堂移転地として不適切であると判断された。

平成 17 年度以降関係機関による協議が行われ、いくつかの移転候補地が検討されたが、その間に、根来寺旧境内の一部は平成 19 年２月に史跡根来寺境内として指定され、平成 22 年２月に追加指定がされて、保存が図られた。そして平成 21 年度になると、３・４次調査を実施した敷地が現移転予定地として挙げられ、ボーリング調査を実施したのち、平成 22 年度に埋蔵文化財の確認調査（３次調査）を実施し、さらに予定地内で埋蔵文化財の遺存が確認できた西側約 700 ㎡余りの範囲の発掘調査を実施した（４次調査）。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

根来寺遺跡は和歌山県の北部、紀ノ川中流域の岩出市に所在する。岩出市の北側には和泉山脈が東西に連なっているが、この和泉山脈は大阪府と和歌山県を区切る東西約 60 ｋｍ、南北約 10 ｋｍの断層活動によって隆起した地塁性の山地で、西側にゆくにつれてその標高は低くなっている。また、大阪側の北麓は勾配が緩く広い裾野であるのに対して、和歌山側の南麓は中央構造線が走っているため急勾配となっている。根来寺遺跡はこの南麓に位置しているが、付近は麓でありながら先に述べた中央構造線の断層活動の結果、すぐ南に前山とよばれている独立山塊状の丘陵が存在しており、南北を丘陵に挟まれた一見盆地状の地勢となっている。

このような南北を丘陵に挟まれた地形は、天然の要害としての条件を備えたものと言える。ただし、後述するように根来寺の歴史的背景から、当初は真言密教の教学の場として開山されたとみられることから、創建当初から要害の地であることを意識して占地されたとは考え難い。しかし、中世末期、戦国時代になり情勢が緊迫すると、前山西端の山頂部、和歌山平野を一望する地点に櫓台を築いたり、稜線上に土塁を設けたり、あるいは前山の支尾根に堀切を設けていたことが既往の根来寺遺跡の発掘調査で確認されていることから、こうした地形を利用して防御施設を築いたとみられる。

また、根来寺にとって地理的要因で重要な点は、交通の要衝に立地しているという点である。根来寺から和泉山脈を越えて泉南地域に通じる往古の道については判然としていないが、地元の言い伝えでは、羽柴秀吉による根来攻めの際は、山内のなかでももっとも広く奥深い桃坂谷と呼ばれる谷筋に沿った道を攻め入ってきたと伝えられる。この道は、根来の北側の山中にある押川という集落を経て泉南に通じている道であり、泉南方面への最短距離にあたる。また現在、根来から風吹峠を抜け泉南方面に通じている県道泉佐野岩出線（県道 63 号線）のすぐ東側に並行するように根来往還といわれる古道があったといわれている。いずれにしても和泉山脈を隔てて泉南地域と隣接しており、根来寺が泉南地域への勢力の伸張をはかる上で利点となったであろうし、室町時代後期には商業地として栄える堺とを結ぶ道としても重要な役割を担ったものと考えられる。また前山の南側、紀ノ川北岸の河岸段丘や小扇状地は古くから開発が進んだ地域であり、古くは南海道が、近世になると淡島街道や大和街道といった主要道が通じていた。さらにこれらの道の南側を平行して流れる紀ノ川の水運をも考え併せれば、根来寺はまさに交通至便の地にあったといえる。

なお、気候的には比較的温暖の地であり、山険しく冬は厳寒の地である高野山に比べればはるかに居住に適した地である。ただ、根来寺周辺は瀬戸内式気候区に属し、年間降水量は県内でももっとも雨の少ない地域である。このことは中世以降、この周辺でいくつもの溜池が造営されたり、用水をめぐる紛争が頻繁に起こり、そのつど根来寺が積極的な働きをなしたことと無縁ではない。

第２節　根来寺の歴史的環境

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は平安時代の後期、興教大師覚鑁により根来の地に創建された寺院であるが、その前身は、覚鑁が高野山に開いた大伝法院にあると言われている。

大伝法院は時の上皇であった鳥羽上皇の手厚い庇護もあり、高野山上において隆盛を極めていたが、こうした覚鑁の活躍は次第に高野山にあった旧勢力、金剛峯寺方から反感をかうこととなり、両者の間で武力衝突さえ生じる事態となっていた。対立を避けるべく保延六年（1140）覚鑁は離山を決意し､根来の地に移住することとなる。離山するにあたって根来の地を選んだ理由は、根来が大伝法院領である弘田荘にあることと、この地にすでにあった豊福寺が大伝法院の末寺であったことによるものと言われている。根来寺の宗教的源流は、高野山に設けられた大伝法院にあるといえるが、在地に根差した根来寺としての出発点は、まさに覚鑁が根来の豊福寺内に円明寺を建立し、此の地に止住した時点と言えるであろう。このことを裏付けるようにこれまで数多くなされてきた根来寺山内の発掘調査のうち、山内の中心部、現在の円明寺付近では創建期前後の時期の遺物が確認されている。ただし、根来寺創建期以前の時期の遺物はまったくといっていいほど出土しておらず、このことから現在の山内と考えられている地域においては根来寺に先行するような遺跡はなく、人の手がはいった形跡は窺えない状況である。

覚鑁により創建された根来寺ではあるが、覚鑁は止住してわずか三年ほどで亡くなり、共に根来に下山していた衆徒の多くは高野山に帰山したと言われている。事実、これまでの発掘調査では、覚鑁没後の 12 世紀後半の遺物はほとんど確認されていない。覚鑁が建立したと言われる円明寺及び神宮寺の両寺は存続していたであろうが、規模を拡大するには至っていなかったことが窺われる。

根来寺の状況が大きく変わるのは、13 世紀後半である。高野山上において、金剛峯寺方との確執が再燃し、武力抗争へと発展する。とりわけ弘安九年（1286）の大湯屋騒動と呼ばれる抗争を直接的な契機として、正応元年（1288)、根来寺中興の祖と言われる頼瑜のもとで大伝法院が根来寺に移転することとなった。これを契機として山内に止住する衆徒の数も大きく増えたようで、発掘調査においても 13 世紀後半の代表的な遺物である瓦器椀や東播系の捏鉢の出土が目立って増えはじめる。

以後、根来寺は中世後期を通してその勢力を拡大していく。その勢力拡大の背景には頼瑜以降の後継者に恵まれ、円明寺を核とした学問研鑽の熱が盛んとなったことが言われているほか、いち早く北朝方を支持し、足利尊氏から和泉国信達荘を寄進されるなどの政治的な動向も考えられている。いずれにしても中世後期、根来寺では三尊像などの造仏事業や現存する国宝の大塔造立を行うなどその隆盛ぶりが窺われる。発掘調査においてもこの時期になると山内の至る所に子院が建てられていたことが判明しており、出土遺物については量的にもさることながら中国製の青

磁・白磁などの輸入陶磁器の多いことが特徴と言える。

こうした繁栄を極めていた根来寺も天正十三年（1585）の羽柴秀吉による根来攻めにより灰燼に帰してしまう。いわゆる「天正の兵火」と呼ばれているもので、この折の火災の凄まじさを示す焼土は山内の至る所で検出されている。兵火後焼け残った建物は、大塔・大師堂・山門などで、このうち山門については、羽柴秀長の郡山城に移築されたと言われている。昭和 63 年に実施された跡地の発掘調査（注１）において、三間 × 二間の規模を有する門であったことが判明しているが、ここでは焼土はまったく検出されていない。

天正の兵火後の復興は、慶長五年（1600）の徳川家康の復興許可を得てから行われたもので、江戸時代を通して子院の数も漸次増えていったものの、山内の平地部に限られていたようで、谷の奥深くではこの時期の子院は確認されておらず、中世根来寺の全盛時に比べればはるかにその数は少ないと言える。

1. 吉田遺跡　2. 山一遺跡　3. 中黒Ⅰ遺跡　4. 中黒Ⅱ遺跡　5. 山崎遺跡　6. 荒田遺跡　7. 荊本遺跡　8. 高塚遺跡　9. 岡田遺跡
10. 西国分廃寺（西国分塔跡）11. 西国分Ⅰ遺跡　12. 土器田遺跡 13. 西国分Ⅱ遺跡　**16. 根来寺遺跡**　17. 岡田Ⅱ遺跡　18. 山遺跡
19. 赤垣内遺跡　20. 波分遺跡　21. 畑毛遺跡　22. 東国分Ⅱ遺跡　23. 根来遺跡　24. 尼ヶ辻遺跡　25. 遍照寺境内遺跡

（和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図より転載）

第１図　根来寺遺跡の範囲と周辺の遺跡（S=1:40,000）

第３節　既往の調査

根来寺遺跡の発掘調査が開始されたのは、和歌山県農林部が計画した広域営農団地農道（以下、「大規模農道」という。）整備事業の建設計画が根来寺山内に及んだことに端を発する。昭和 51 年度に工事に伴う立会調査が実施され、天正の兵火時のものと考えられる焼土層から中世の遺物が大量に出土した。このため昭和 52 年度から３ヵ年の道路計画地の発掘調査が行われた[注２]。その後、建設計画は、根来寺開山の地である、覚鑁が高野山を離山して根来に止住した円明寺を通るということもあり一時中断していたが、建設ルートを円明寺の北側に迂回させることとなり、この工事に伴って昭和 63 年度から平成２年度まで３ヵ年の発掘調査が実施された[注３]。

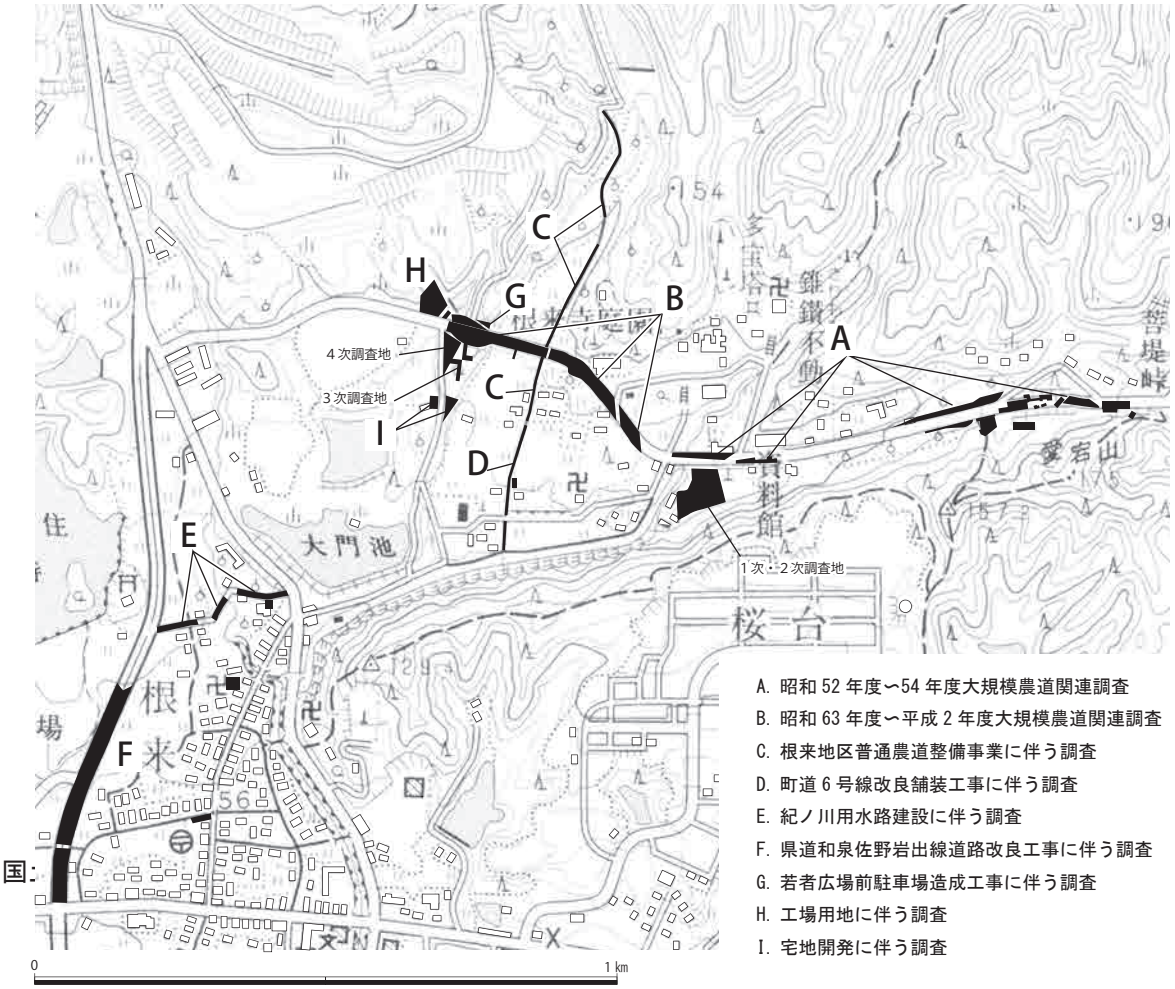
昭和 52 年度から本格的に始まった大規模農道建設に伴う発掘調査では、今回報告する１次・２次調査地の北側を調査している[注４]。１次・２次調査地や、その北側の大規模農道の発掘調査地は根来寺開山時の中心に近い平地部にあたり、大規模農道建設に伴う調査では、中世前期、中世後期、江戸時代の３時期の遺構が検出されている。この内、中世の遺構と天正の兵火にかかる時期の遺構は近世の復興期に削平されている例が多い。また、近世の復興期の子院敷地は天正の兵火時の焼土により整地されている例が多い。このように江戸の復興期の遺構が確認されるのは、開山時の中心部に近い平坦地や傾斜の緩い谷筋の平坦部分に限られ、瓦器を伴う中世前期の遺構を検出できる地点は開山の地である円明寺周辺のみにみられる傾向にあるが、根来寺全盛期の天正期の遺構は山内全域で検出できると言っても過言ではない。こうした状況を受け、保護資料を作成するため、県教育委員会では昭和 55 年度から平成元年度まで第一次 10 ヵ年計画を策定し、山内各所において発掘調査を実施した。この調査成果を引き継ぎ、その翌年から平成６年度までの第二次５ヵ年計画が策定され、山内の中心部において発掘調査が実施された。この第二次５ヵ年計画の最終年度である平成６年度の調査地[注５]は、今回の１次・２次調査地の北に隣接する箇所にあたり、埋甕や道路遺構が検出された。

また、昭和 59 年度から昭和 62 年度の４カ年で根来地区普通農道整備事業として蓮華谷の中央を南北に通る農道の拡張工事に伴う

写真１　丘陵部の子院調査状況（南から）
昭和 63 年度大規模農道建設に伴う調査

発掘調査が行われている[注6]。この調査では、対象地の現有道は根来寺全盛期の古道を踏襲していることが判明し、古道両側では子院敷地の石垣を検出しており、蓮華谷を南北に縦断する幹線道路であったことが指摘されている。また、この調査では鉄砲玉の素材とみられる鉛の地金も出土している。さらに、普通農道整備の南側延長部については、町道根来６号線改良舗装工事に伴い発掘調査を行っている[注7]。

今回の３次・４次調査地の北側では、大規模農道建設に伴い発掘調査が実施されている[注8]。３次・４次調査地は大規模農道によって寸断されているが、和泉山脈から南に派生する尾根筋の先端に位置する。その大規模農道建設の発掘調査では、丘陵西側に雛壇状に三段の子院敷地が確認され、遺構及び遺物は他の発掘調査で一般的に検出される子院遺構であった（写真１）。また、同様に丘陵部である昭和 53 年度の大規模農道関連調査のⅣ区では、東から西への段を造り出している子院敷地を３区画検出しており[注9]、中央の敷地の東側と南側の敷地境界は石垣を積まず岩盤が露出した状態であったようである。この状況は、根来寺の全盛時には平地部に子院を造営する余地がなくなり、造成を行い丘陵部にも子院築造を行うようになったことを示していると言える。



第２図　主な既往の調査位置図 (S=1:13,000)

国土地理院地形図 (1:25,000) に加筆

また、４次調査地の周辺で岩出市教育委員会が４ヵ所の調査を行っている。この内、平成13年度に若もの広場前駐車場造成工事として実施した調査地[注10]は、大規模農道整備に伴う発掘調査で検出した子院敷地の最上段の北側で、大規模農道に伴う調査で検出した最上段の子院の延長を検出している。また、平成12年度には４次調査地北西側の丘陵裾部を工場用地造成に伴う調査が実施[注11]され、道路や石垣などで区切られた子院敷地が検出されている。さらに４次調査地南側の現市道の西側を平成13年度[注12]に、東側を平成15年度[注13]に宅地開発に伴う発掘調査が実施され、共に天正以前と天正にかかる時期の一般的な子院遺構が検出されている。

その他寺院域以外の発掘調査として、昭和55年度に紀ノ川用水路建設に伴い町屋域の発掘調査が行われ[注14]、室町時代から江戸時代にいたる遺構、遺物が確認されている。検出された建物の間口は８ｍ程度の小規模なものであったことや、出土遺物から15世紀代に町屋が展開されだしたことが指摘されている。また、天正の兵火直後の遺物も出土していることから、兵火後時期を措かずして復興されたことが窺われる。出土遺物では漆塗の工房の存在を示唆する刷毛があり、漆塗製品も数点出土している。

さらに、平成５年度から平成７年度まで実施された県道和泉佐野岩出線道路改良工事に伴う発掘調査では、根来寺の城である西ノ山城の堀跡が検出されている[注15]。この堀跡からは遺棄された多量の石塔類が出土している。

写真２　道路及び子院敷地検出状況（南西から）根来地区普通農道整備事業

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

第１項　調査体制

旧県会議事堂移転予定地における確認調査を１ー３次調査として平成 16 年度、平成 17 年度、平成 22 年度の３ヵ年、発掘調査を４次調査として平成 23 年度に実施した。２次調査は県教育委員会が実施し、１次、３次及び４次調査は県文化財センターが受託して実施した。

調査組織は以下のとおりである。

○県教育委員会事務局

教育長	小関　洋治	（平成16年４月１日～平成19年３月31日）
	山口　裕市	（平成19年４月１日～平成23年３月31日）
	西下　博通	（平成23年４月１日～）
生涯学習局長	西畑　行庸	（平成16年４月１日～平成18年３月31日）
	井上　　誠	（平成21年４月１日～）
文化遺産課長	前山　哲雄	（平成16年４月１日～平成17年３月31日）
	藤井　保夫	（平成17年４月１日～平成19年３月31日）
	津井　宏之	（平成21年４月１日～）
副課長	藤井　保夫	（平成16年４月１日～平成17年３月31日）
（技術職）	武内　雅人	（平成17年４月１日～平成18年３月31日）（調査班長事務取扱）

○県文化財センター事務局

理事長	木村　良樹	（平成16年４月１日～平成18年11年２日）
	小関　洋治	（平成18年11月３日～平成22年３月29日）
	鈴木　嘉吉	（平成22年３月30日～平成23年５月26日）
	森　　郁夫	（平成23年５月27日～）
専務理事	岩橋　　驍	（平成16年４月１日～平成18年３月31日）平成16年度事務局長兼務
	白藤　正和	（平成22年４月１日～平成23年３月31日）
	小堀　基二	（平成23年４月１日～）
事務局長	熊崎　訓自	（平成17年４月１日～平成18年３月31日）
	田中　洋次	（平成22年４月１日～）
事務局次長	松田　正昭	（平成16年４月１日～平成17年３月31日）
	山本　高照	（平成23年４月１日～）管理課長兼務
埋蔵文化財課長	渋谷　高秀	（平成16年４月１日～平成18年３月31日）
	村田　　弘	（平成22年４月１日～）
管理課長	西本　悦子	（平成16年４月１日～平成18年３月31日）
	冨加見泰彦	（平成22年４月１日～平成23年３月31日）

第２項　調査の方法

１次、３次及び４次調査は和歌山県から委託を受け県文化財センターが実施した。２次調査は県教育委員会が行い、県文化財センターがこれを支援した。

調査地は１次・２次調査と３次・４次調査の２箇所に分かれる。

１次・２次調査対象地は、現在の旧県会議事堂が建っている場所から南へ約 150 ～ 200 ｍの地点で、南には東西に独立山塊の前山が迫り、その裾を菩提院川が東西に流れている。

３次・４次調査対象地は、現大門の北約 250 ｍ、北側の和泉山脈から派生する尾根の先端部分にあたり、東側は急勾配の崖となり、崖裾に沿って蓮華谷川が北から南に流れている。この尾根は大規模農道の建設によって切り離され、現在、調査地は独立山塊状を呈す。

1次調査　現況は水田および柑橘畑となり北東から南西に向かって大きく下降する。このため水田あるいは畑地には各々高低差がつき、調査の便宜上水田と畑地の一枚毎にトレンチを設定しＡ区～Ｈ区と呼称した。なお、トレンチは調査地の全容を把握できるように、幅３メートルを基本とする計 17 本を設定した。検出遺構は重複を避けるため通し番号を付した。遺物の取上げは各トレンチの西端あるいは北端を基点として５ｍ毎（15 ㎡）に行った。調査コードは 04 － 11・16 とした。

遺構の掘削は表土および耕作土については重機を使用して掘削・排土を行い、それより下層は人力掘削とした。包含層の掘削は最上位の遺構面の保護を図るため、一部を除き遺構面までの掘削に留めたが、トレンチの長辺に沿って、排水と以下の包含層の状況を把握する目的で側溝を掘削し確認を行った。検出した遺構については、原則として遺構の掘削は行わず、遺構の内容を確認するだけの最小限の掘削に留めた。

記録図面の作成は、まず平板による地形測量を縮尺 1/100 で行った。次に発掘調査で検出した遺構の平面図および土層図は基本的に縮尺 1/20 で作成したが、一部の個別遺構については必要に応じて縮尺 1/10 で行った。平面図はいずれも平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）を使用した基準線を基に作成した。

記録写真は４× ５判モノクロームフィルム、６× ７判モノクロームフィルム・カラーリバーサルフィルム、35㎜カラーリバーサルフィルム・ネガカラーフィルムを使用して撮影を行った。

2次調査　調査地は、１次調査地の最も高所であるＡ区の西側のＩ区と、Ｂ区の東側のＪ区である。１次調査の結果を勘案した位置に１次調査と同様に幅３ｍのトレンチを設定した。

掘削は最上層である耕作土から人力で行い、近世遺構も確認、保護対象とし、下層遺構の確認は近世遺構の所在しない範囲内で行った。遺構の掘削は原則として行わなかったが、意義のある遺構についてはサンプル的に遺構の半分程度の掘削を行った。また、すでに原位置を留めていない遺物については採取したが、埋甕のような遺構を構成する遺物については現地保存とした。遺

物の取上げは平面直角座標系（世界測地系）を基準にし、４ｍメッシュで取上げた。記録図面等の作成は１次調査に倣った。

3次調査　調査対象地の現況は竹林および雑木林で、これらの伐採作業を行った。次いで、丘陵全体の埋蔵文化財の遺存状況を確認するため丘陵頂部中央から北東にかけてＬ字形のトレンチ（Ａトレンチ）と南西側に逆Ｌ字形トレンチ（Ｂトレンチ）を設定した。トレンチの幅は底面で最低４ｍを維持した。Ｂトレンチ東西方向の西側斜面部で遺構が検出されたため、調査地の西側斜面部の遺構の残存状況を確認するため、Ｂトレンチの北側に同方向のＣトレンチを設定した。

遺構は石造遺構が主であるため、盛土は重機により慎重に掘削した。包含層の遺存していた箇所は人力で掘削を行い､遺構の上部である石造遺構の表面が確認できた時点で人力掘削を止めた。また、包含層の遺存しない個所で石造遺構が残っていると予測した場合は、遺構検出面の上位で重機掘削を止め、人力掘削とした。原位置を保っていないと思われる石材もこの時点では除去しなかった。

記録図面はトレンチ位置図を縮尺 1/100、遺構平面図を 1/20 で作成した。記録写真の使用フィルムは１次調査と同様のものにデジタルカメラを追加した。

調査地の地区割りは岩出市都市計画図ＶＩ－ＱＣ３４－１（1/2,500）の北東隅を基点（Ｘ＝-189000，Ｙ＝-62000）にして１㎞四方を大区画、この大区画を 100 ｍメッシュに十等分して中区画を設定し、次に中区画を４ｍメッシュに 25 等分したものを小区画として地区割りを行った。

各区画には東西方向を東からアルファベットで、南北方向を北から算用数字で表記した。

4次調査　４次調査は、３次調査で遺構を検出した範囲を対象として発掘調査を実施した。

３次調査で伐採した樹木および破砕したコンクリート殻の処分を行い、調査区を設定した。

遺構のほとんどは盛土および崩落土下で検出された。そのため、重機掘削は慎重かつ細心の注意を払いながら行い、３次調査の遺構検出面より若干上面で止めた。それより下層の包含層は、人力掘削で掘り進め遺構検出を行った。４次調査は当初記録保存を目的として発掘調査を開始したため、一部の遺構を完掘した。しかし、遺構の検出状況を鑑みて県教育委員会と協議の上、遺構の現状保存を視野に入れて､遺構の完掘を行わず､調査を遺構検出に止める調査方針に変更した。

記録図面の作成はすべて手測りで行った。遺構配置図は平板測量により縮尺 1/100 で、遺構平面図は縮尺 1/20 で、遺構断面図および立面図は縮尺 1/20 で行った。調査地の地区割りおよび遺物の取上げは３次調査のものを踏襲した。なお、記録写真のフィルムは３次調査と同様のものを使用した。

第２節　発掘調査の成果

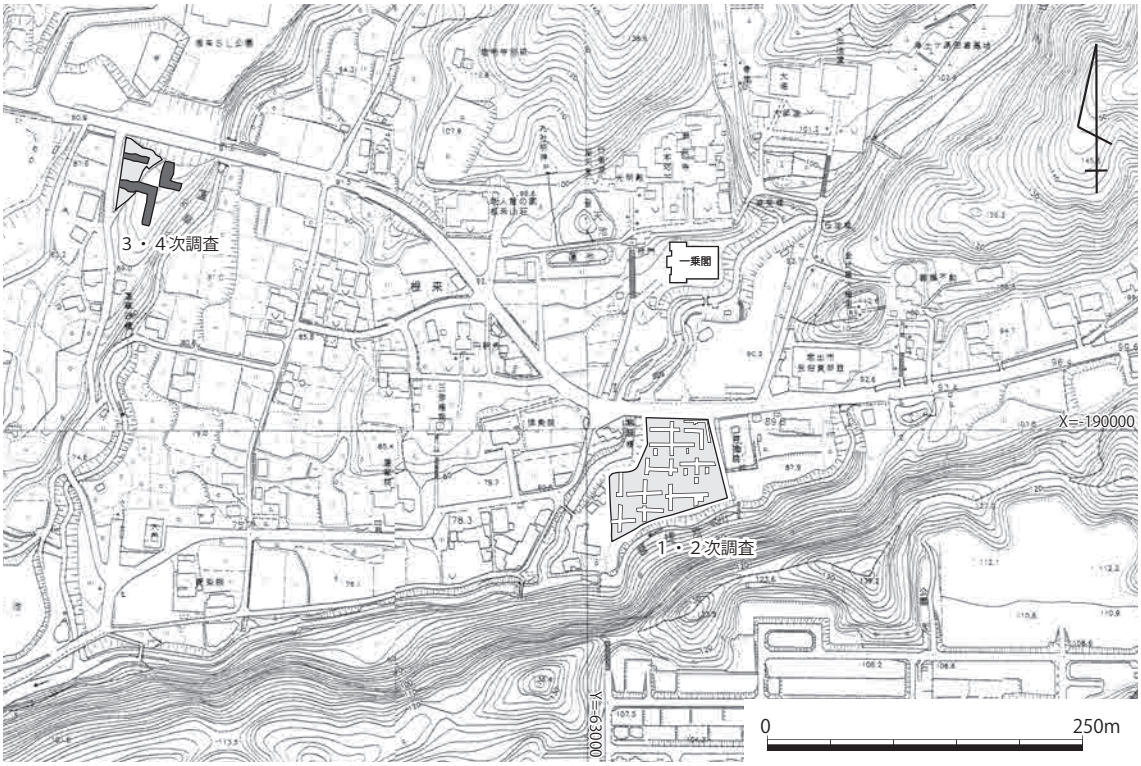
第１項　１次調査・２次調査（第３～12図、図版１～８）

１次調査と２次調査の調査区は隣接しているため、この項でまとめて報告する。

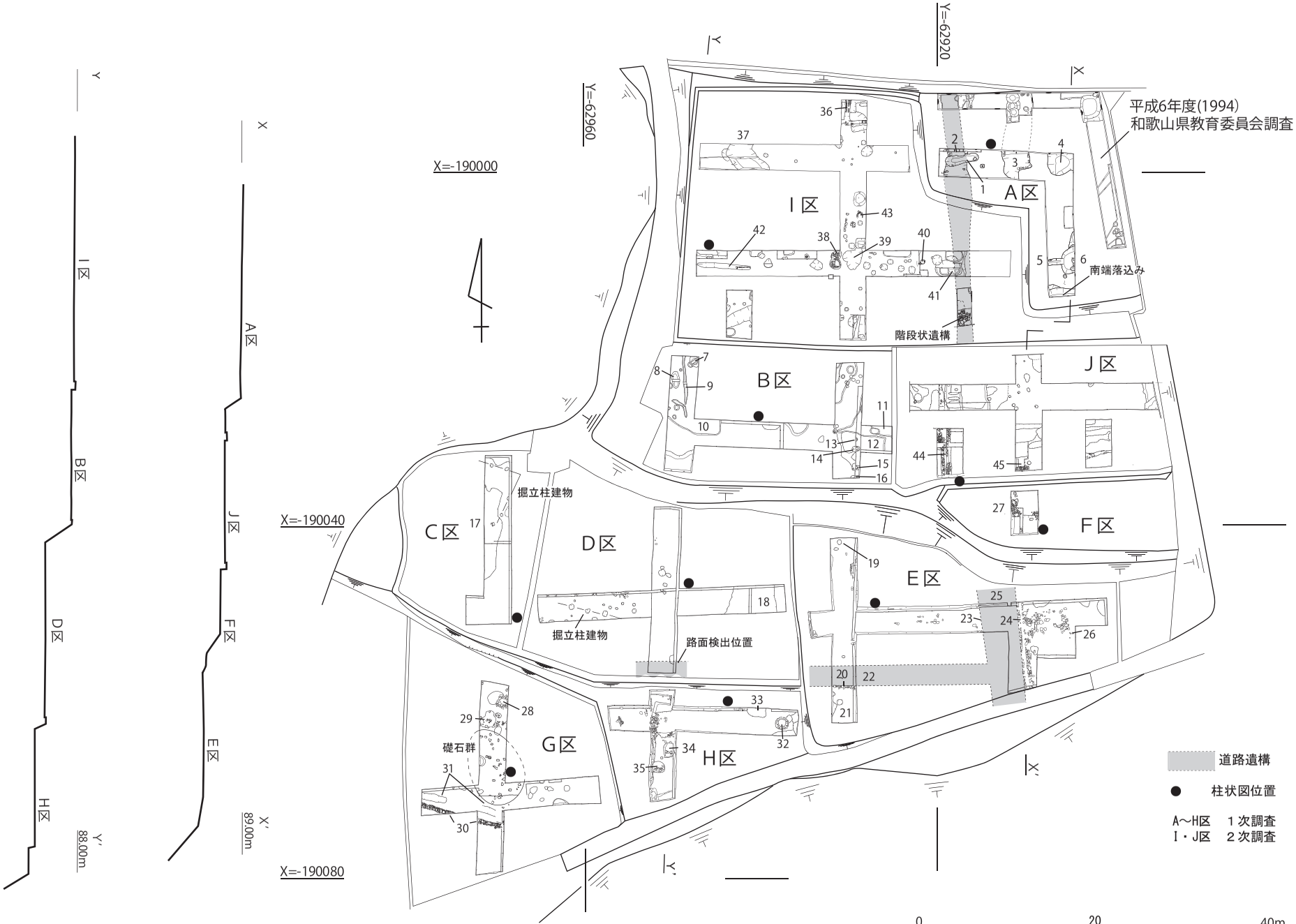
調査地は、御廟所（菩提院）の西側の低い小規模な尾根状を呈する地形の先端部で、西には大谷川、南には菩提院川が流れる。現状は水田および畑地で、この土地区画は一枚毎に高低差がみられ、北東方向から南西方向にかけて下降する。調査地は大きく４段に分けることができる。第１段に位置するのはA区であり、第２段目に位置するのは多少の高低差はあるもののＩ区、Ｂ区、Ｊ区、Ｆ区である。第３段はC区、D区、Ｅ区。第４段に位置するのがG区、H区である。段の平均的な標高は北から89ｍ、87ｍ、84.2ｍ、82.5ｍであり、調査範囲内で最も高い地点と低い地点の高低差は約７ｍを測る。

調査トレンチは現状の土地区画毎に設定した。調査面積は１次調査がＡ～Ｈ区の８箇所で合計約880㎡、２次調査はＩ区・Ｊ区の２箇所で合計約400㎡である。

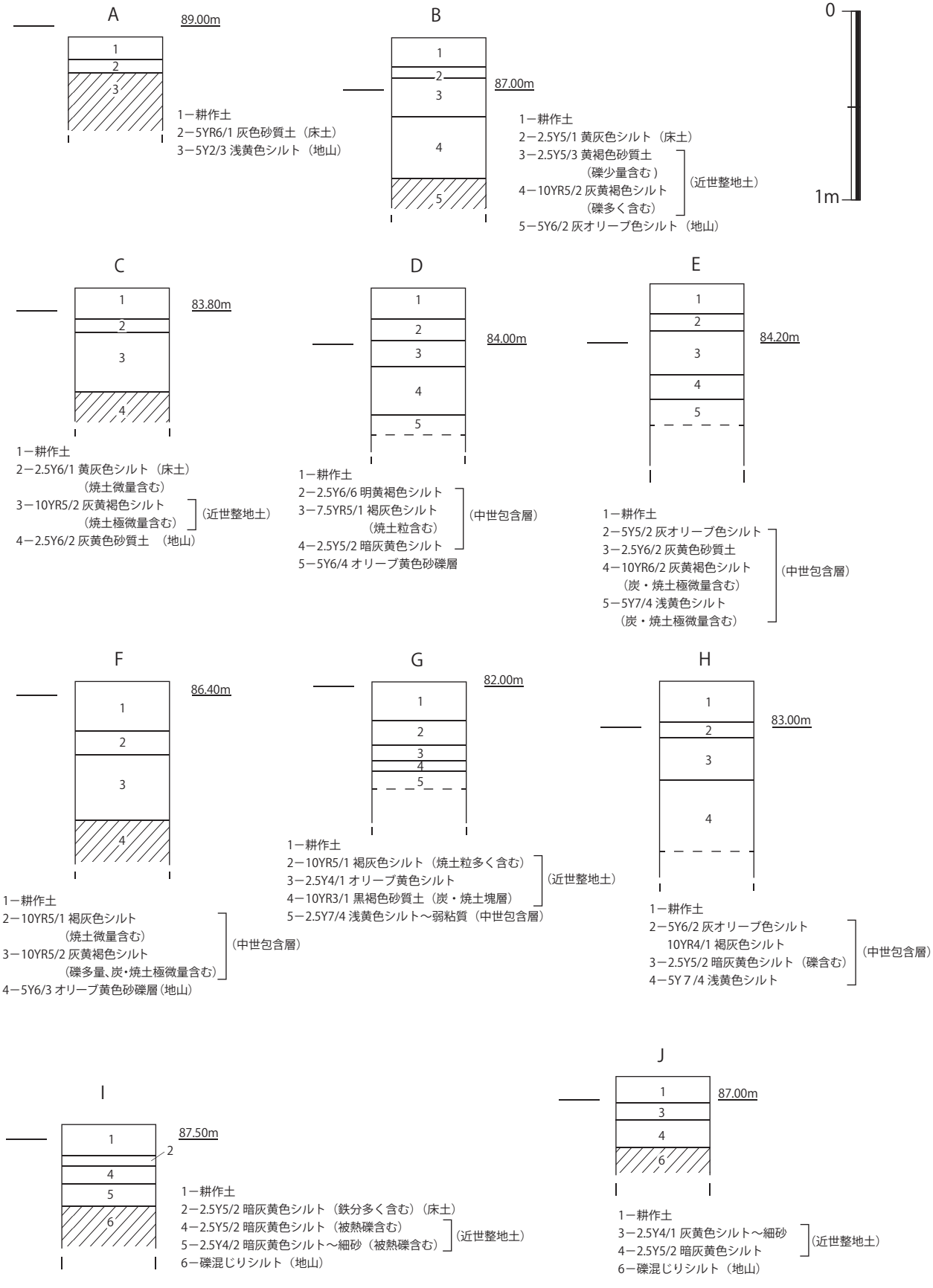
写真３　調査前（南東から）



第３図　１次調査・２次調査　調査地位置図（S=1:6,000）



第４図　１次調査・２次調査遺構平面図（S=1/600）



第５図　　１次調査・２次調査土層柱状図　(S=1/30)

検出した遺構は溝・土坑・井戸・石垣・道路・階段・基壇状遺構・掘立柱建物・礎石建物などである。時期は中世（13 ～ 15 世紀）および天正の兵火にかかる時期（16 世紀）、近世（18 世紀代）に大別できる。各区で検出した遺構番号を１～ 45 まで付しているが、遺存状況の良好な遺構を中心に記述する。なお、土層については調査時の層位名を踏襲した。

［A区］（第４・５・６図、図版１）調査区の中で最も高所に位置する。Ａ区で平成６年度に県教育委員会がトレンチ調査を行い(注５)、埋甕遺構と道路遺構、近世の土坑等が検出された。今回の調査区は平成６年度のトレンチの南側に設定した。耕作土下の第２層である床土は厚さ 0.1 ｍ前後を測る。南北方向の南半部の耕作土下は地山（第３層）となり、トレンチ南端で、地山が南に向かって急激に落込むことから建物敷地の南限に相当すると考えられる。南端落込み埋土から（１）ロ禿白磁皿が出土した。第２層出土遺物には土師器皿、中国製白磁・染付、瓦類などがあり、（２）は染付碗で体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、外面には草花文を描く。（３）も内湾気味に立ち上がるタイプの染付皿で、外面には唐草文が描かれる。遺構１は遺構２との重複関係から、遺構２に後出する溝状遺構である。検出長 3.75 ｍ、幅は 0.9 ～ 1.1 ｍを測る。深さは 0.1 ｍと浅い。出土遺物には土師器皿、中国製磁器、瀬戸美濃系陶器などがある。

遺構２は幅 1.6 ｍ以上で路面は石敷きを施す道路で、第３層（地山）上面で検出した。路面上は数㎝の厚さの焼土層が堆積していた。方向性、位置関係等から平成６年度調査で検出された道路遺構と同一遺構とみられる。路面の標高は 88.1 ｍ前後を測る。遺構２の東側は路面より約 0.5 ｍ高くなることから建物敷地の西限と考えられる。

遺構３は埋土・形状等から平成６年度調査検出の埋甕遺構と同一遺構とみられ、南側に進入部をもつ半地下式倉庫と考えられる。埋土中には炭および焼土塊が多量に含まれる。平面形状は長方形を呈し、規模は長さ 8.5 ｍ以上、幅 3.0 ｍを測る。なお、平成６年度調査の埋甕列は半地下式倉庫の西側に列状に据付けられていることが判明している。

［B区］（第４・５・６図、図版２）Ｂ区はＡ区より一段下位に位置する。層序の第２層は床土で第３・４層は近世整地層である。第３・４層は南北方向のトレンチの北側約 1/2 を除くほぼ全域にみられ、南に向かって次第に厚くなり、最大の厚みは 0.6 ｍを測る。第３・４層からは中世および近世の瓦類が多量に出土している他、近世の国産陶磁器も出土した。また、瓦器が他の調査区に比べ多く出土した。

調査区北半部の地山の第５層上面で検出した遺構７～ 12 は土坑状遺構や溝状遺構である。何れも深さ数㎝と遺存状況は良好でない。第５層上面検出遺構からは 15 世紀から 16 世紀前半にかけての遺物が少量出土した。

遺構 13 ～ 16 は調査区の南側の第５層上面で検出した掘立柱列である。掘形は一辺 0.6 ～ 0.8 ｍの変則な方形で、深さは約 0.6 ｍが遺存していた。また、掘形の底には最大で 40 ㎝ほどの石

が礎石として据えられていた。柱間は北から1.1ｍ・2.1ｍ・1.1ｍを測る。東西方向に棟を持つ掘立柱建物の一部と考えられるが、サブトレンチで検出した遺構であるためその全容は不明である。

Ｂ区から出土した遺物には(４～10)がある。(４)は第２層からの出土で、肥前糸磁器碗である。(５）～（８)・(10）は第３層出土遺物である。（５）は根来寺通有の土師器皿で16世紀代にみられるものである。瓦器椀（６）は口縁端部に沈線が巡り、外面のミガキは粗い。内面のミガキや暗文は摩耗が著しいため不明である。（７）の青磁碗は縦線のみで剣頭は省略され、蓮弁の意識のないものである。（８）は備前焼壺である。口縁端部から頸部にかけて草緑色の自然釉がかかる。(10）の軒桟瓦にはキラコが凹面を中心に付着し、瓦当面にも付着する。軒平部は均整唐草文、軒丸部の意匠は弁を意識している。（９）は土坑状遺構（遺構11）から出土した常滑焼甕である。いわゆるＮ字状の口縁を呈し、口縁端部内面には灰が被る。

第２層は18世紀代、第３層も瓦器などの中世遺物を主体とするが、軒桟瓦も出土したことから第２層と時期差はないと考えられる。第５層上面検出遺構については出土遺物などから15世紀代から16世紀前半に帰属する公算が高い。

[C区]（第４・５・６図、写真４、図版３）Ｄ区およびＥ区と共に３段目に位置するが、地形的にはＥ区からＣ区に向かって緩やかに低くなる地形を呈す。また、Ｂ区との比高差は約3.3ｍを測る。

第２層は床土で、調査区北側半部は床土下で地山（第４層）となる。一方、南側は南方向に下降し、焼土粒や炭を少量含む整地層と考えられる第３層が存在する。この第３層出土の遺物には土師器皿（乳白色を呈するものが多い）などが目立ち、中国製磁器、瓦質土器、瓦などを少量含む。遺構は北側の第４層上面で土坑と柱穴を検出した。

遺構17は第４層上面で検出した土坑である。平面形状は検出した範囲では羽子板状を呈する。検出長は約11ｍ、幅は北側で約1.4ｍ、南側で約2.0ｍ以上を測る。埋土には多量の焼土粒と少量の炭が含まれ、土師器皿、輸入磁器、備前焼、瓦類などの15世紀から16世紀中葉と考えられる遺物が出土した。遺構埋土の約1/2を掘削したところ、焼土層の下層に礫層を確認した。礫は５～20㎝大のものがほとんどであるが、中には50㎝以上のものも含まれる。礫層は遺構の保存のため掘削を

写真４　Ｃ区遺構17（北から）

行わなかった。遺構の形状や規模、埋土の状況から遺構 17 は半地下式倉庫と考えられ、羽子板状の北側は柄の部分で昇降路と考えられる。礫層は半地下式倉庫を廃棄するに当って投棄された礫群とみられる。トレンチ北半の第４層上面で柱穴４基を検出した。掘立柱建物の一部と考えられる。柱穴の規模は径 0.3 ～ 0.4 ｍを測り、埋土は焼土粒に炭が混ざる。

［D区］（第４・５・６図、図版３） Ｃ区の西側に隣接する。Ｃ区と同様に３段目に位置するが、現地表面はＣ区より約 0.3 ｍ高くなる。

包含層は第２層～第４層に大別できる。各層の上面を遺構面とする３面以上の遺構面が想定できる。しかしながら、東西トレンチの西端と東端の第２層上面で柱穴と遺構 18 を検出したため、東西トレンチ東半部と南北トレンチは第２層上面までの掘削とした。なお、遺構が検出されなかった東西方向トレンチ西半部では第４層上面まで掘り下げ、第２層以下の状況を確認した。東西トレンチ、南北トレンチでの側溝部分で第２・３層を掘下げたところ、土師器皿の破片が多量に出土した。その他には微量ながら瓦器、瓦質土器、輸入磁器、備前焼、常滑焼、瓦類などが出土した。出土遺物から第２層と第３層は 15 世紀代を中心として 16 世紀前半を下限とし、時期差がないと判断している。第２層からは（11）の青磁碗が出土している。外面は無文で口縁が外反するタイプのもので 15 世紀前半に帰属する。

遺構 18 は第２層上面で検出した方形を呈すると考えられる土坑である。規模は６ｍ × ３ｍ以上である。側溝部分とサブトレンチで埋土を確認した。上層は多量の焼土粒が混じり、下層は礫層となることから、Ｃ区で検出した遺構 17 と埋土の状況が酷似する。サブトレンチからは土師器皿、備前焼、常滑焼、瓦質土器、瓦類などが出土した。形状及び焼土から半地下式倉庫と考えられる。

東西方向トレンチの西半部において、第４層上面で柱穴群を検出した。このうちの３基は約２ｍの柱間で直線上に並び、掘立柱建物の一部であると考えられる。柱穴掘形は直径 0.6 ｍ前後を測り、比較的規模は大きい。

南北方向トレンチの南端の側溝では第４層下面で路面と考えられる層を確認した。この路面層の上層は微細な礫を多量に含む砂質土、下層は粗砂を含む小礫層で、共に固く締まっている。側溝で確認したのみで、平面的に確認していないため断定はできないが、幅 1.6 ｍ以上で東西方向に延びる道路と考えられる。なお、路面の標高は 83.8 ｍである。

［E区］（第４・５・６図、写真５、図版４） Ｃ・Ｄ区と同じ３段目に位置し、Ｄ区の東側に位置する。１次調査では最も面積の大きい調査区である。調査の進展に応じて東側で調査範囲の拡張を行った。

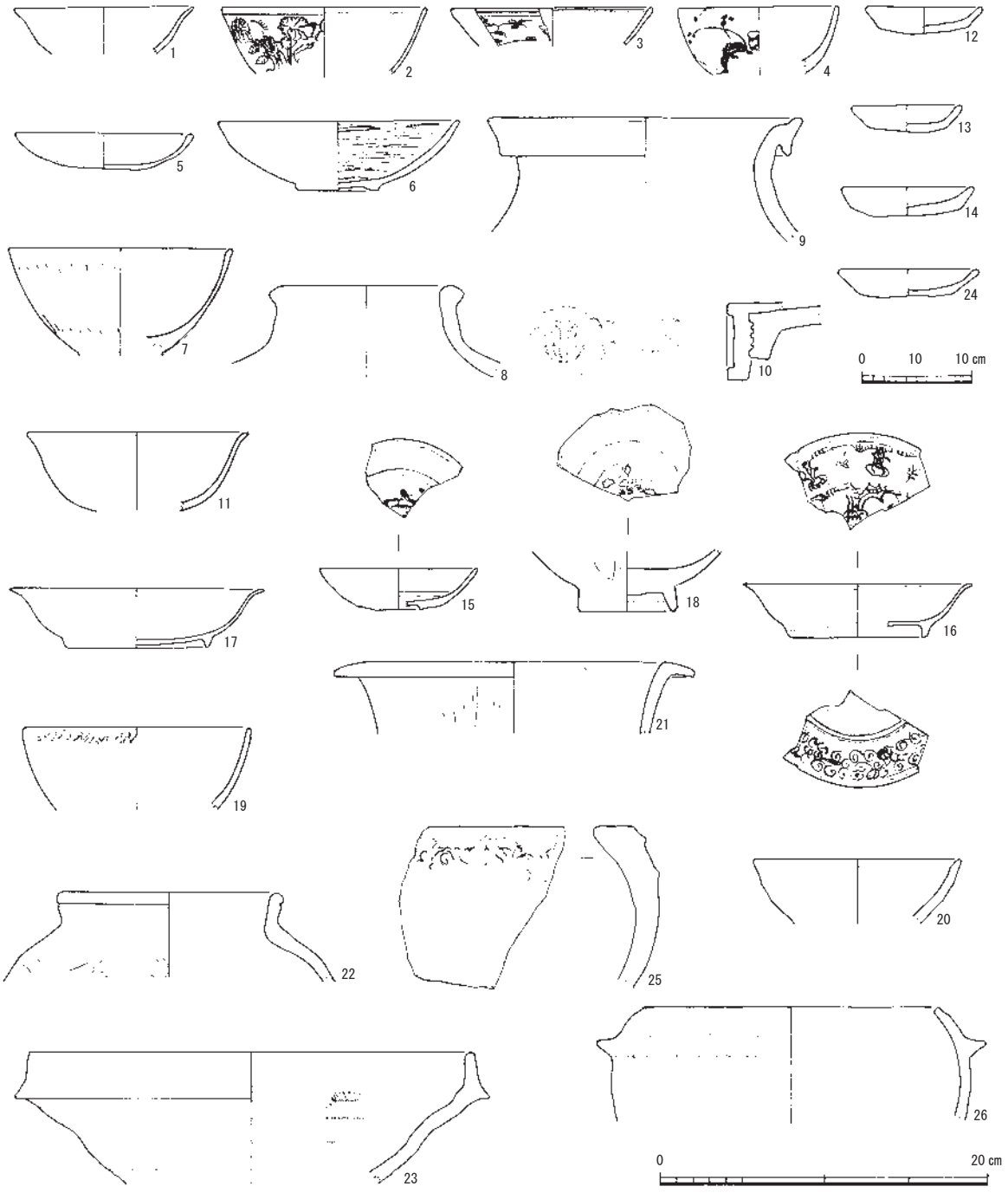
包含層は４層以上に大別できる（第２層～第５層）。いずれの層にも炭および焼土粒が含まれるが、その量は他の調査区の包含層に比べて少ない。出土遺物は土師器皿を主として、備前焼、瓦

類が多い。(15・22) は第２層出土遺物で、(15) は碁笥底の染付皿、(22) は備前焼壺である。肩部には櫛による波状文を施す。第３層出土遺物は (16 ～ 21・23) で、(16) は口縁の外反する染付皿で、外面体部には密な渦状唐草文が描かれ、内底から内面体部にはアラベスク風の窓を配し、その周りも外面同様の文様を描く。高台畳付から高台内面にかけて硅砂状のものが付着する。(17) は白磁の端反皿である。色調は灰白色を呈する。(18・19) は青磁碗である。(18) は淡い草緑色を呈し、鑿による蓮弁がみられ、高台内面途中まで釉がかかる。見込には印花がみられる。15 世紀前半に帰属する。(19) は線描蓮弁文で、剣頭も波打つように尖る。(20) は瀬戸美濃系の天目茶碗である。(21) は瓦質の火舎である。口縁はほぼ直角に外反する。外面には丁寧な縦方向のミガキを施す。(23) は備前焼擂鉢で、９本一単位の擂り目である。出土遺物から第２層には碁笥底皿も混じるが口縁の肥厚する土師器皿などから 16 世紀中葉を、第３層は線描蓮弁文青磁碗等が認められることから 16 世紀前葉を下限とすると考えられる。第４層・第５層は側溝での部分的な調査しか行っていないため詳細は不明であるが、15 世紀後半の遺物が少量出土した。

遺構は第３層上面で検出した。遺構 19 は南北トレンチの北端で検出した遺構で、土師器の完形の皿が４枚埋置された状態で出土した。出土状況から地鎮に伴う土坑と考えられる。(12 ～ 14) は口縁の肥厚するタイプのもので、(14) の口径８㎝程度のものが一般的であるが、(12・13) は口径 6.5 ㎝とやや小さい。遺構 20 は大きさ 20 ～ 40 ㎝大の砂岩礫の石積みが２段分遺存する遺構で、石面を北側に積んでいることから、基壇遺構の北辺の石積みの一部と考えられる。この基壇遺構の上面では一辺約 0.6 ｍの方形の掘形の遺構 21 (柱穴) を検出した。また、東壁面においても同規模の柱穴を確認している。遺構 22 は調査区の西端トレンチの東面の土層観察によって確認した道路遺構で、道路は遺構 20 (基壇遺構) の北側に沿って東西方向に延びる。路面には砂礫が敷かれ、幅は 2.2 ｍ前後を測り、検出した標高は 84.2 ｍである。遺構 23・24 はともに石組溝である。２本の溝は南北方向に並行して構築され、その間は約 3.6 ｍを測る。遺構 23・24 の間は上層から砂礫層、砂層、小礫を含む砂質土で各々の層を締め固めて構築した路面が認められることから遺構 23・24 は側溝として機能し、その間は道路 (遺構 25) と考えられる。遺構 25 は中央部がやや高くなる凸状断面を呈する道路遺構である。検出した

写真５　Ｅ区遺構 26 土師器皿出土状況 (北から)

標高は 84.2 ～ 84.3 ｍを測り、方位はＮ－５°－Ｗである。側溝 23・24 は双方ともに幅 0.3 ～ 0.4 ｍで、石積みの遺存状況は良好でないが、東側の側石から東に 0.6 ｍ隔てて、一部に面をもつ石列を検出した。土塀の基底部の可能性が考えられる。また、遺構 24 の東側において、埋土に多量の焼土が混じる土坑数基や、建物の礎石と思われる石を数個検出した。さらに、調査区東端では遺構 19 と同タイプの土師器皿を 14 枚以上埋置した遺構 26 を確認した。遺構 26 は、遺構 25 以東の敷地に伴う地鎮遺構と考えられる。



1～3：A 区、4～10：B 区、11：D 区、12～23：E 区、24～26：F 区

第６図　A・B・D～F 区　出土遺物実測図

［F区］（第４・５・６図、図版５）　Ｂ・Ｊ区と同段に位置するがＪ区より約 0.4 ｍ低い。

第２層は北半部と南半部では色調がやや異なるが、出土遺物の時期や土器の種類は同じである。第３層は後述の石垣（遺構 27）の南側にのみ堆積する。第２・３層からは 16 世紀代の土師器皿を主として、瓦器、陶磁器、瓦類が出土した。（24 ～ 26）は第２層からの出土遺物である。（24）は（14）と同様の口縁端部の肥厚する土師器皿である。（25）は瓦質火鉢である。器面は著しく摩耗し、調整は不明である。外面口縁直下に２条の突帯が巡り、その間に篦先による模様があるが不鮮明である。（26）は瓦質羽釜で、短い鍔の接合部は強いナデを施しながら体部に貼り付けている。外面口縁端部にわずかに浅い段が付く。

第４層上面で検出した遺構 27 は東西方向に延びる石垣である。大きさ 40 ～ 50 ㎝の砂岩の石積みが２段遺存しているのみで、中央部では石積みが約 1.4 ｍ幅で検出されなかった。このため中央部に断割り調査を行ったが抜き取りの痕跡は確認できなかった。このことから、当初より石積みが検出されなかった部分には石垣は築かれておらず、通路として利用されていた可能性が考えられる。

［G区］（第４・５・７・８図、図版５）　今回の調査区でもっとも標高の低い最下段に位置する。３段目に位置するＣ区との比高差は約２ｍを測る。

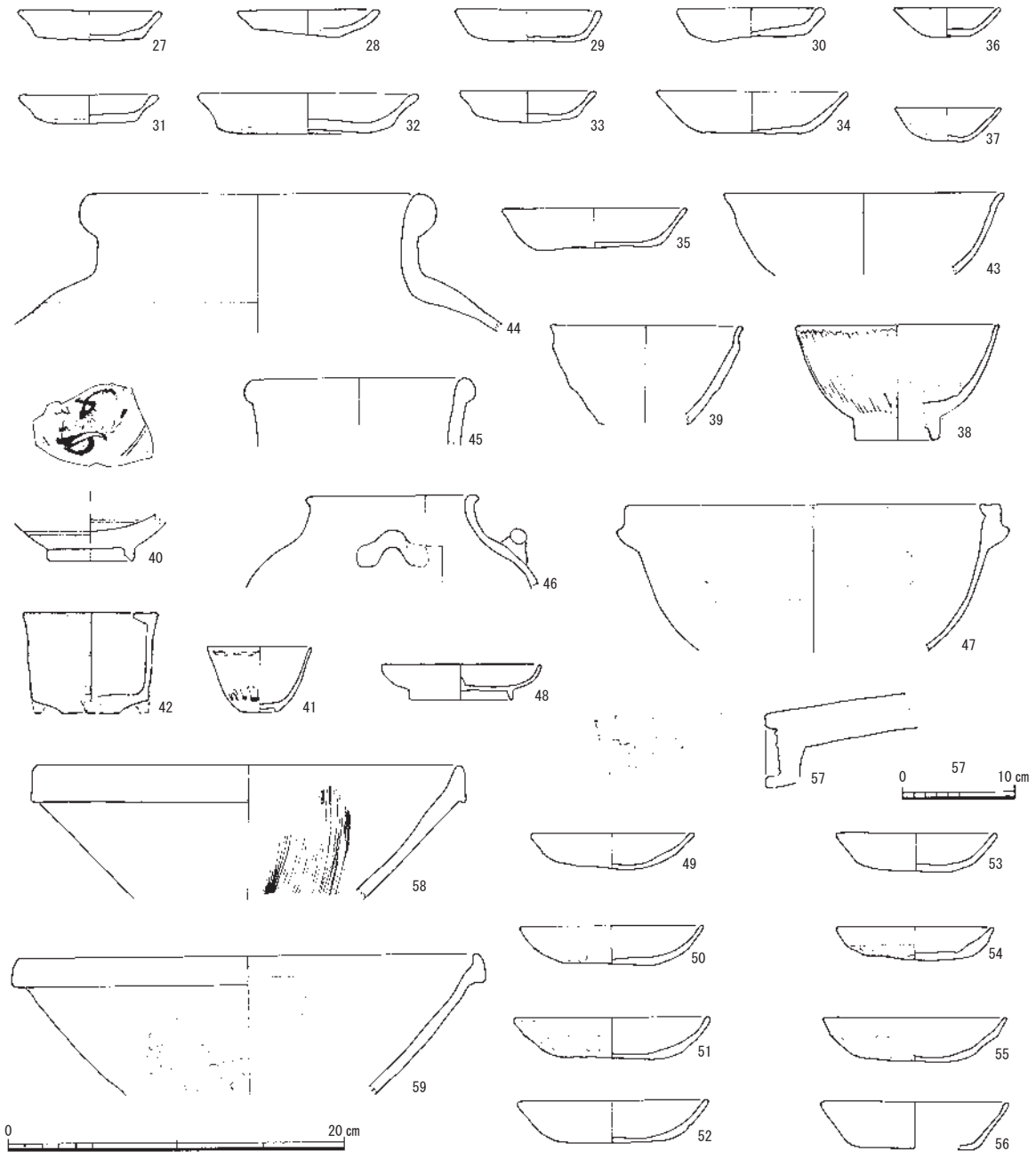
整地土は第２層～第４層の３層以上を確認し、このうち第４層は焼土塊、焼土粒や炭を多量に含むいわゆる天正の兵火時の焼土層であり、この焼土層の上下には第３層・第５層の黄色シルト層がある。なお、第５層上面はよく締まり、熱を被け赤色化している。第２層には土師器皿、瓦器、輸入磁器、備前焼、瓦質土器、瓦類が、第３層・第４層には土師器皿、瓦器、備前焼、常滑焼、輸入磁器、瓦質土器、瀬戸美濃陶器、瓦類など多種多様な遺物が含まれる。第２層から出土する遺物量は第３層・第４層に比べて少ない。

第２層～第４層は天正の兵火時以降の整地土と考えられ、特に第４層はその土質等から火事場整理の整地土と考えられる。13 世紀代から天正の兵火直前の時期までの遺物を包含する。遺構検出は基本的に第３層上面で行ったが、南北トレンチの北半部のみ第４層まで掘削を行い、第４層上面と第５層上面でも遺構の検出を行った。

第２層からは線描蓮弁文の小振りの青磁碗（38）が出土した。見込に篦先で線刻模様を施す。第３層からは（33 ー 37・39）が出土した。（33 ～ 35）は土師器皿で、（34・35）は根来寺では白土器と称しているもので、乳白色を呈し、極めて水簸度の高いものである。外底部は指押え、体部の内外面は丁寧な横ナデによる調整がなされ、口縁部は強い横ナデを施す。（36・37）はヘソ皿の類で底部を僅かに凹ませる。色調は肌色を呈する。（39）は瀬戸美濃系の天目茶碗である。体部下半の露胎部分はオニイタにより化粧掛けを施す。第４層からは（40 ～ 43・45 ～ 47）の遺物が出土した。（40）は染付碗で畳付は釉を拭き取る。見込には草花文が描かれている。（41）は

染付の小杯である。体部下半には蓮弁を意識したかのような連続文様がみられる。(42) は青磁香炉である。足が欠損しているが、おそらく欠損部分の膨らみから４足と思われる。(43) は白磁碗で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。(45) は備前焼の壺である。口縁部は玉縁状を呈し、外方向に折り返す。(46) は鉄釉の壺で、四耳壺になるものと思われる。(47) は土師質羽釜で、口縁端部は内折し、短い鍔を口縁部直下に付す。胎土には１㎜内外の細かな砂粒が多量に含まれる。

Ｇ区で検出した遺構には、石組井戸、土坑、柱穴、溝、礎石建物などがある。



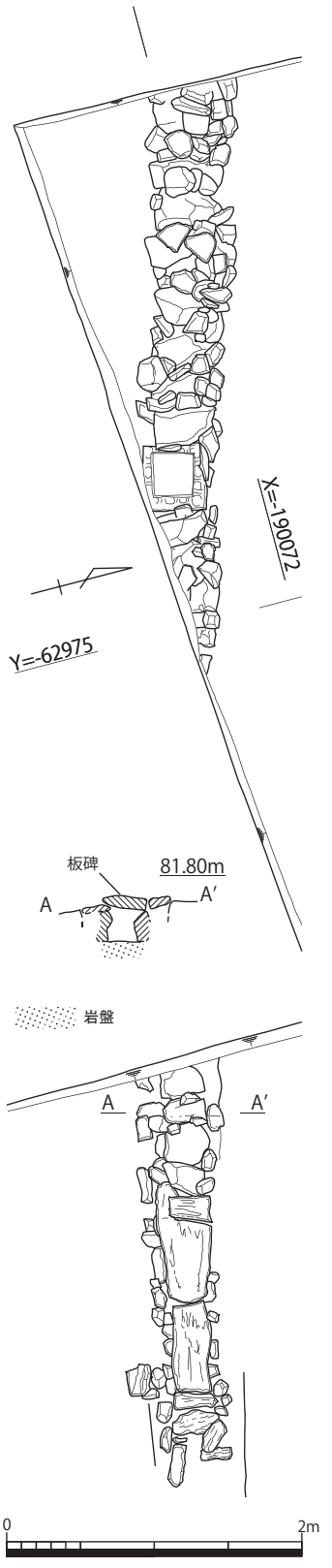
27～48：Ｇ区、49～59：Ｈ区

第７図　Ｇ・Ｈ区　出土遺物実測図

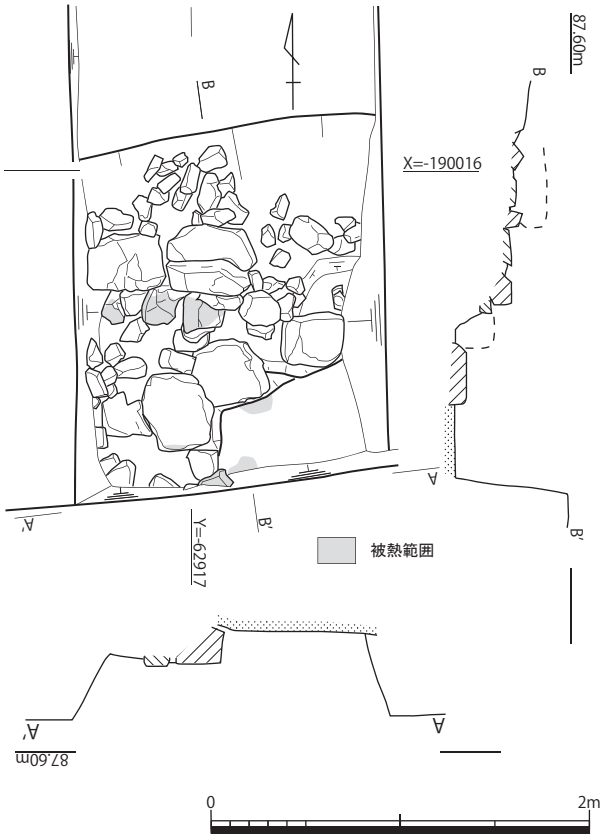
遺構 28 は第５層上面で検出した石組井戸である。内径は約 0.7 ～ 0.8 ｍを測り、積石は 20 ～ 40 ㎝程度の砂岩を用いている。ここからは乗岡編年中世６期の備前焼甕が出土した。遺構 29 も第５層上面で検出した土坑である。埋土には第４層同様に炭や焼土を多量に含む。遺構内の掘削は行っていないが、最上層からは 16 世紀後半の土師器皿や備前焼壺、銅製の燭台などが出土した。(27 ～ 32) は土師器皿である。灯明皿として使用した痕跡は認められない。(32) は他に比べ径の大きいもので、量的に少ない。(44) は大形の備前焼壺で、口縁端部を外側に折り返し玉縁状にしている。肩口には浅い三筋がめぐり、頸部下から肩部にかけて胡麻状の灰が被る。(48) は銅製燭台である。皿の中央に蝋燭を立てる芯が付く。遺構 30 は調査区の南で検出した暗渠排水溝である。一部で断面を確認したところ、内幅は約 0.2 ｍ程度、深さは 0.25 ｍ、掘形の幅は 0.65 ｍを測る。蓋石には砂岩や片岩のほか、五輪塔の地輪、板碑といった石塔の類が転用されている。また、確認した範囲内では東側は片岩、西側は砂岩を使用し、石材の使い分けが行われていた。周辺の地形の状況や蓋石上の高さから東から西に流していたようである。遺構 31 は遺構 30 の北側で 0.4 ～ 0.6 ｍを隔てて検出した同方向の素掘り溝である。南北方向のトレンチの遺構 30（暗渠排水溝）以北で大きさ 30 ～ 40 ㎝の 20 個余りの礎石群を検出した。これらの礎石は第４層と第５層の上面で検出し、少なくとも２時期の建物の存在が考えられる。礎石群の南端で地鎮遺構と考えられる複数の土師器皿が埋置されている状況を検出した。元々は５枚以上の土師器皿が埋置されていたと推測できる。

[H区]（第４・５・８図、図版６） Ｇ区の東側に位置し、Ｇ区より約 1.2 ｍ高い。

包含層は第２層～第４層の３つの層に大別できる。出土遺物の時期は第２層が 15 世紀後半ー 16 世紀中頃、第３層は 15 世紀代、第４層は 13 世紀後半ー 15 世紀代と考えられる。遺構は東西トレンチでは第３層上面、南北トレンチ南半部では



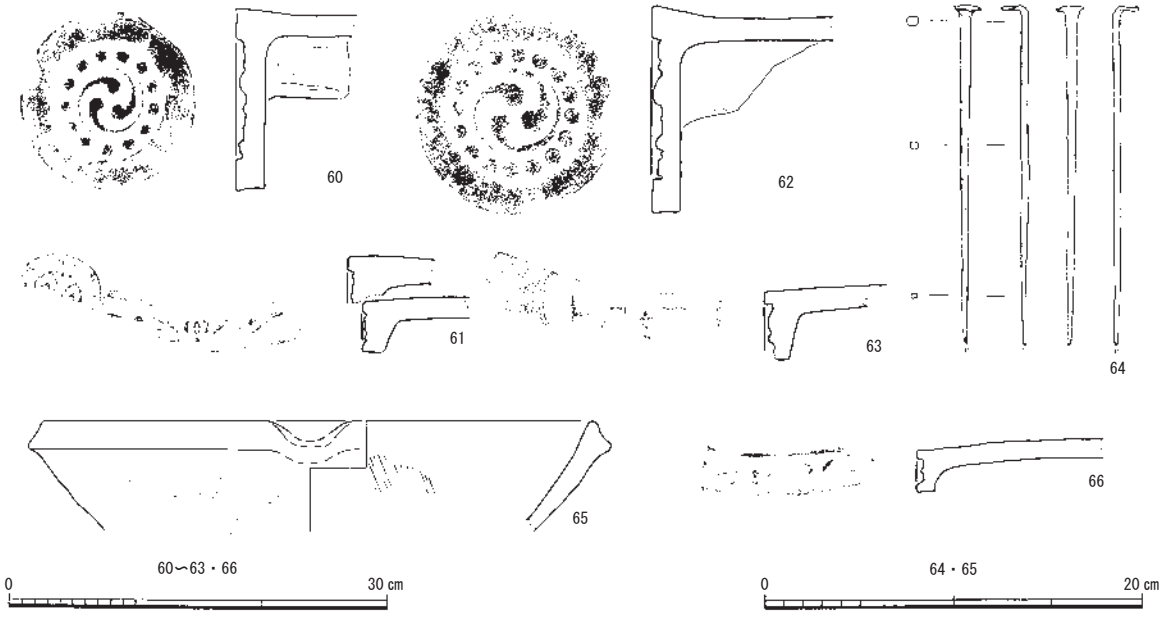
第８図　Ｇ区遺構 30
平面図及び断面図 (S=1/50)



第９図　Ｉ区階段状遺構　平面図及び断面図 (S=1/40)

第４層上面で検出した。第２層からは（54・55・58）が出土した。（54・55）は白土器である。（58）は瓦質擂鉢で火を受けている。擂り目の一単位の幅は約５㎝で、28 本の櫛目が入る。第３層からは土師器皿、白土器、瓦質土器、瓦など、第４層からは土師器皿、白土器、瓦質土器、瓦器、瓦などが出土している。

遺構 32 は第３層上面で検出した石組井戸である。内径は約 0.8 ｍで、1/2 の範囲を約 0.6 ｍ掘下げた。埋土には炭や焼土塊、焼土粒が多量に混じり、（49 ～ 53）の土師器皿等の 16 世紀代の遺物が出土した。（49 ～ 52）は口縁直下に強い横ナデを施すタイプのもので、（50）の口縁端部には８箇所の煤付着がみられる。（53）には通有のタイプにみられる口縁直下の強いナデは無く、緩やかに外方に立ち上がる。また、色調も肌色である。（57）の軒平瓦は瓦当上縁の面取りを行っている。顎部裏面には横ナデ調整がみられる。遺構 33 は第３層上面で検出した東西約２ｍ、南



60、61・64：Ｉ区、62・63：Ｉ区遺構 37、65：Ｊ区、66：Ｊ区遺構 44

第 10 図　Ｉ・Ｊ区　出土遺物実測図

北１ｍ以上、深さ約 0.6 ｍの土坑である。西側 1/2 の範囲の掘削を行った。埋土には炭、焼土塊、焼土粒が多量に混じる状況や、出土遺物の内容は遺構 32 と同様である。遺構 34・35 は第４層上面で検出した。共に深さ 0.1 ｍ前後の円形を呈する土坑で、主として 15 世紀後半の遺物が出土した。遺構 34 からは（56）白土器と（59）東播系捏鉢も出土した。（59）は口縁部を上下へ拡張するため内面に強い横ナデ痕が巡る。体部外面には横方向の指頭痕が目立つ。口縁の形態から 14 世紀前半と考えられる。

［I区］（第４・５・９・10 図、図版７）　１次調査で実施したＡ区西側に位置する調査区である。

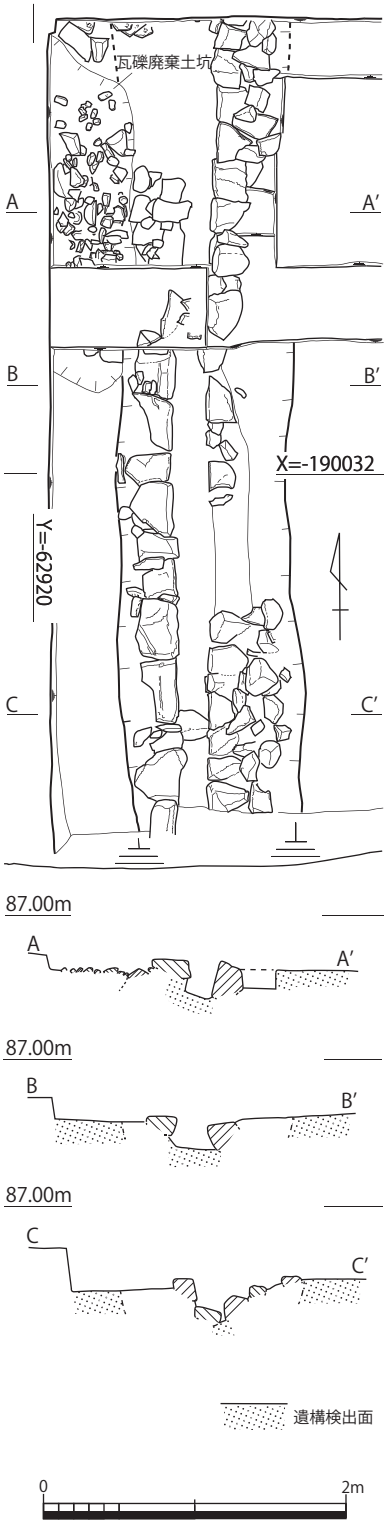
調査地南端の東側と西側に、平成６年度調査と１次調査で検出した道路遺構（遺構２）の続きを確認するために小トレンチを設定した。現状は水田で、調査区の北側および東側は耕作土（第１層）を除去すると礫混じりのシルト質地山（第６層）となる。地山層は南および西へ傾斜する緩斜面となり、第４・５層の整地土により現状の平坦面が造成されている。東西トレンチ西端では、第２層は床土で下部には鉄分が沈着する。第３層は粗砂混じりのシルト層、第４層は 17 世紀から 18 世紀後半の遺物を包含する整地層である。第５層は 16 世紀後半までの遺物を含む均質な土壌である。柱状図作成位置では第３層は確認できないが、作図地点から東側には４～６㎝の厚みで堆積する。第２層からは（61）の軒桟瓦と（64）の瓦釘が出土した。（61）は（10）と同笵である。第４層からは（60）の軒丸瓦が出土した。周縁の幅が広く、連珠は 13 個である。

第４層上面で検出された雨落溝、竈状遺構、埋甕、埋桶、礎石の抜き取り穴等は寺院を構成する遺構で、18 世紀後半以降に建立された寺院のものと考えられる。また、廃棄時には部分的な削平、埋立てが行われ、その後に瓦礫廃棄土坑等が掘削されている。他の調査区よりも近世の復興時期の遺構が検出されたのが目立つ。

中世の遺構は第６層（地山）上面で検出した。遺構は焼土層を埋土とするものと黒褐色土や灰色土を埋土にするものに大別できる。石材や地面に被熱痕跡のみられる遺構は天正の兵火を被ったものと考えられる。また、瓦器や白土器を包含する遺構は 13 世紀～ 15 世紀にかけての時期のものと考えられる。以下に検出した代表的な近世遺構（遺構 36 ー 43）、中世遺構（階段状遺構）について記述する。

遺構 36 は南北方向トレンチの北端で検出した石組溝の屈曲部分である。溝は大きさ約 20 ～ 35 ㎝の石を側石とし、遺存していた石積みは１段分である。溝の内幅は 0.15 ～ 0.2 ｍを測り、掘形の幅は 0.5 ～ 0.7 ｍを測る。建物の雨落ち部分に当たると思われる箇所の底には、平瓦を敷き並べ、屈曲部には雨水を受ける軒丸瓦が置かれている。また、調査区の西端でも東西方向の素掘りの雨落溝と思われる遺構 42 を検出した。東側の一部を掘削したところ、底面に平瓦が敷かれていた。遺構 37 は幅 2.5 ～ 2.8 ｍ、検出長 3.0 ｍ以上の規模の土坑である。深さは約 0.3 ｍを測る。暗灰黄色シルトの埋土に瓦礫を一括投棄している。この遺構からは（62・63）の瓦が

出土した。(62) の軒丸瓦は周縁の幅が広く連珠は 16 である。周縁の一部は銀化している。(63) の軒平瓦は中心飾りの三葉文の両脇は分離する。他の出土遺物には湊焼や軒桟瓦などがある。遺構 38・39 はトレンチ中央部において検出した廃棄土坑２基である。遺構 38 は浅い窪みに上面が平坦になるように瓦を並べ、京焼、近世磁器が出土した。遺構 39 は遺構 38 の東に隣接して検出した瓦礫廃棄土坑である。規模は 2.0 m ×2.4 m程度の不定形な土坑である。京焼などの近世遺物が出土した。遺構 40 は埋甕遺構である。掘形は 0.5 m ×0.6 mの楕円形を呈する。甕の上部は削平を受け欠損する。甕の産地は不明である。遺構 41 は掘形 3.0 m ×1.8 mを測る埋桶遺構で、南側を半裁した。この中には２基の桶を埋置する。埋桶の周囲は黄色粘土で充填され、近世の軒平瓦が出土した。遺構 43 は竈状遺構で、黄色粘土を 0.1 ～ 0.15 mの幅で馬蹄形に貼付け、その上に 15 ～ 20 ㎝大の礫を配している。袖の内幅は 0.46 mを測る。焚口の手前には炭の散布範囲が約 1.0 mの範囲で確認できた。黄色粘土上には堺擂鉢などの破片が散乱して出土した。



第 11 図　Ｊ区遺構 44
平面図及び断面図 (S=1/50)

Ｉ区東南隅の小トレンチ南端で階段と思われる石積みを検出した。一段目は地山面上に石を設置して築かれ、石積みは３段分が遺存している。踏石となる石材は 40 ～ 50 ㎝大のものである。二段目に相当する部分の石材底面となる割石や地山が被熱し赤色化している。地山上には被熱した中世瓦を包含する炭・焼土層が堆積し、その上層に第４層が堆積していた。この状況から天正の兵火で破壊され 18 世紀後半の整地時まで放置されていた公算が高いと考えられる。なお、この階段は平成６年度調査や１次調査のＡ区で検出している道路遺構の延長線上に位置し、南北方向の道路遺構の一部と考えられる。

[Ｊ区]（第４・５・10・11 図、図版８） 水田耕作土を除去すると、北側では礫混じりシルトの地山（第６層）

となる。地山は南に傾斜する面をなし、第６層上に第３層・第４層の２つの整地土が介在し現状の地形が形成されている。第３層とした整地層は焼土粒と黄色土粒を含んだ褐灰色砂混じりシルトである。第４層は焼土粒を含む褐灰色シルトで第３層よりも粘性が強く暗色を呈す。第３層には近世遺物が確認できたが、調査範囲内において、第４層からは近世遺物は出土していないことから第４層は近世初頭の整地土の公算が高い。なお、第３層は調査区のほぼ全域で確認される。第４層からは（65）の瓦質擂鉢が出土している。櫛目は 16 本を一単位とし、幅は約 3.5 ㎝である。外面は横方向のケズリを施す。

第３層上面では遺構は検出されなかった。第４層上面で石組溝、土坑等を検出した。石組溝（遺構 44）は第３層整地時に一部壊されている。

遺構 44 はＪ区南西の小トレンチで検出した南北方向の石組排水溝である。遺構 44 の北側では天正の兵火時の瓦礫を廃棄した土坑を掘削して構築していることから、遺構 44 は天正の兵火後整地されたのちに構築されたことが確認できる。掘形の幅は約 1.1 ｍを測り、石組みの内幅は約 0.2 ～ 0.25 ｍを測る。底の高さより北から南に流していたと考えられる。検出時の深さは 0.2 ～ 0.25 ｍを測るが、あと１段分程度の側石が積まれていたものと考えられる。出土遺物には（66）の軒平瓦がある。中心飾りの三葉文の萼が二又に分離しかける。他には伊万里焼、柿釉皿、京焼、焙烙、桟瓦などの近世遺物が出土した。

遺構 45 は南北トレンチの南端で検出した東西方向に延びる石垣である。西壁の土層堆積状況から第４層整地時に壊されている。石材の大きさや裏込め石の量から判断して、低い石垣として構築されたものとみられる。また、この石垣の北側で、石垣と同方向の地山掘削ラインを検出しており、石垣の前身となる敷地区画と考えられる掘り込みを確認した。後に石積みにより僅かに南に拡張したものと思われる。この他の検出遺構には、第４層上面や地山面で溝などが検出されているが構造や機能が推定できるようなものは認められない。

第２項　１次調査・２次調査のまとめ

今回の調査で検出した天正の兵火まで機能していたと考えられる遺構には、Ａ区で道路遺構、半地下式倉庫、Ｃ区で半地下式倉庫とみられる遺構 17、Ｅ区で基壇遺構や遺構 23・24 を側溝とする道路遺構、Ｉ区で階段状遺構などがある。天正の兵火以降に復興された遺構としては、Ｉ区で雨落溝や埋甕遺構、埋桶遺構、Ｊ区で石組排水溝などがある。

また、調査対象地は低い丘陵上であり、南と西に地山面が低くなるため、平坦な建物敷地を確保するためには整地が必要であった地形である。

整地土中からの出土遺物には、13 世紀代から 18 世紀後半までのものが見受けられた。この内、出土量が最も多いのは 15 世紀後半から 16 世紀前半にかけてのもので、ほぼ調査区の全域で出土している。次に多い時期の遺物は 17 世紀から 18 世紀後半の近世のもので、この時期の遺構も多く検出されている。特に集中して近世遺構が検出されたのは、現在の菩提院の西側のＩ区とＪ区である。Ｉ区でも記述したが、第４層の整地土中には 18 世紀後半までの遺物が包含されており、近世には大規模な整地が行われ、Ｉ区は規模の大きな寺院が建立された敷地の一部と推定される。

断片的ではあるが、Ａ区、Ｄ区、Ｅ区、Ｉ区で東西方向、あるいは南北方向に延びる道路遺構を合計５か所で検出した。この内Ａ区、Ｉ区、Ｅ区で検出した道路遺構と、平成６年度調査で検出している箇所は南北方向の直線上に位置し、同一道路遺構と考えられる。また、道路遺構は段差のある地形の制約を受けて、Ｉ区で検出されたように段差部分には階段施設を構築する。この道路遺構は、Ｅ区南北トレンチやＤ区南北トレンチ南端で検出された道路遺構に連続してＥ区で屈曲するものと推定される。Ｅ区で屈曲した道路遺構の西側への延長上には大門が位置する。また、Ｅ区で検出された南北方向に延びる遺構 25 は、両脇に側溝を伴う道路である。このように、道路遺構の位置や方向性、さらに規模や締め固めの精緻さ等から本道路遺構が根来寺境内の幹線道路であったと推測することができる。

特筆すべき遺構としては、Ｅ区で検出した基壇遺構がある。この基壇遺構上では柱穴を検出したことから掘立柱建物の基壇と考えられる。建物の時期は検出面や出土遺物から 16 世紀代と判断できる。根来寺遺跡におけるこの時期の建物遺構は、礎石建物が通例であることや、基壇の北側に砂礫が敷かれた道路（遺構 22）が敷設されていることから、特別な性格を帯びた建物であったことが窺える。

調査地の第３段、第４段の低い敷地では検出した遺構や遺構面の状況から、間口 20 ｍ前後の敷地区画が復元可能である。これまでの事例から盆地部では間口 30 ｍ前後であるが、根来寺中心部に近い箇所であったため充分な敷地面積を確保できなかったのか、通常間口に比べて小規模である。

以上、１次調査、２次調査の２カ年の確認調査成果を併せ考えると、今回の調査で根来寺遺跡ではあまり検出されていない掘立柱建物の一部を複数調査地内で検出している。出土遺物には

13 世紀代の瓦器椀も確認されていることから、この時期の建物遺構は掘立柱で構成されている可能性が高い。13 世紀末は「大湯屋騒動」を契機として俊音房頼瑜が高野から衆徒共々総退去し、根来の地に止住した時期である。この時、居を構えるのは当然の如く、山内の中心部であったであろう。その後、境内に多数の子院が建てられ、聖地である覚鑁上人の荼毘所域を宗教空間として整備し、御廟の西側には大規模な子院を建てることを控えたのであろう。

天正の兵火前の 16 世紀代の遺構の検出は、既往の根来寺遺跡の発掘調査と比較すると少ない。これは１次・２次調査が確認調査であるため、検出した近世遺構を極力現状保存し、下面遺構の調査を限定的にしか行わなかったとみられる。

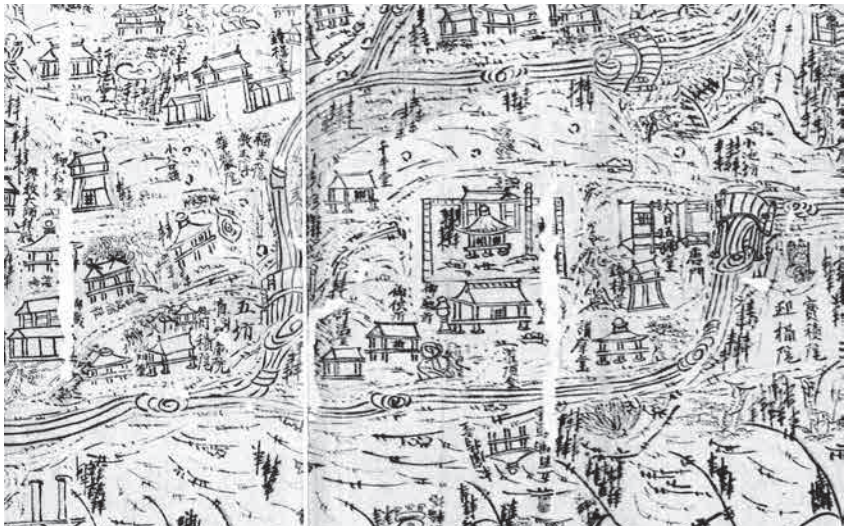
しかし、近世遺構が検出されなかった範囲において限定的に行った中世包含層の掘削、一部の範囲で検出した中世遺構面での遺構検出状況及び中世の遺物出土範囲等から、根来寺遺跡の既往の調査例同様、根来寺最盛期の天正の兵火以前の遺構が対象地全体に展開する公算が高いと予想される。

１次・２次調査では 17 世紀から 18 世紀後半の近世遺物がある程度出土した。この出土遺物の時期にあたる 18 世紀中頃から後半には、両学頭寺院制の復活や大伝法院再建、奥の院の造営などの根来寺山内における大規模な再整備が行われた時期でもあるため、現代の菩提院周辺の根来寺中心域には近世遺構が多く展開すると考えられる。

ここで天正の兵火以前の様相をよく示すといわれる「根来寺伽藍古絵図」と調査対象地の比較をしてみたい。絵図の建物には礎石建ち、掘立柱建物、土台建ちが区別して描かれており、１・２次調査地に相当する箇所には「御供所」および「許法堂」の名称が読み取ることが出来る。「御供所」は覚鑁上人の御廟所に伴う建物で、絵図では掘立柱建物として描かれている。絵図表現と検出遺構とを勘案すると、Ｄ区で検出した掘立柱建物は「御供所」に相当する可能性がある。

また、文化８（1811）年に出版された「紀伊国名所図会」ではＩ区に相当する位置に「利量院」と記されており、第４層上面で検出した遺構群は「利量院」に伴う遺構に比定できる。利量院は明治８年以降に製作された旧公図ではＩ区は田となっていることから、明治になると廃絶されたと考えられる。

１・２次調査地の土地利用の変遷過程の詳細については、現状の土地区画を超えた面的な調査が必要不可欠であると考えられる。



第 12 図　１次調査・２次調査地周辺の古絵図（根来寺伽藍古絵図）

第３項　３次調査・４次調査

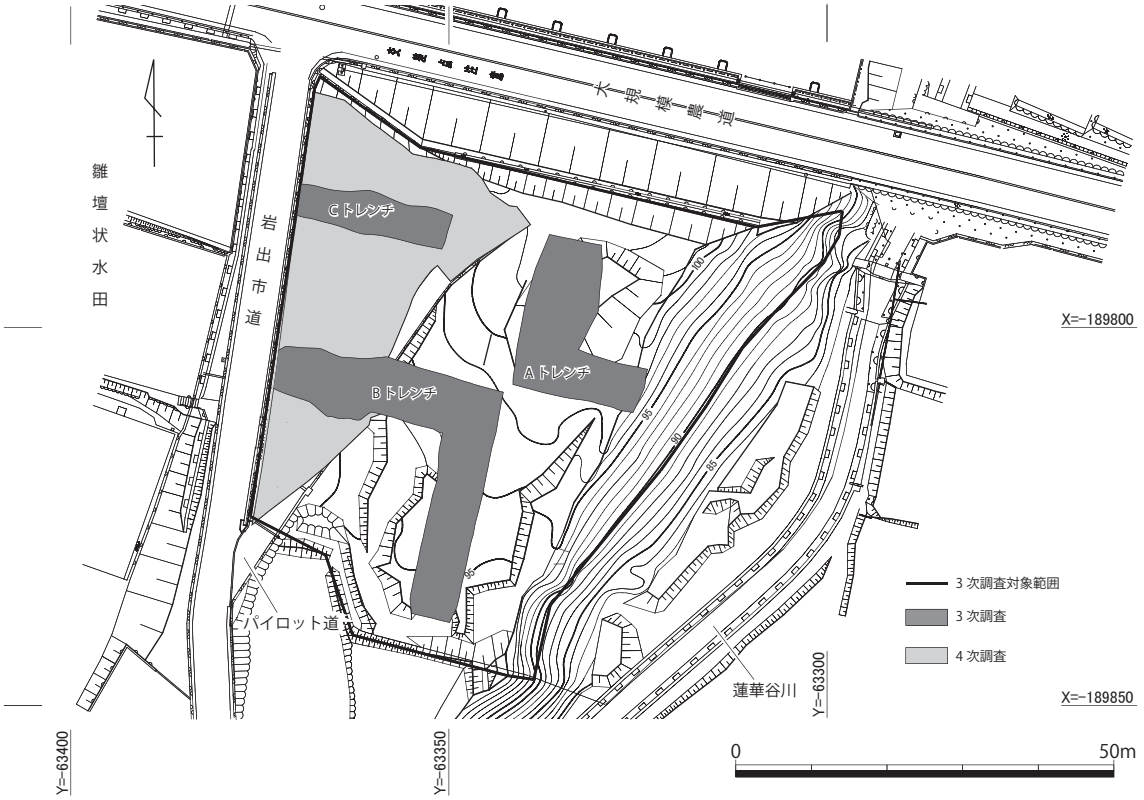
(1) 3次調査（第 13 ～ 15 図、図版 9 ～ 13）

調査対象地は和泉山脈から派生する丘陵の先端部に位置する。現大門から北に約 280 ｍの地点に位置し、東には蓮華谷川が近接し南流する。調査対象地の北側には現在、大規模農道が建設されており、丘陵が切り離されているため独立丘陵状を呈する。大規模農道建設に伴う発掘調査においては３段の子院敷地が確認され、天正の兵火時まで機能していた石垣、石組井戸、石組溝、礎石建物などの遺構を検出している(注３)。

調査対象地の東側は急な傾斜で蓮華谷川となり、西側は東側斜面に比べ緩やかな斜面を成し、大門前から敷設された岩出市道となる。さらにその西は小さな谷状地形となっており、その谷状地形を利用して北から南に向かって雛壇状に水田が作られている。なお、地元住民からの聞き取りによれば、岩出市道の西側縁辺部には旧来から里道が存在していたとのことで、古くから動線となっていたことが窺い知れる。さらに、丘陵上は大型重機による開発が昭和年間に行われていたとの地元住民による証言もあった。

トレンチの設定は調査対象地の埋蔵文化財の残存状況を確認することを目的とし、丘陵頂部中央から北東側にＬ字形のトレンチ（Ａトレンチ）と南西側に逆Ｌ字形トレンチ（Ｂトレンチ）を設定した。

確認調査を進めると、Ｂトレンチの東西方向の西側斜面部で石造遺構が検出されたため、西側



第 13 図　３次調査・４次調査　調査区位置図 (S=1:1,000)

斜面部の遺構残存状況を確認することを目的として、Ｂトレンチの北側に平行する方向で新たにＣトレンチを設定した。その結果、調査対象地 4,050 ㎡に対し、407 ㎡（調査区底面）の確認調査を実施した。以下に調査の成果を記す。

［Aトレンチ］（第 14・15 図、図版 10・11）掘削前の標高は、北端の最も高い地点で約 101 ｍであった。基本層序は盛土１、表土、その下層は第 15 図に示すように岩盤礫の細片を含む土（第１層ー第８層）となり、締りのないことからも現代整地土と判断した。さらに、その下層は地山（岩盤層）となる。地山は北東方向から南西方向に緩やかな傾斜となり落ち込む。ただし、土層図には表れていないが東面で固く締まった層を第 10 層としてＡトレンチの一部で確認した。この層も上層の盛土と同様に傾斜がみられる。なお、第 10 層からの遺物は皆無で、第 10 層上面で精査したが遺構は一切確認できなかった。東西方向トレンチの地山検出面上には、重機により掘削された痕跡とみられる一定間隔の筋状の凹凸が認められた（図版 11）。東側の斜面部の岩盤面は、急激な傾斜が付き蓮華谷川へ落ち込むことから遺構の残存は想定できない。Ａトレンチの出土遺物は盛土１から青磁が２点、備前焼２点、瓦 17 点、撹乱坑から近代陶磁器 17 点、瓦６点のみである。また、かつて遺構を構築する際に使用されていた石材であったと考えられる砂岩礫のほか石塔類も盛土１から出土した。

［Bトレンチ］（第 14・15 図、図版 11・12）丘陵頂部の確認範囲における南北トレンチおよび東西トレンチの基本層序は盛土１、表土、盛土２、耕作土、岩盤礫を含む現代整地土（第２層ー第９層）、地山となる。盛土１と盛土２は先後関係はあるものの、現代品が混入することからいずれも現代の盛土と判断できる。Ａトレンチ同様の第 10 層を一部地山（岩盤）上で確認した。また、東西方向トレンチの東寄りで重機等による削平痕とみられる筋状の凹凸を地山面で検出した。丘陵頂部の遺構に使用されていたと推測される石材が盛土１から出土したが、遺構は全く検出できなかった。

東西トレンチの丘陵頂部西側縁辺部から西側斜面にかけては、石垣と階段状遺構を検出した。丘陵頂部西側縁辺部から斜面、平坦部にかけての基本層序は、上層から盛土、表土、現代整地土、崩落土、包含層となる。ただし、第 15 図では包含層は削平等により北壁面では確認できないが、南壁面では確認できる。包含層からは備前焼甕の口縁部が出土しているが、大半の遺物は西側斜面部分の崩落土（Ａ層～Ｅ層）から出土した。

石積み遺構や階段状遺構は丘陵頂部西側縁辺部から西側斜面の上部の崩落土直下で検出されたが、斜面下部では削平により残存していなかった。階段状遺構の南北両側には大きさ 80 ～ 100 ㎝の側石の一部が残存していた。側石の間隔は内側で約３ｍを測る。その間には扁平な砂岩石や片岩を３～６石並べた踏石を階段上部の２段分検出した。踏石の中には五輪塔の一部も転用されていた。なお、この階段状遺構を登り切った正面には高さ 0.8 ～ 0.9 ｍを測る石垣が３段分残存していた。この石垣の裏込めは 10 ～ 25 ㎝大の砂岩礫を使用し、奥行き 0.6 ｍを測る。

［Cトレンチ］（第 14・15 図、図版 13）Ｂトレンチの東西方向の丘陵部西端部で検出した石垣の連続状況や、削平されていない可能性のある丘陵西側斜面部の遺構の残存状況を確認することを目的として、Ｂトレンチの北側 16 ｍの箇所に同一方向に設定したトレンチである。

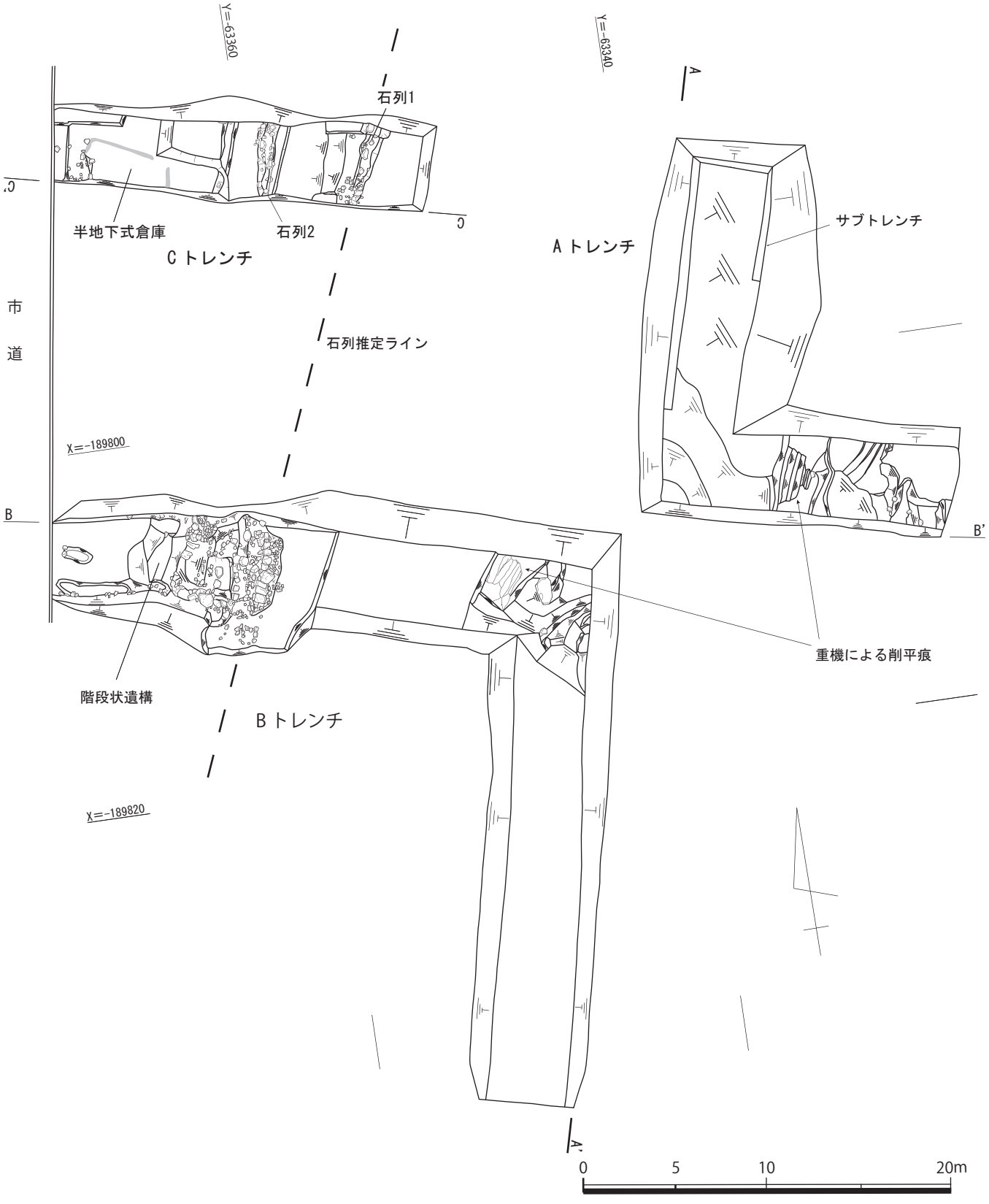
丘陵頂部西側縁辺部で石列（石列１）を検出した。石列１はＢトレンチで確認された石垣と同一の方向性であることから、現状では比高差が約 2.2 ｍを測るものの、同一遺構の基底部と考えた。なお、石列１は現代盛土直下で確認された遺構である。石列１の東側では遺構は確認できなかった。Ａ・Ｂトレンチ同様に丘陵頂部は既に削平され、井戸などの深度のある遺構以外は残存していないと判断した。

石列１の西側斜面は表土、崩落土、盛土などを除去すると急な傾斜で岩盤が露出し、斜面直下には厚さ２～５㎝の焼土に被覆された石列２を検出した。石列１と石列２の方向性は一致するものの、比高差は約 4.8 ｍを測る。

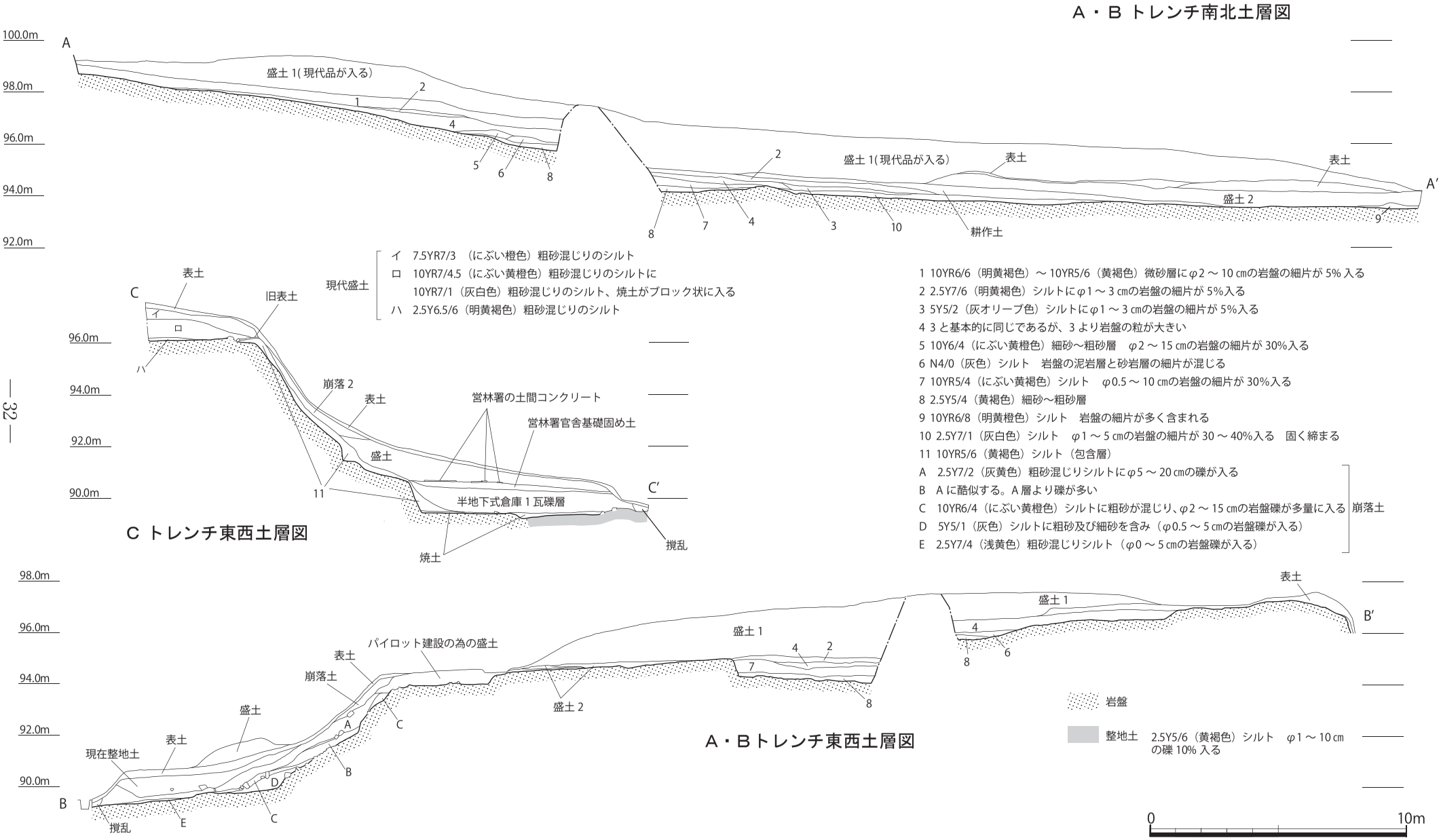
斜面直下で検出した石列２と市道の間には、昭和 40 年代まで営林署の建物が存在していた。このため遺物包含層は崖裾部を除き残存しておらず、建物が存在していた付近は削平が著しかったとみられ、深度のある半地下式倉庫以外の礎石などの遺構は残存していなかった。半地下式倉庫を検出した東側の丘陵斜面には、第 11 層が堆積するが、第 11 層を除去すると岩盤の斜面となる。丘陵西側斜面の裾部は現状では約 80° の急勾配で垂直気味に立ち上がっている。また、半地下式倉庫の壁面のうち、東側壁及び北側壁の東半部は岩盤を掘り込んでいるが、北側壁の西半部では整地土を掘り込んで構築されている。これらのことから、本来の丘陵西側斜面は緩やかな勾配の旧地形であったと復元できる。このような旧地形から、丘陵西側に子院敷地の一定範囲の平坦面を確保するために、東側の丘陵斜面を切り崩し、その切土を用いて西側の丘陵斜面を埋めるという造成が行われたと推定される。

半地下式倉庫の平面規模は東西長約 8.5 ｍ、南北長は２ｍ以上を測る。西側の側壁には２段分の石積みが遺存していたことから、西側の側壁は石積みだったと判断できる。埋土は、瓦礫層と焼土層の２層に分層できる。瓦礫層からは、多量の瓦類の他 16 世紀代を中心とした中国製白磁皿、備前焼壺、土師器皿などが出土しており、天正の兵火以降の遺物を含まないことから、江戸時代の早い時期に一括して投棄されたものと考えられる。このことから当該地の遺構は 16 世紀前半から天正の兵火まで機能していたと考えられる。

以上のとおり、丘陵頂部には遺構は一切確認できず、重機による削平痕が認められたのみで、地元住民の証言と一致する。遺構は、やや標高が低く削平を免れた丘陵部西側縁辺部から西側の丘陵部西側斜面及び平坦部で検出したに止まる。



第14図　３次調査遺構平面図（S=1/300）



C トレンチ東西土層図

第15図　３次調査Ａ・Ｂトレンチ南北及び東西土層図、Ｃトレンチ東西土層図(S=1/200)

(2) 4次調査（第 16 ～ 35 図、図版 14 ～ 24）

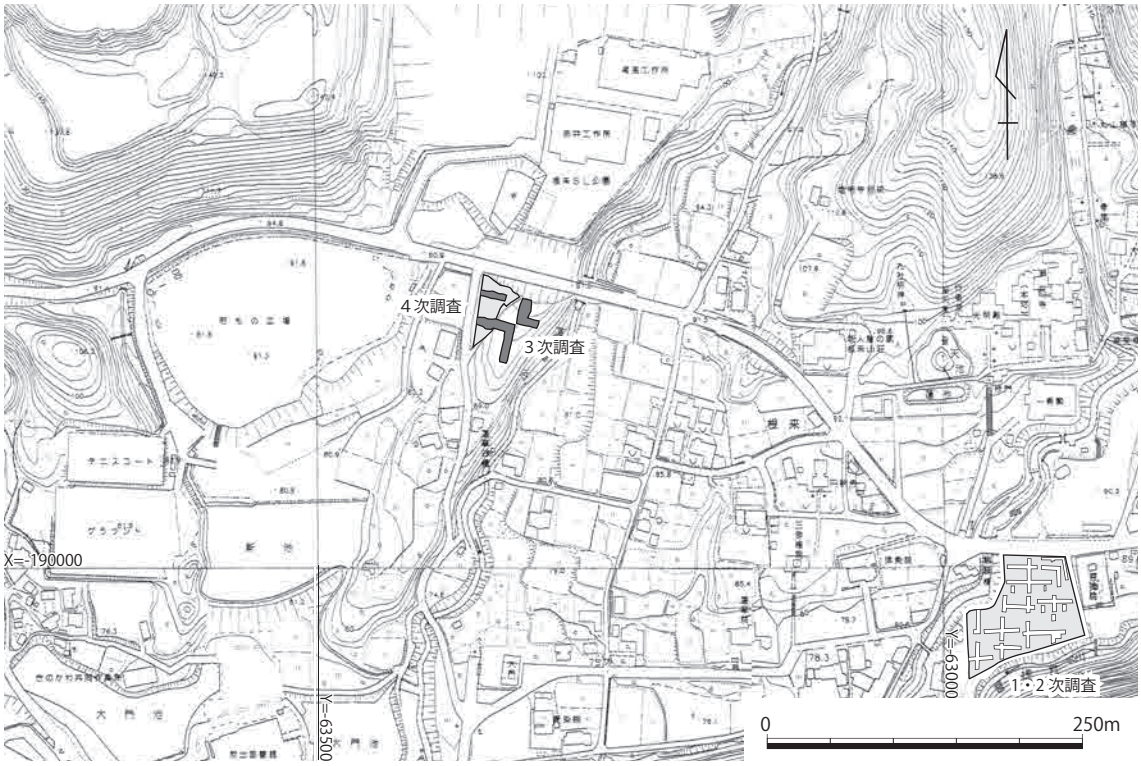
３次調査において遺構の検出された丘陵頂部西端から市道までの斜面部、平坦部の範囲を対象として４次調査を実施した。なお、調査の途中で、丘陵頂部西側縁辺部において確認した溝１（３次調査で検出した石列１）が北東方向の調査区外に延びることが判明したため、調査対象地を一部拡張した。以下に４次調査の成果を記述する。

調査は丘陵頂部の西側縁辺部から西側斜面、西側平坦部を対象に実施したため、丘陵頂部西側縁辺部を上段、それより低い西側平坦部は下段、斜面を崖部として記述する。調査面積は拡張範囲を含めて 795 ㎡である。なお、調査地の上段南端から北端にかけては昭和 40 年代に実施されたパイロット農園事業の際にコンクリート道が敷設されている。

下段は営林署建物の基礎固め土を除去すると遺構検出面となる。第 19 図で示した下段東端にあたる崖裾部に沿って築かれた石積みより西側部分の半地下式倉庫を検出した範囲は、営林署建築時にすでに削平され、遺構面は遺存しないため、建物跡等は検出されなかった。なお、遺構面の標高は北端で 90.6 ｍ、南端で約 89.6 ｍを測る。

上段で検出した遺構には石組井戸、暗渠排水溝、石垣、階段、道、排水溝、集水口、溜桝状遺構などがある。下段では暗渠排水溝、排水溝、半地下式倉庫、溜桝状遺構などの遺構を検出した。

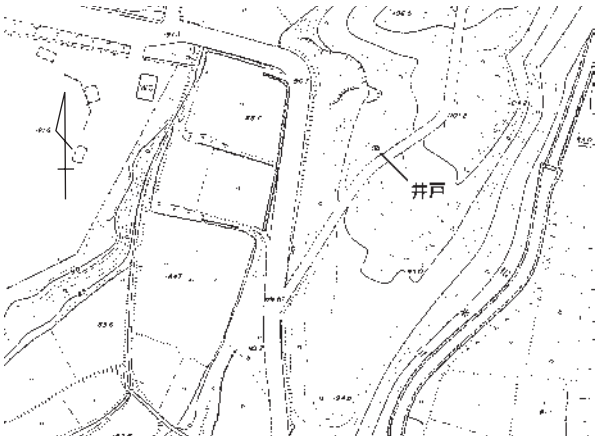
上段および下段で検出されたこれらの遺構は子院を構成する遺構群で、半地下式倉庫を有する子院敷地の下段から階段を登り、動線伝いに上段の子院敷地に通じる。また、上段から下段にかけての排水施設は、計画的に配置されている。以下、上段と下段で検出した遺構について記述する。



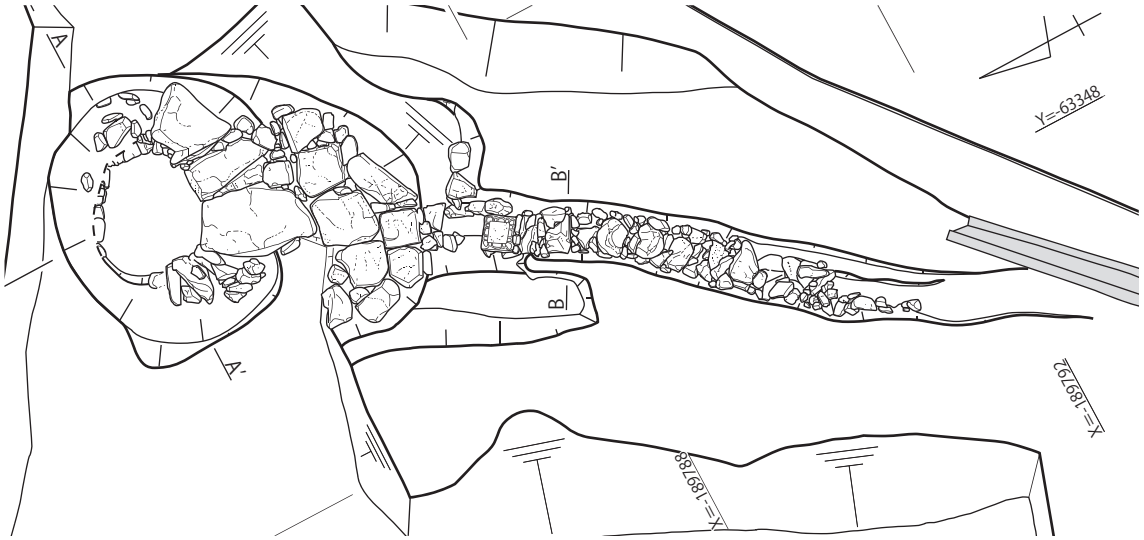
第 16 図　３次調査・４次調査　調査地位置図（S=1:6,000）（岩出市都市計画図を利用）

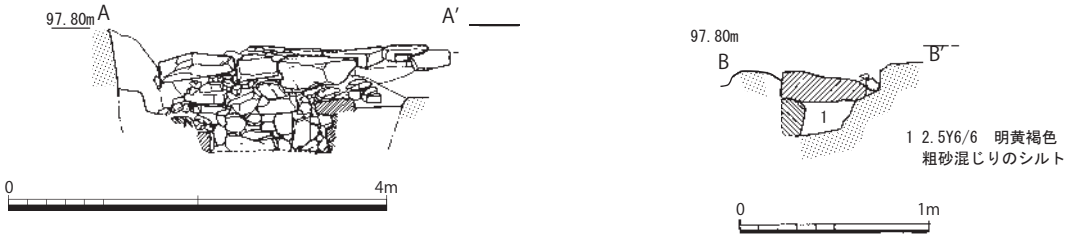
（A）上段の遺構

【井戸・溝6】（第 17・18・19 図、図版 15）調査地北端で検出した井戸及び溝である。この部分は上段の子院敷地と現状で 0.7 m余の比高差が認められることから、一段低い場所に独立して造られたものと判断される。このような例としては大規模農道建設に伴う調査の丘陵部Ｂ地区で検出された SE － 07 があり、上段子院の共用井戸として機能していたと考えられる。なお、この井戸は昭和 55 年測図の地形図にも記されており、確認することができる。井戸の北側の大部分は大きく撹乱を受けており、この撹乱土からはコーヒー缶や鉄杭が出土した。この撹乱により井戸の西側は南北幅４m程度岩盤が削られており、北壁面間際まで撹乱が及んでいた。また、井戸の大半は撹乱土により被覆されており、撹乱土除去後井戸石材を検出した。井戸は石組で、岩盤を掘削して作られており、その掘形は直径約 3.1 m と規模の大きなものである。石積み井戸の内径は 1.1 ～ 1.2 m を測る。積石は 30 ～ 55 ㎝大の砂岩を使用し、目地には 10 ～ 15 ㎝大の小礫を入れ込んでいる。井戸内

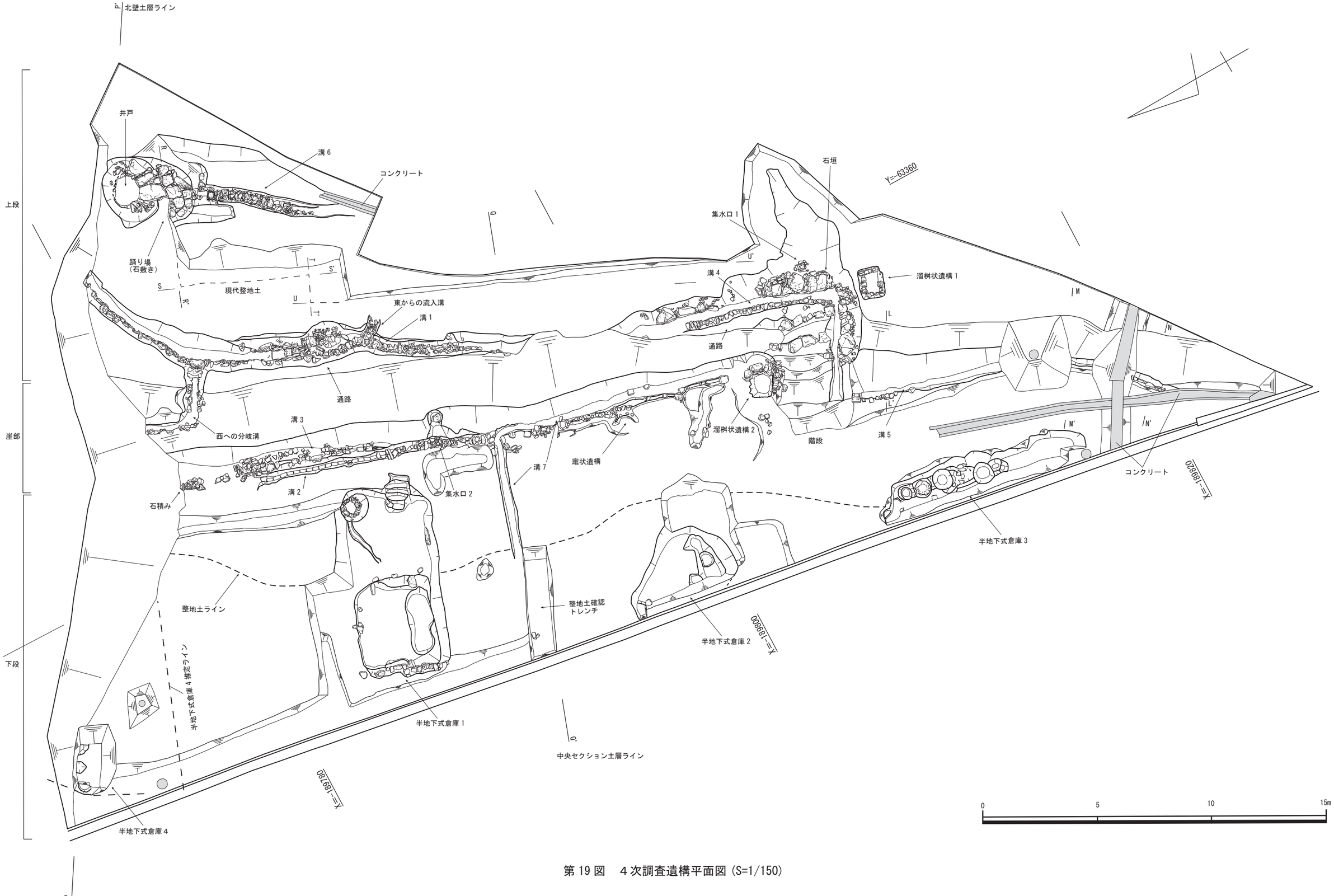


第17図　昭和55年測図の地形図 (S=1/3,000)





第 18 図　井戸・溝６　平面図及び井戸立面図（S=1/80）、溝６断面土層図（S=1/40）



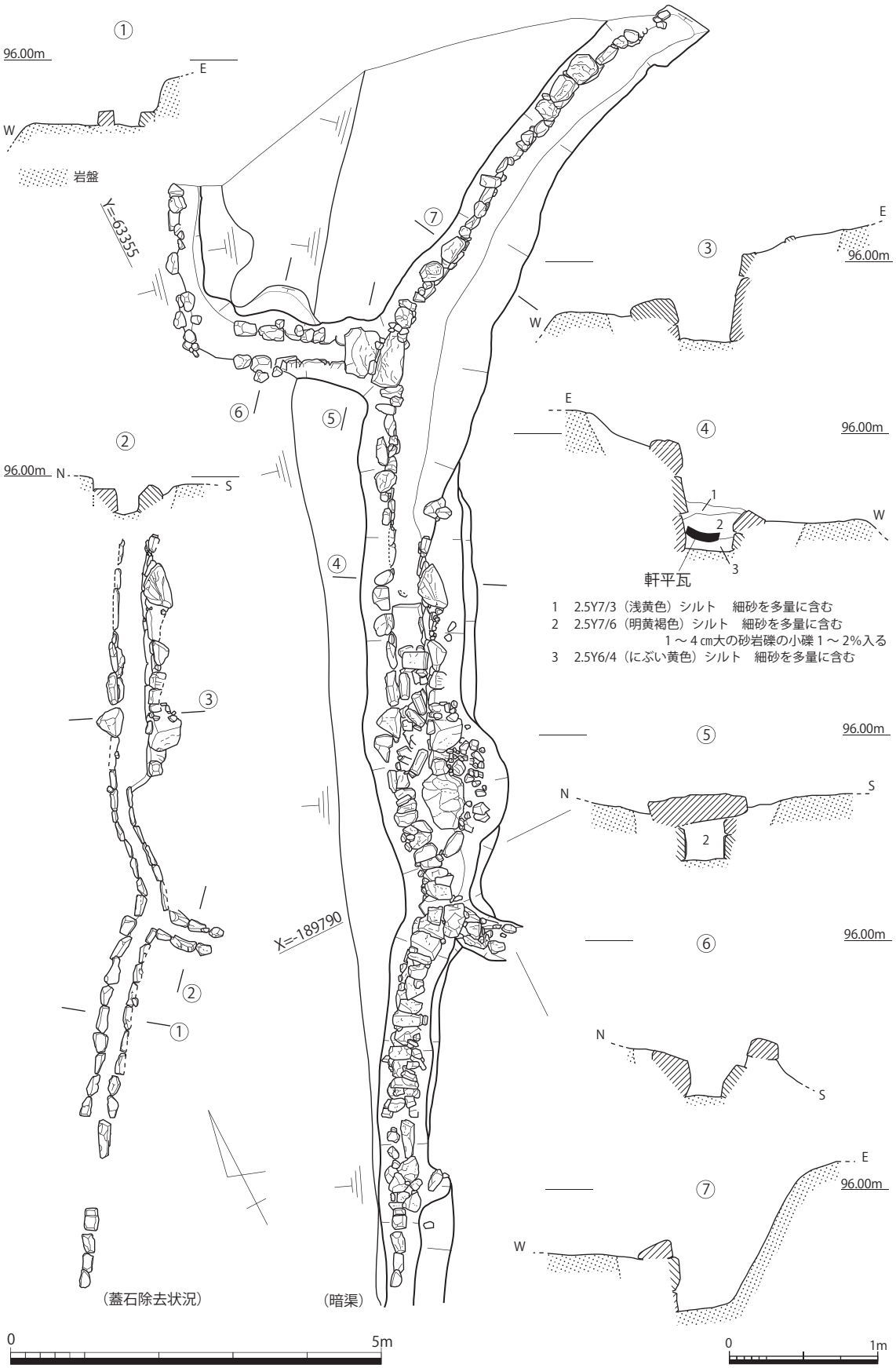
第 19 図　４次調査遺構平面図 (S=1/150)

部の掘削は撹乱土のみ除去し、天端石から 1.0 ｍを掘り下げた。またこの井戸の南側には扁平な砂岩を敷き踊り場が設けられている。踊り場の石材の砂岩は大きさ 40 ～ 110 ㎝の割石を使用しており、五輪塔の台座も逆位にして利用されていた。また、井戸の北側と西側の天端石が撹乱を受け、欠損している状況から判断して、踊り場は井戸の周囲を廻っていた可能性も考えられるが、撹乱による削平のため確認できたのは南側部分だけであった。

溝６は地山の岩盤を掘り込んだ暗渠排水溝で、コンクリート道除去後検出した。南へ向かう程削平量が大きくなっていたため、次第に蓋石や側石が無くなり調査区南端では掘形も消滅していた。従って、検出できた延長は約 7.2 ｍであった。掘形の幅は 0.65 ～ 0.8 ｍ、溝幅は 0.2 ～ 0.3 ｍを測る。蓋石は 40 ～ 50 ㎝の大きさのものを主として、間に細礫を入れ込む。井戸の踊り場との接合部分近くに五輪塔の台座を正位に利用して蓋石としていた。側石は西側だけに配し、東側は蓋石を架けるために岩盤成形し、段を作っている。深さは蓋石の底から 0.15 ～ 0.18 ｍを測る。埋土は単一層で 2.5Y6/6（明黄褐色）粗砂混じりのシルトであった。溝６は基底部の標高から、北から南方向に流していた。井戸と暗渠排水溝の接合部の東には、東側上段から流れ込む排水溝の側石２石を検出したが、以南は削平されていたため詳細は不明である。

【溝1】（第 19・20・33 図、図版 16）上段西側縁辺部で包含層除去後に検出した排水溝である。排水溝は、方向性や位置関係から後述する調査区南側で検出した石垣の西側に沿う排水溝（溝４）と同一遺構と考えられるが、調査区中央付近で丘陵西斜面が崩落し、崖部が東側へ広がり、排水溝が消失して途切れているため、便宜的に、別の溝として取り扱った。検出長は約 19.5 ｍを測る。溝１は調査区北端では井戸の北側を廻るように東側へ屈曲する。また、途中東からの流入溝と西への分岐溝との２箇所の接合が認められた。東からの流入溝は､暗渠排水溝で長さ 0.7 ｍを検出したに留まり、石組みも残存していない。また、東からの流入溝の被覆土は、大振りの砂岩礫が混じることや、焼土がブロック状に混在する土質であることから盛土（中央セクションベルト第３層）で、検出した箇所以東は、削平により消滅しているが、当初は東側に延びていたとみられる。また、西への分岐溝の遺存状況も良好でなく、崩れ残った側石が遺存し、わずかに溝の形状を留める。なお、西への分岐する溝の側石に使われている石材のほとんどは岩盤礫であった。西への分岐溝は、斜面を西側に下り北側に屈曲し、大規模農道調査で検出した隣接する北側の子院に繋がっていたと考えられる。

溝１の東肩は、北から岩盤成形を施した箇所や大きめの砂岩礫を積んだ箇所と造作に違いがある。東からの流入溝の接合地点以南は暗渠で、以北よりも掘形幅が狭くなる。東肩石積み部分は 30 ～ 80 ㎝大の砂岩が２段～３段遺存し、裏込めは 0.5 ～ 0.6 ｍ幅で細かい砂岩礫や岩盤礫を入れる。東肩石積みは階段正面で検出した石垣の延長にあたる。西肩の北半部は岩盤礫を使用し、南半部は砂岩の割石を使用していた。深さは約 0.3 ～ 0.4 ｍを測る。埋土は主として黄褐色シルトである。溝１の北端部分、特に西肩部分は岩盤が従来低かったため、第 21 図北壁土層図に示



第 20 図　溝 1　平面図（S=1/80）及び土層図・断面図（S=1/40）

したように黄色系のシルト土（第３～５層）で整地して溝１の西肩としている。調査時には判断を誤り、整地土を掘削してしまった。溝の深さは約 0.3 ～ 0.5 ｍを測り、流水の方向は基底部の標高から、東からの流入溝から約 1.5 ｍ南側の地点を分水嶺として北側は西への分岐溝へ流し込み、南側は後述する溝４につながり、階段南側側溝へ流し込んでいくと判断される。

溝１からの出土遺物は大半が瓦類で、他は土師器皿が少量出土している。中央の石積み箇所には溝を被覆するように集中して瓦類が落ち込んでいた。これらの瓦類は、出土状況から丘陵頂部の上段に子院の建物が存在し、その建物に葺かれていたものと推定される。

溝１の遺物は（126・171 ～ 175）である。（126）は口縁の肥厚する土師器皿である。（171）は均整唐草文軒平瓦である。７弁の中心飾りをもち、支葉が３回反転している。瓦当上縁には面取りが施されている。凹面の後部には釘穴が穿たれている。（172・174・175）は巴文軒丸瓦である。（172）の巴の尾の先は隣の尾と結合し圏線状となる。珠文の数は 29 個である。内面にはコビキＡと深い吊り紐痕が残る。（174）の巴の尾は 1/2 程度の回転となり、尾の先は外の珠文帯に接合気味となる。珠文の数は 20 個である。内面にはコビキＡ、２回転させた吊り紐痕がみられる。（175）の尾の先は（172）と同様に隣の尾と結合する。珠文の数は 24 個である。内面にはコビキＡと吊り紐の痕跡が残る。（173）の丸瓦は（172）の軒丸瓦と組合うものと思われる。内面には大振りな吊り紐痕がみられる。

【溝４】（第 19・22 図、図版 17）溝１南側で検出した溝１と連続する排水溝で、南北方向から西へ屈曲する。溝１および溝４は、後述するように集水口１と接続しており、上段の排水を集約する基幹排水溝であったと考えられる。溝４は南北方向の範囲では上段敷地西端の石垣の石積みを東側石として利用し、通路側の西側石には石列を配して側溝としていた。溝４西側石の石列は 20 ～ 30 ㎝大の小振りな砂岩礫により構築されていたが、遺存していたのは石材１段分のみであった。深さは 0.05 ～ 0.15 ｍで、掘形の幅は約 0.6 ｍ内外を測り、溝の幅は 0.25 ～ 0.3 ｍである。西に屈曲した範囲では、階段の南側石に沿って下降する。階段側石に沿っている部分では側石の基底部を南側石とし、北側石は欠損していた。溝４の基底部は総じて岩盤となる。溝４構築当時は、西側石・北側石は、大雨時にはオーバーフローし、排水溝としての機能を果たせないことから、あと１・２段分の石材が積まれていたと推定される。溝１・４は、調査地北端で東へ屈曲しており、隣接する大規模農道調査で検出した SD46 に連続すると考えられる。

【石垣】（第 19・22 図、図版 17）　遺存状況が良好な箇所は階段付近のみである。石垣は丘陵の西側縁辺部に沿って南北方向に構築されており、階段を登りきった正面に位置し、一見障壁状となる。基底部は岩盤上に築かれ、北側に緩やかな傾斜をつける。遺存していた石積みは１～３段分で、残存高は最大箇所で高さ約 1.25 ｍを測る。なお、後述するように上段で検出した集水口１や溜桝状遺構１の残存状態や、石垣上面も遺存していないことから、築造当時の石垣上部は削平されて

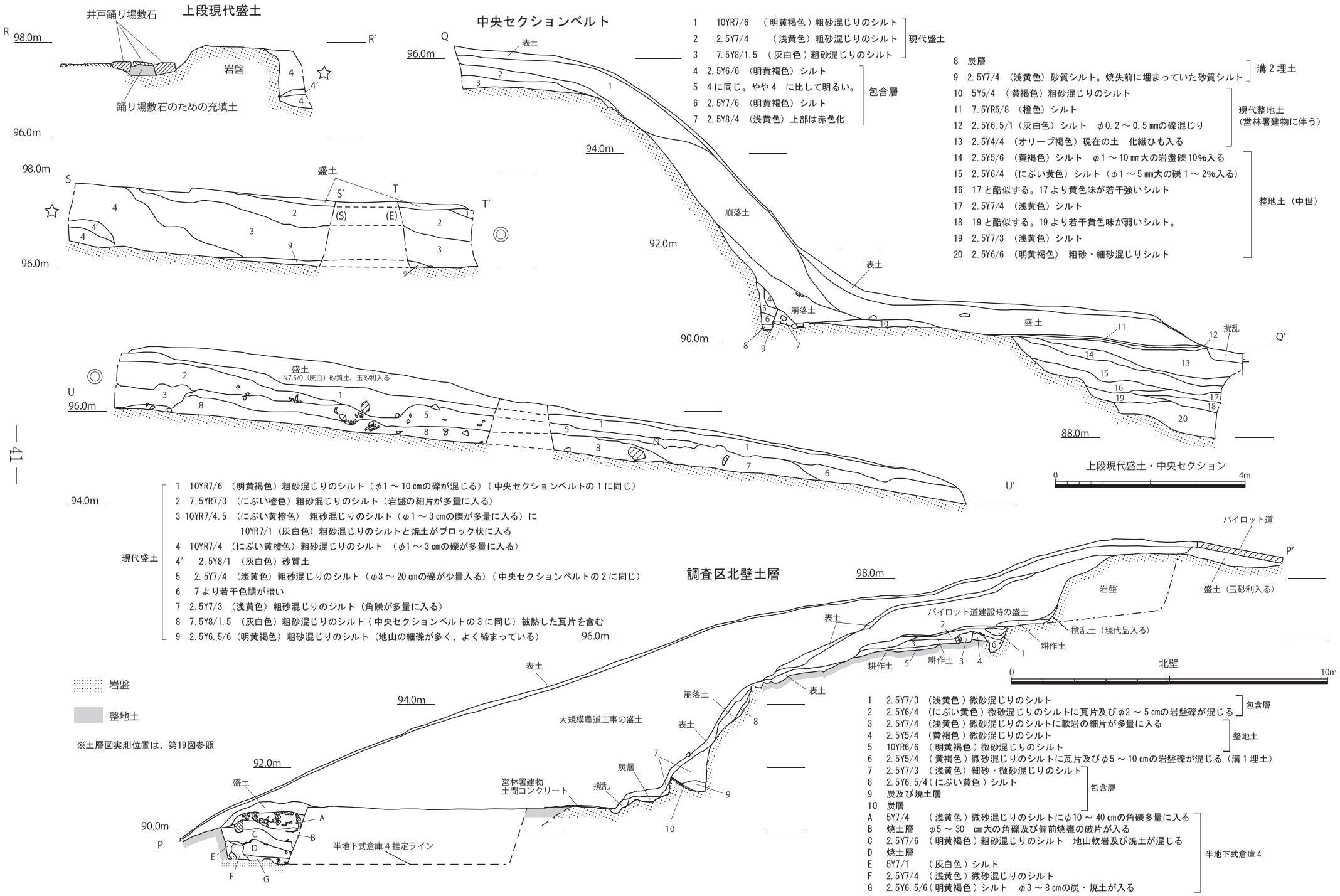
おり、もう少し高さのあったものと推測できる。検出長は欠損するものの 8.2 ｍを測る。石材は 40 ～ 90 ㎝大の砂岩の割石を使用し、扁平な面を正面に向け積まれていた。目地には 10 ～ 25 ㎝大の割石を使用していた。裏込めは基底部が約 0.2 ｍ幅、上方は 0.5 ｍ幅で 10 ～ 20 ㎝大の砂岩の割石を入れる。また、第 22 図にも示すように石垣の最下段には、集水口１と繋がる一辺約 0.3 ｍの四角な排水口が開けられ、上段の子院からの流水を溝４に流し込むような造作を施していた。

【集水口1】（第 19・22・23 図、図版 17） 階段正面の石垣裏込めの東側で検出した。３次調査時に、この上部に細礫が密集し根石状の遺構と評価したものであるが、４次調査で細礫を取り除き精査したところ、一辺 0.2 ｍ余りの四角な桝状の石組みとなり、石垣の基底部で開口する排水口に繋がることが判明した。現状の集水口と排水口の比高差は約１ｍあり、集水口から斜め下に約 0.5 ｍの３段の石積みを施し、そこから下は開口部に向かって階段状に７石を積む構造となり、最下段に組まれた石は斜め下方に傾斜し、溝４への流入を助けている。掘形は石垣や階段の南側石の掘形が同じ埋土であることから石垣と同時に築かれたと考えられる。その規模は集水口より東側に約 4.3 ｍを測る。深さは東側にゆくにつれて浅くなる。掘形の形状や深度から集水口に繋がる暗渠排水溝の存在が推測されるが、集水口に流入する溝等の遺構は検出されなかった。このことは上段の敷地は現在の遺構検出面より高い位置に存在し、現状は大幅な削平を受けていることを示す。なお、石垣や集水口の掘形からの出土遺物は皆無であった。

【通路】（第 19・22 図、図版 17） 上段の西側縁辺部において丘陵部の子院間を繋ぐ犬走り状の道路を検出した。この通路は南から北に緩やかに登り、溝１・４を側溝として北側では井戸を廻るように北東の調査区外に延びると考えられる。通路は調査区の中央部では崖部の崩落により遺存していない。先述の溝１の西側分岐点では２枚の板状の片岩を渡し架けすることにより通行可能としていた。通路の遺存幅は 0.4 ～ 0.8 ｍと狭いが、崖部の下位において、子院造成当時の岩盤掘削面の立ち上がりと考えられる面を検出した。この傾斜角から推し量ると、通路幅は 1.5 ｍ程度に復元される。

この通路は、広い階段を登り、直角に屈曲して、犬走り状に狭くなる構造である。この構造は城砦化によるものと想定されることもあるが、周辺の調査成果や上段の排水施設、後述するように下段に子院が存在すること等を勘案すると、狭量な丘陵上に子院敷地を効率的に確保するために丘陵縁辺部に配置された計画的な子院間動線と位置付けるのが妥当であろう。また、先述したとおり、溝１・４は隣接する大規模農道調査で検出した SD46 に連続するとみられることから、大規模農道調査では認識されていないが、溝１・４を側溝とする通路が SD46 北側の平坦地に連続し、北東方面へ延びるとみられる。

【階段遺構】（第 19・22・23 図、図版 17・18） 調査区の南側の上段西側縁辺部から西側にかけて検出した。３次調査時において正面の障壁となる石垣と階段の踏石は検出していたが、崩落し



1 10YR7/6 （明黄褐色）粗砂混じりのシルト
2 2.5Y7/4 （浅黄色）粗砂混じりのシルト
3 7.5Y8/1.5 （灰白色）粗砂混じりのシルト
現代盛土

4 2.5Y6/6 （明黄褐色） シルト
5 4に同じ。やや4 に比して明るい。
6 2.5Y7/6 （明黄褐色） シルト
7 2.5Y8/4 （浅黄色）上部は赤色化
包含層

8 炭層
9 2.5Y7/4 （浅黄色）砂質シルト。焼失前に埋まっていた砂質シルト
溝２埋土

10 5Y5/4 （黄褐色）粗砂混じりのシルト
11 7.5YR6/8 （橙色）シルト
12 2.5Y6.5/1（灰白色）シルト φ0.2～0.5㎜の礫混じり
13 2.5Y4/4 （オリーブ褐色）現在の土 化繊ひも入る
現代整地土（営林署建物に伴う）

14 2.5Y5/6 （黄褐色）シルト φ1～10㎜大の岩盤礫10%入る
15 2.5Y6/4 （にぶい黄色）シルト（φ1～5㎜大の礫1～2%入る）
16 17と酷似する。17より黄色味が若干強いシルト
17 2.5Y7/4 （浅黄色）シルト
18 19と酷似する。19より若干黄色味が弱いシルト。
19 2.5Y7/3 （浅黄色）シルト
20 2.5Y6/6 （明黄褐色） 粗砂・細砂混じりシルト
整地土（中世）

1 10YR7/6 （明黄褐色）粗砂混じりのシルト（φ1～10㎝の礫が混じる）（中央セクションベルトの1に同じ）
2 7.5YR7/3 （にぶい橙色）粗砂混じりのシルト（岩盤の細片が多量に入る）
3 10YR7/4.5 （にぶい黄橙色） 粗砂混じりのシルト（φ1～3㎝の礫が多量に入る）に 10YR7/1（灰白色）粗砂混じりのシルトと焼土がブロック状に入る
4 10YR7/4 （にぶい黄橙色）粗砂混じりのシルト （φ1～3㎝の礫が多量に入る）
4′ 2.5Y8/1 （灰白色）砂質土
5 2.5Y7/4 （浅黄色）粗砂混じりのシルト（φ3～20㎝の礫が少量入る）（中央セクションベルトの2に同じ）
6 7より若干色調が暗い
7 2.5Y7/3 （浅黄色） 粗砂混じりのシルト（角礫が多量に入る）
8 7.5Y8/1.5 （灰白色）粗砂混じりのシルト（中央セクションベルトの3に同じ）被熱した瓦片を含む
9 2.5Y6.5/6（明黄褐色）粗砂混じりのシルト（地山の細礫が多く、よく締まっている）
現代盛土

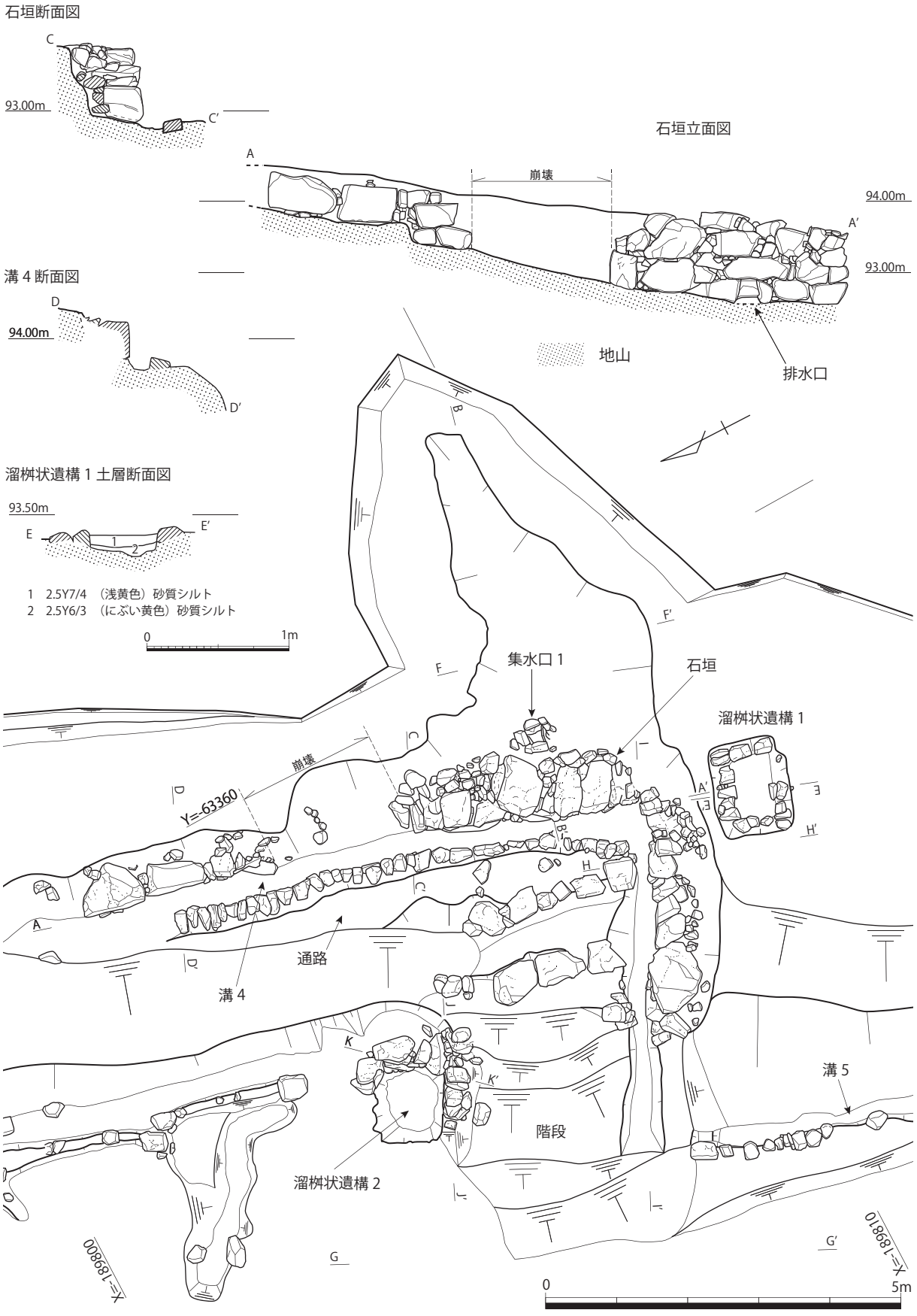
1 2.5Y7/3 （浅黄色）微砂混じりのシルト
2 2.5Y6/4 （にぶい黄色）微砂混じりのシルトに瓦片及びφ2～5㎝の岩盤礫が混じる
包含層

3 2.5Y7/4 （浅黄色）微砂混じりのシルトに軟岩の細片が多量に入る
4 2.5Y5/4 （黄褐色）微砂混じりのシルト
5 10YR6/6 （明黄褐色）微砂混じりのシルト
整地土

6 2.5Y5/4 （黄褐色）微砂混じりのシルトに瓦片及びφ5～10㎝の岩盤礫が混じる（溝1埋土）
7 2.5Y7/3 （浅黄色）細砂・微砂混じりのシルト
8 2.5Y6.5/4（にぶい黄色）シルト
9 炭及び焼土層
10 炭層
包含層

A 5Y7/4 （浅黄色）微砂混じりのシルトにφ10～40㎝の角礫多量に入る
B 焼土層 φ5～30 ㎝大の角礫及び備前焼甕の破片が入る
C 2.5Y7/6 （明黄褐色）粗砂混じりのシルト 地山軟岩及び焼土が混じる
D 焼土層
E 5Y7/1 （灰白色）シルト
F 2.5Y7/4 （浅黄色）微砂混じりのシルト
G 2.5Y6.5/6（明黄褐色）シルト φ3～8㎝の炭・焼土が入る
半地下式倉庫４

第21図 中央セクションベルト・上段現代盛土土層図 (S=1/100)、調査区北壁土層図 (S=1/150)



第22図　階段・石垣・集水口１・溜桝状遺構１・溜桝状遺構２・溝４平面図及び石垣立面図(S=1/80)
溜桝状遺構１土層断面図(S=1/40)

た石材を除去していなかった。４次調査で崩落した石材を除去したところ、遺存していたのは上方の踏石２段分と側石の一部、それに先に記述した階段側溝（溝４）であった。この階段遺構上段付近は岩盤を削り出したもので、踏石をその面に設置していた。踏石には 40 ～ 70 ㎝大の砂岩や板状の片岩および五輪塔の一部も使用され、一段につき４～６石が使用されていたようである。この階段の規模を推測すると、遺存する踏石の比高差や踏石間の距離および階段の天端と下段の遺構面との比高差から復元すると、平面の長さは 5.0 ～ 5.4 ｍで、踏石は７～８段あったものと考えられ、下段の子院敷地を確保するため斜面を切崖し、西側をその掘削土で整地、拡張をし、上段の子院への通路として階段部分を掘り残した結果であると考えている。

起伏の多い根来寺遺跡では高低差のつく箇所に階段を築くのが一般的で、今回検出した階段は丘陵部の子院における動線の一部と考えられる。なお、下段の敷地は南側に行くにつれて西側に占地する面積が小さくなることや、南側は丘陵が北に比べ低く岩盤の加工が容易であった等の理由により、この場所に階段が設けられたものと推測される。

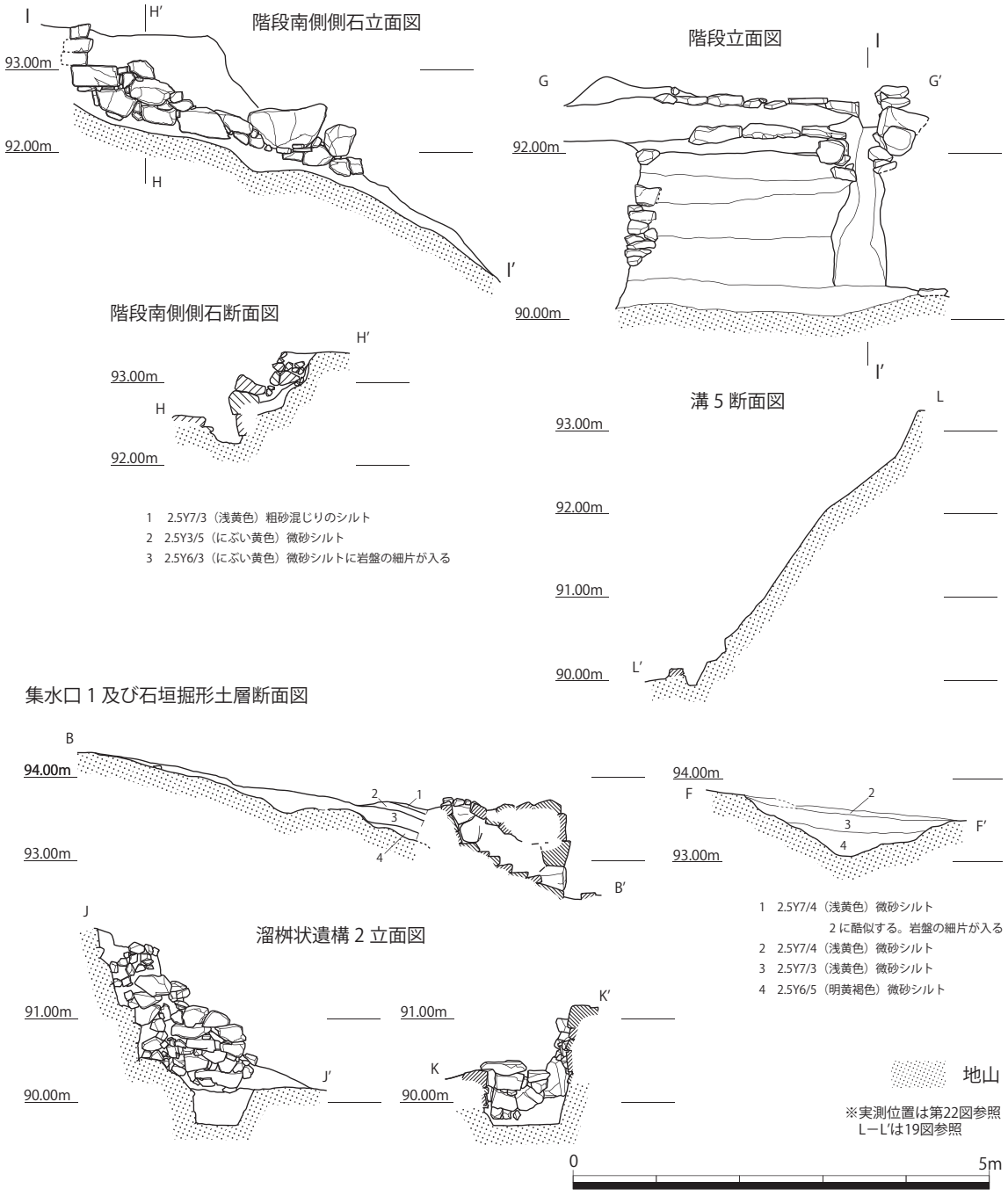
【溜桝状遺構1】（第 19・22 図） パイロット道除去後は地山（岩盤）となり、石垣の南側の地山上で検出した。20 ～ 30 ㎝大の砂岩の基底石が１段分しか遺存していなかったことから、かなりの削平を受けていたことがわかる。なお、基底部の石は岩盤を掘り込んで据えられていた。規模は石材内幅で長辺約 0.9 ｍ、短辺約 0.5 ｍ、残存の深さ 0.16 ｍ、掘形は長辺 1.35 ｍ、短辺 1.1 ｍの長方形を呈する。黄色系の砂混じりのシルトが堆積する。出土遺物は皆無であった。

（B）下段の遺構

【溝２・集水口２】（第 19・25・31 図、図版 19）溝２は崖部の裾に沿って岩盤を掘り込んで造られた暗渠排水溝で、約 10.5 ｍを検出した。北側ほど削平を受けており残りが良好でなく北端では検出できなかった。溝２の北半部は瓦製の土管を埋設し、南半部は石組みの暗渠となり、南側の溝７に接続する。土管埋設部分は長さ約 5.0 ｍを測り、この間に 17 個体を埋設していた。北端には土管の下に１枚の平瓦が敷かれていたが、本来は溝の幅に２枚を敷いていたとみられ、更にこの北側に所在していたとみられる溝からの流水を受けていたものと考えられる。基底部の高さから判断すると、北から南方向に流していたものと考えられる。また、暗渠部分の蓋石上に、半円の瓦製品２枚を円形に組合せ、その東側にやや湾曲する瓦製品１枚を立て集水口として機能させた施設（集水口２）を検出した。また、この集水口２より 0.8 ｍ上方の西側の崖部には岩盤を水平気味に掘り込み、直径約 0.5 ｍの範囲に平坦部を造り出し、その平坦部には集水口側に若干傾く扁平な砂岩が設置されている。この砂岩が設置された箇所は、上段からの排水施設の受口とみられ、木樋のようなもので上段からの流水を集水口に流していた可能性も考えられるものの、上段通路西側は崩落しているため確認できない。

溝２からの出土遺物は（133・186 ～ 189）である。（133）は青磁盤で、外面体部には丸鑿によ

る蓮弁文が彫られ、内面には片切彫りの草葉文が彫られる。また断面には漆継ぎの痕跡が見られる。堅緻な灰白色の胎土に草緑色の釉が厚く掛かる。（186・187）は集水口としている瓦質の製品である。外面には幅３㎝程度の縦方向のナデが、内面には横方向の粘土の接合痕が顕著に見られる。上下端部を厚くしようとする意識が見られ、中位部分の粘土を上下に押し出すような指押さえの痕跡が著しい。また、上下端面と側面は丁寧に面取りされている。（187）の外面上部には横方向に約３㎝幅の圧痕がある。箍状のもので結わえていた痕跡であろう。（188）の断面は平瓦のように湾曲する。厚みは 2.6 ～ 3.2 ㎝で、設置時に基部となっていた方が若干厚い。平面形状は縦 31.5 ㎝ × 横 27.2 ㎝とやや縦長である。（189）は土管として使用されていた瓦質製品の一



第23図　階段・階段南側石・溜桝状遺構２立面図、集水口１及び石垣掘形・階段南側石・溝５断面図（S=1/80）

つである。内面にはコビキAがみられ、両端部はナデにより調整されている。

【溝3】（第 19・25 図、図版 19） 崖部裾に岩盤を掘削して造られた排水溝である。包含層除去後崖部直下で崖部裾に沿うように長さ約 5.5 ｍを検出した。溝３南端では溝２と重複して南に続かないことから溝２の前身と考えられる。幅は約 0.5 ｍを測り、東側の肩は崖部裾岩盤を利用している。深さは約0.4ｍを測る。溝３の廃絶にあたっては８～15㎝大の割石が充填されていた。また、廃絶後その上に西側に面をもつ小振りな角礫が１～３段積まれ、この角礫列と崖部の間を黄色土で充填していた。その上部には厚さ２㎝程度の炭と焼土の堆積が認められた。

【溝7】（第 19・25 図、図版 20） 溝２の南側で検出した。崖部裾に沿って岩盤を掘り込んで造られている排水溝である。溝の範囲は溜桝状遺構２から北側へ約 10 ｍの地点で西側に屈曲する。この溝の基底部は中央付近が最も高く、溝の両端はそれぞれ 0.1 ｍ低いことから、竈状遺構の約１ｍ北を境にして北と南に流し分けをしていたと考えられる。また、西側屈曲部分は現状では素掘り溝であるが本来は側石があったものと思われる。しかし、営林署の建物建設時に削平を受け、岩盤を掘り込んだ掘形だけが残存したと考えられる。

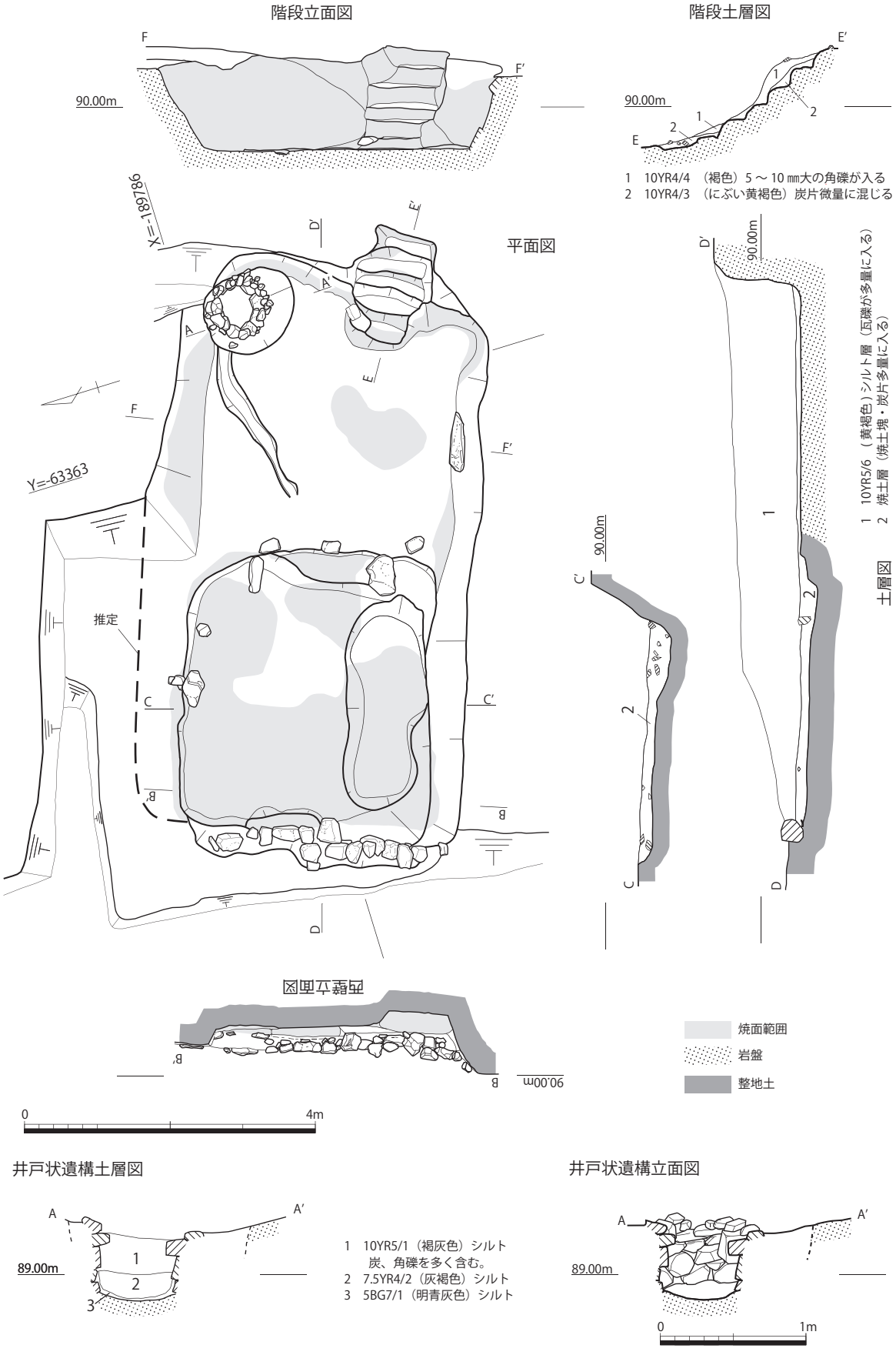
【溝5】（第 19・23・25・31 図、図版 20）階段遺構の南側で検出した崖部裾に沿って北から南に流れる排水溝である。検出長は約 14 ｍを測るが、電柱やコンクリート製の導水管などで大きく撹乱を受けていたため遺存状況は不良である。西肩には大きさ 20 ～ 40 ㎝大の砂岩の石列が遺存していたが、遺存していたのは北端と南端のみであった。溝３同様、東肩は崖部裾岩盤を利用していた。幅は遺存している基底部の石から 0.25 ～ 0.30 ｍ、深さは検出時の西肩側石の上から 0.12 ～ 0.20 ｍを測る。

遺物は口縁部が肥厚する土師器皿（127）、端反りの白磁皿（128）、口縁端部を上方に引き上げ、体部内面に丸鑿により蓮弁文が彫られる青磁盤（129）、外面の口縁部と体部の境には５条の櫛描き線が巡らされた瓦質擂鉢（134）が出土した。

【溜桝状遺構2】（第 19・22・23 図、図版 19） 階段遺構の北側側石下で包含層除去後検出した。岩盤を垂直気味に約 0.4 ～ 0.45 ｍ掘り込み、上部は東側と南側を石積みとしている。東側の石積みは約 30 ～ 40 ㎝大の砂岩が３段遺存しており、南側は階段遺構の北側側石に接続する。規模および形状は 0.7 ｍ ×0.8 ｍのやや楕円形を呈し、底は平坦で、深さは約 0.8 ｍを測る。埋土は黄褐色シルトに大振りの砂岩礫が多量に入る。この砂岩礫は周辺の遺構に用いられていた石材と推測される。

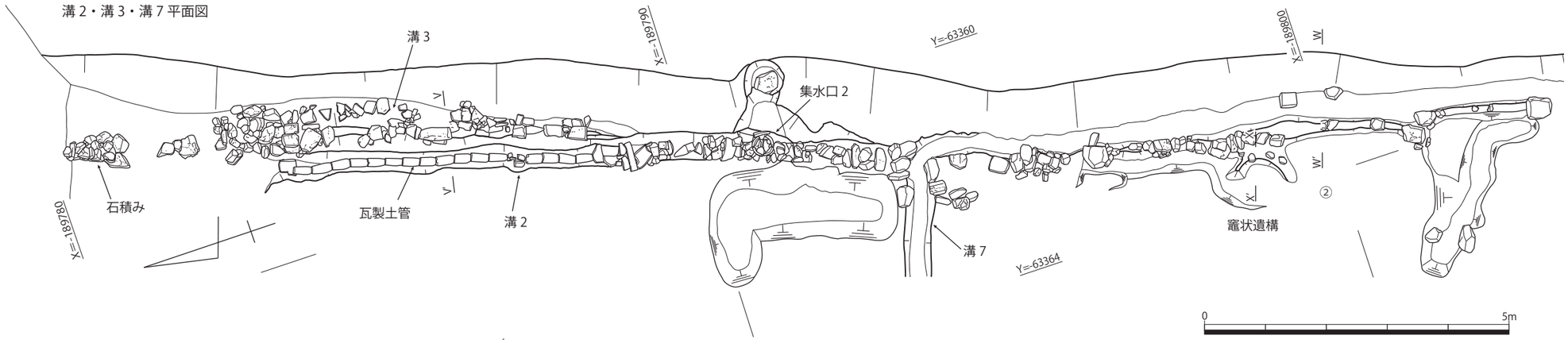
【竈状遺構】（第 19･25 図） 調査地中央で溝７の西側に造られていた。地山上に黄色粘土を貼り、壁の厚みは 0.25 ｍを測る。天井部は消滅していた。本体の幅は 1.2 ｍで、残存の高さは約 0.2 ｍを測る。焚口正面の壁は被熱し赤色化する。本体内部には炭や灰を含んだ黄色系の砂質シルトが堆積していたが詳細は不明である。

【半地下式倉庫1】（第 15・19・24・27・33・34 図、図版 21） ３次調査のCトレンチで検出していた遺構である。営林署建物のコンクリート土間および基礎固め土を除去後検出した（第 15 図）。規模

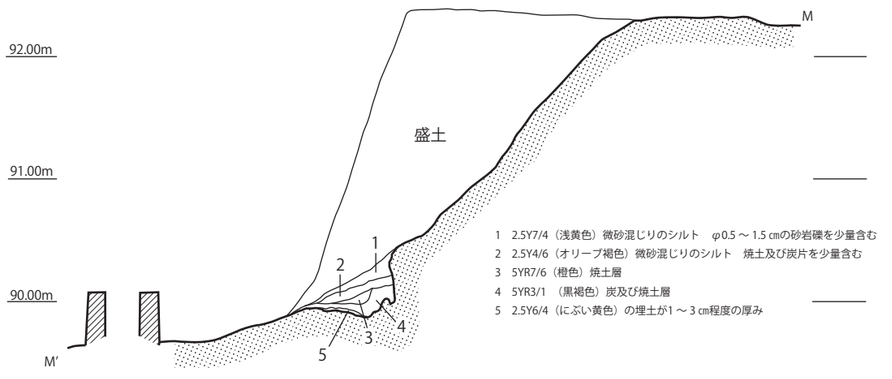


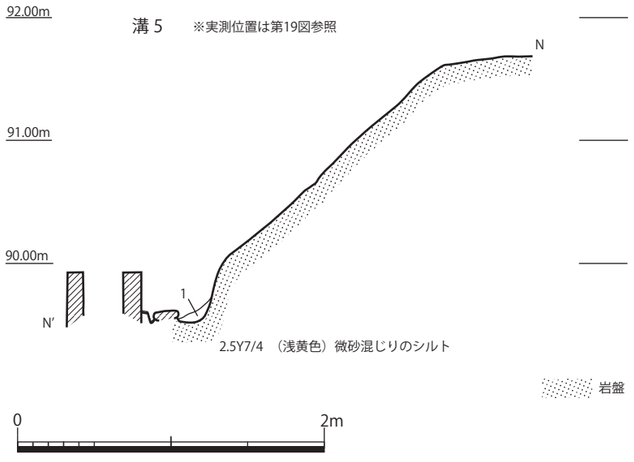
第 24 図　半地下式倉庫 1　平面図及び断面土層図、立面図（S=1/80）、井戸状遺構断面土層図及び立面図（S=1/40）

溝２・溝３・溝７平面図

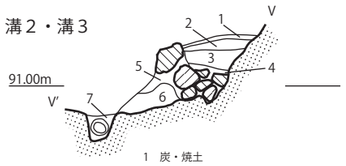


溝５　※実測位置は第19図参照



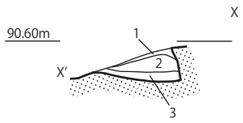


溝２・溝３



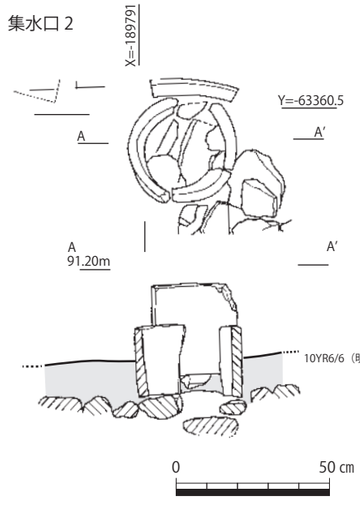
溝３
1　炭・焼土
2　10YR6/2（灰黄褐色）と 10YR7/8（黄橙色）の混層　微砂混じりのシルト
3　10YR5/2（灰黄褐色）微砂混じりのシルト
4　10YR 6.5/6　（黄褐色）微砂混じりのシルト
5　2.5Y6/3　（にぶい黄色）微砂混じりのシルト　側石構築土
6　10YR6/6　（明黄褐色）微砂混じりのシルト（地山の砕けた土）
溝２
7　2.5Y7/6　（明黄褐色）粗砂混じりのシルト

竈状遺構

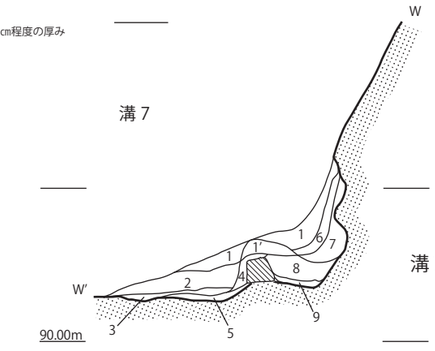


1　2.5Y6/6　（明黄褐色）微砂混じりのシルト
2　2.5Y5/6（黄褐色）　微砂混じりのシルト
3　2.5Y5/6（黄褐色）　微砂混じりのシルト

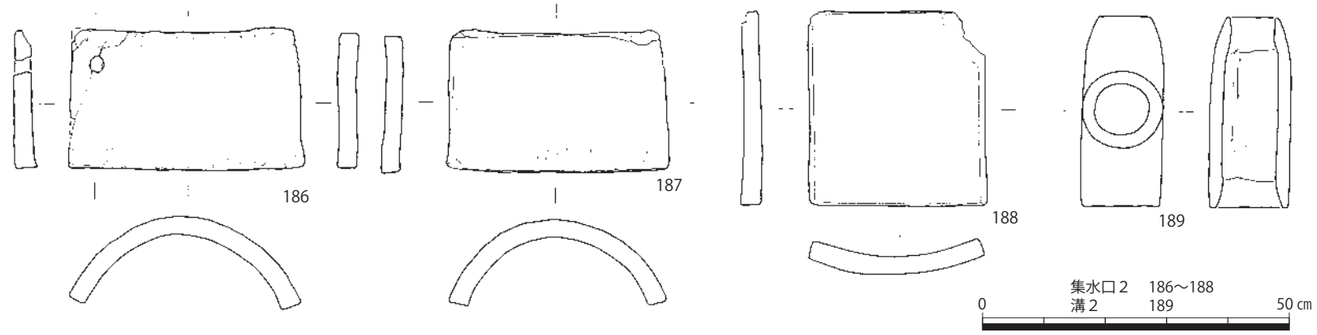
集水口２



溝７



溝７
1　焼土
1'　焼土と 2.5Y7/3（浅黄色）シルトの混層
2　焼土　1 より炭が多いため黒色味が強い
3　炭層　（黒色）
4　2.5Y7/3　（浅黄色）シルト　貼り土
　2.5Y6/8　（明黄褐色）のφ3 ～ 2 ㎝大のブロックが微量入るシルト。
5　7.5YR6/6（橙色）粗砂混じりのシルト
6　2.5Y7/4　（浅黄色）シルト　上段からの落ち込んだ壁土で、奥は焼面となる。
7　2.5Y7/6　（明黄褐色）粗砂混じりのシルト
8　2.5Y7/6　（明黄褐色）粗砂混じりのシルト
9　7.5YR6/8　（橙色）に 2.5Y8/1（灰白色）シルトが混じる
　底の凹凸を平滑にするために岩盤の岩をたたき締めている。



第25図　溝２・溝３・溝７・集水口２・竈状遺構平面図（S=1/80）、溝２・溝３・溝５・溝７・竈状遺構土層図（S=1/50）、集水口２平面図及び立面図（S=1/20）、集水口２瓦製品及び溝２瓦製土管実測図（S=1/10）

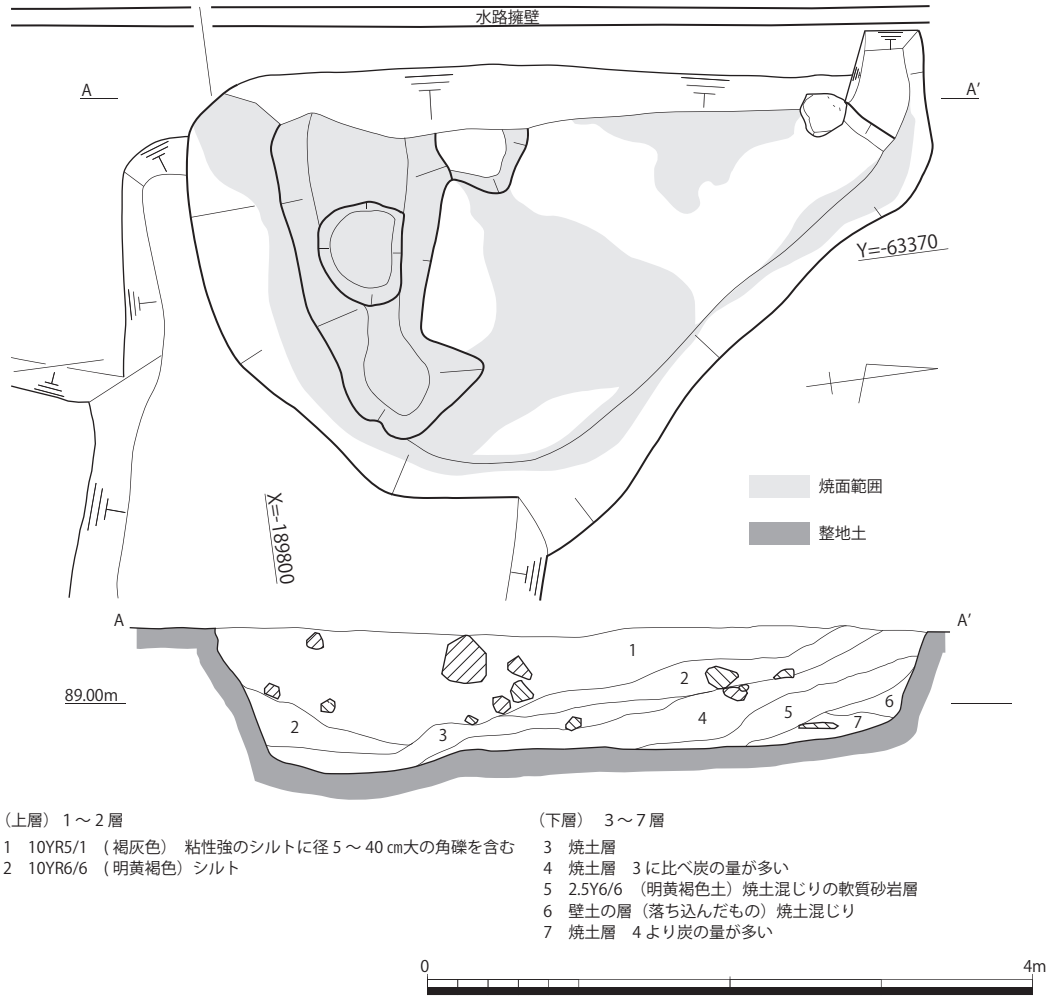
は東西約 8.5 m、南北約 4.0 mの長方形の半地下式倉庫で、壁は東半部が岩盤、西半部が整地土を掘削して築かれていた。整地土部分の壁は厚さ 0.10 ～ 0.15 mで内側から精良な土を貼り付け、被熱し赤色化している。残存の深さは 0.3 ～ 1.2 mを測る。東壁には岩盤成形により造り出した階段が４段設けられ、幅は約 1.1 mを測る。また、床面の階段に接する部分は、粘土を土饅頭状に盛り、固く締め踏み台としていた。西壁は石積みで、１～２段分のみ残存していた。西壁の中央付近の石積み直下にも表面が被熱して赤色化した幅約 1.0 mの土饅頭状の踏み台を床面に設置していた。このことから西側にも石積み階段の昇降施設が設置されていた可能性がある。床面の北東隅では石積みの井戸状遺構を検出した。井戸状遺構は岩盤を掘削し、10 ～ 20 ㎝大の砂岩礫を用いて、約 0.5 m積み上げて作られていた。掘形は直径約 1.3 ～ 1.4 m、石積みの内径は約 0.5 mを測る。床面の中央から井戸状遺構に向かって幅 0.2 ～ 0.3 mの浅い溝状遺構が延びる。井戸状遺構は湧水や防湿の機能が推定される。床面の西側半部は東側に比べ約 0.1 m程度低くなり、低い西側の南半部は船底状に更に窪んでおり、この西側の一段低い箇所の境界部分には、柱あるいは束柱の礎石とみられる 30 ～ 55 ㎝大の扁平な石が配されている。礎石の間尺は、一段低い箇所の東辺の２石は 1.76 mを測る。また、床面の一部を断割ったところ、西側の一段低い床面には１～２㎝の厚みの精良なシルト層で貼床を施していたことが確認できた。床面の大半が被熱赤色化により、焼け締まっている。

埋土は大きく分けて２層に分層できる。１層は検出面から約 0.9 mの厚みで瓦礫が多量に混じる黄褐色シルト層、２層は厚さ 0.15 ～ 0.30 mの炭片混じりの焼土層であった。１・２層ともに瓦類や備前焼を主とし、土師器皿、中国製白磁・青磁も出土した。特に上層には砕けた砂岩礫が大量に認められ、大きいものでは 30 ～ 40 ㎝大のものもあった。このような埋土の状況から半地下式倉庫１周辺の石材を一括投棄することにより人為的に埋めた公算が高い。

出土遺物では、土師器皿で口縁部が肥厚するタイプのもの（67 ～ 72）がある。（73）の瓦質火舎の体部中位には渦状の印刻が施される。二次焼成を受ける。（76 ～ 79）は中国製磁器で、（76）は腰折れの染付稜花皿である。体部外面は丸鑿により蓮弁が彫られ、口縁部外面には圏線間に渦文を描く。畳付の釉は拭き取られている。（77・78）は白磁端反皿である。（78）の外底には呉須で文字が書かれているが判読不明である。（79）は線描蓮弁文の青磁碗である。胎土は焼き締まらず軟質で、外面には細かい貫入が入る。釉の発色は褐色を帯びた淡い緑色で、畳付を超え高台内面途中までかかる。（74・75・80）は備前焼で、（74）は鶴首徳利の口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部内面の一部と頸部には胡麻状の灰が被る。（75）の壺は口縁を玉縁状に外方に折曲げる。（80）は水屋甕である。肩部に珠文を貼り付け、体部中位には貼付け突帯を巡らす。根来寺遺跡ではあまり見ないタイプだが、昭和 55 年度調査のハ段から出土している。（81）の胎土には長石が多量に含まれる。信楽焼の壺と思われる。瓦の殆どは上層の瓦礫層から出土した。（166）は中央に宝珠を付す鬼板の類である。（168・169）は均整唐草文軒平瓦で、同笵である。顎貼り

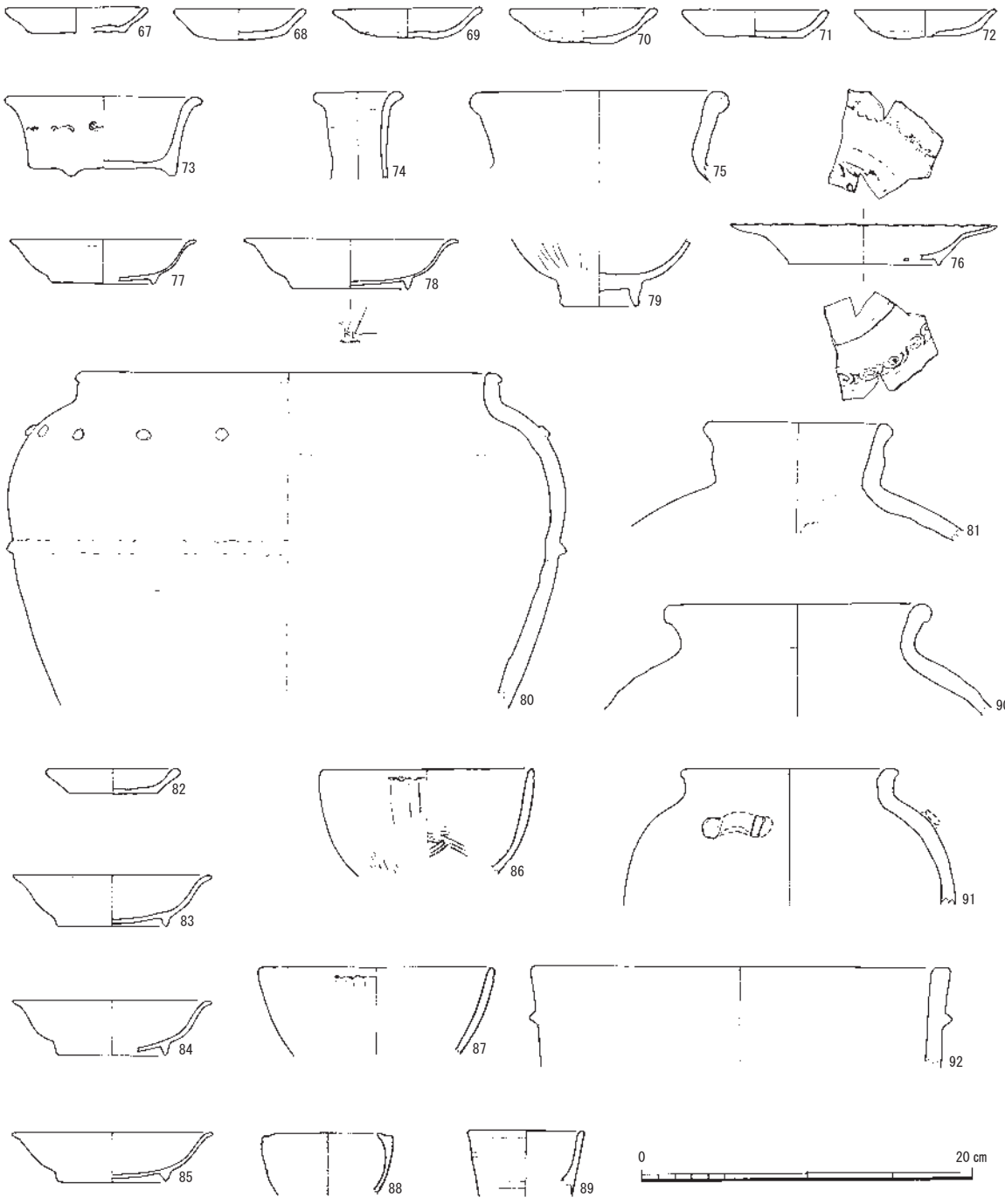
付けで、瓦当上縁と顎後縁には面取りがみられる。(167) は丸瓦である。内面には吊り紐の圧痕は確認できないが、布袋を太さ１㎜程度の糸で縫付けている圧痕が幾筋も確認できる。なお、１層からは鯱瓦が数点出土しているが、鯱瓦については後述する。

【半地下式倉庫2】(第 19･26･27 図、図版 22)　盛土および撹乱土除去後、整地土上面で検出した。この遺構の東側は撹乱坑で壁の上部が欠損し､西側は調査区外に延びており全形は確認できない。検出した規模は東西長 3.3 ｍ以上、南北長約 5.0 ｍを測る。残存深度は最大で約 1.0 ｍを測る。倉庫の昇降施設は調査区内では検出していないものの、北西隅には昇降施設の可能性がある僅かに段の付く箇所を検出した。壁面はいずれも整地土を掘り込み、砂岩礫で壁を補強し、更にその上から精良な土を貼付けて化粧塗りを施している。また、半地下式倉庫１と同様に壁の表面から床面にかけて赤く焼け締まっている状況が確認でき、防湿を意図した造作と想定される。半地下式倉庫壁面の被熱赤色化による築造例は既往の調査成果から大規模農道の調査における谷部Ｂ地区ＳＸ－１６にみられる(注3)。砂岩礫で壁を保強する方法は、地山以外の軟弱な基盤層上に半地下式倉庫を築く場合に壁を堅固にする目的に用いられたものと推定できる。床面も半地下式倉庫１と同様に船底状の浅い窪みが南壁に沿って確認でき、甕などの大容量の陶器を据付けていたと推測



第 26 図　半地下式倉庫２　平面図及び土層図 (S=1/50)

できる。埋土は上層（第１層・第２層）と下層（第３層～第７層）の２層に大別できる。上層の礫層の上位の第１層は大きさ５～ 40 ㎝大の砂岩礫に粘性の強い褐灰色シルトが混じり、下位の第２層は明黄褐色シルトに 10 ～ 20 ㎝大の礫が混じる。下層は焼土層で北から南に掻き込まれたように堆積する。出土遺物には瓦類、備前焼を主とする焼締陶器、瓦質土器、中国製青磁・白磁が出土した。焼締陶器には少量の常滑焼の体部が含まれる。下層の焼土層からは 16 世紀代の白磁皿の出土量が目立ち、青磁碗は少量の破片しか出土しなかった。(82) は口縁部の肥厚する土師器皿である。底部の粘土貼付け痕がよくわかる。(83 ～ 85) は白磁端反皿である。(83) と (85)



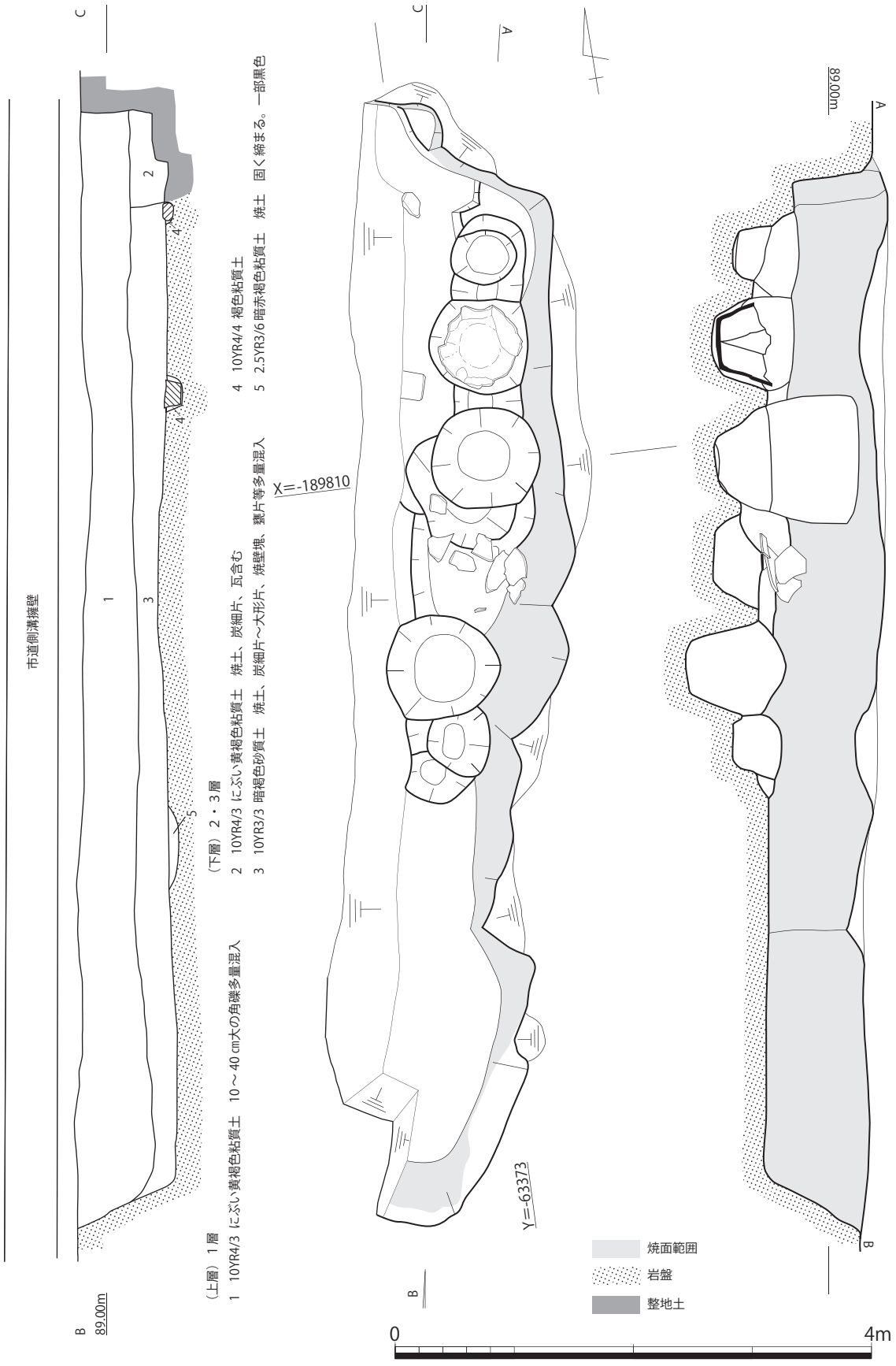
72・74・80・81：半地下式倉庫１（1 層）、67～71・73・75～79：半地下式倉庫１（2 層）、82～92：半地下式倉庫２（4 層）、92: 半地下式倉庫２（5 層）

第 27 図　半地下式倉庫１・半地下式倉庫２　出土遺物実測図

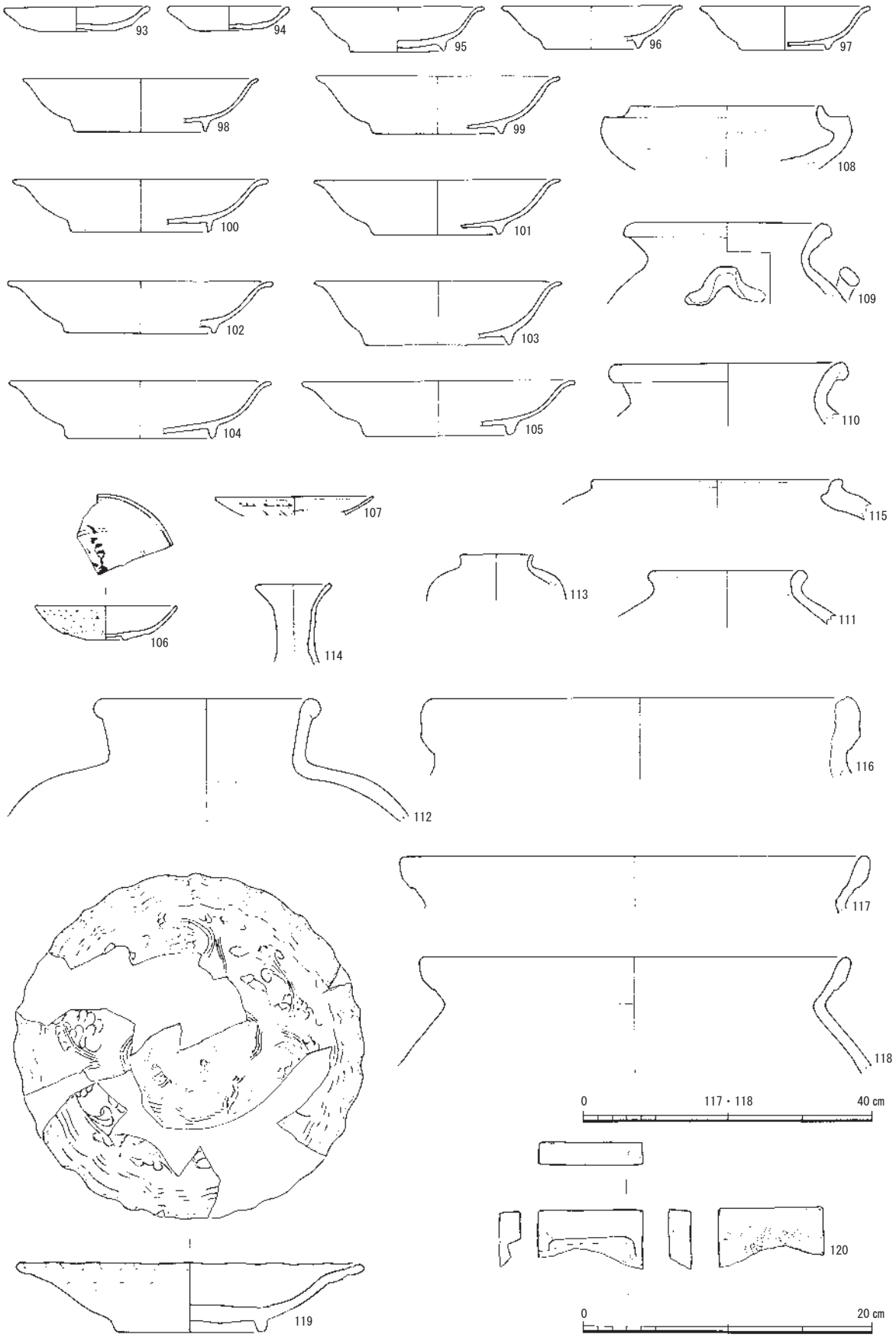
の高台には硅砂状のものが付着する。(86・87) は線描蓮弁文の青磁碗で、剣頭は波線となる。(87) は二次焼成を受けている。(89) は青磁香炉である。草緑色の色調で、粗い貫入がみられる。外面には体部中位から底部にかけて二条一単位の細い沈線が二単位みられる。(88) は青白磁の香炉である。外面には口縁直下から底部にかけて二条一単位の沈線が三単位施される。(90・91) は備前焼壺である。(90) は短い頸部の直下から肩のよく張るタイプのもので、口縁端部から頸部にかけて灰がかかる。内面頸部下の粘土紐接合痕がよく目立つ。(91) は耳の痕跡から四耳壺になると思われる。赤茶褐色に発色し、硬質に焼き締まっている。(92) は土師質の火桶の類と思われる。口縁下部に三角突帯を貼り付ける。

【半地下式倉庫3】(第 19・28 ～ 30・33 図、図版 23)　階段遺構の南西側の調査区西端で検出した。大半が調査区外に延びるため検出したのは僅かに東側部分のみである。遺構の殆んどは岩盤を掘込んで構築されていたが、一部北端では整地土を掘込んでいる。規模は南北 9.4 m、東西 1.7 m 以上を測る。残存深度は約 0.8 mを測り、床面上には南北方向に甕埋設坑 7 基の掘形が列状に検出された。埋設坑の深さから甕は肩部まで埋設されていたと考えられる。また、埋設坑の掘形の規模から、据付けていたとみられる大甕は 4 基で、両端 3 基の掘形は浅く小さい。埋土内からは大形壺の破片も出土しているため、両端には壺を埋設していた可能性も考えられる。掘形内に甕底部が遺存していたものは 1 基で、他は埋土中から散乱した状態で出土した。出土した甕の破片はすべて備前焼である。また、半地下式倉庫 1 ・ 2 同様、壁から床面に赤色化が認められる。埋土は水平堆積で、大きく 2 層に分けられる。上層は黄色粘質土に 10 ～ 40 ㎝大の砂岩礫を多量に含み、下層は炭の細片を含んだ焼土層であった。

上層から出土した遺物は瓦類が殆どで、少量の備前焼の壺・甕の破片もある。下層の焼土からは備前焼甕・壺、中国製青磁盤・白磁皿が出土し、半地下式倉庫 2 と同様に白磁皿の出土量が多い。他には土師器皿、瀬戸美濃陶器が出土した。上層出土遺物と下層出土遺物は、備前焼甕の口縁部の形状から乗岡編年の中世 5 期あるいは中世 6 期に相当し、時期差の無いものと判断できる。(93・94) は口縁部の肥厚する土師器皿である。(95 ～ 105) は白磁の端反皿である。口径 12 ㎝前後の小振りのもの (95 ～ 97) と口径 17 ～ 18 ㎝の大振りのもの (98 ～ 105) がある。高台畳付には硅砂状の付着がみられるものや、二次焼成を受けているものは釉が剥げ落ちたり、煤で黒ずむものがある。また、外底に「キ」の字状の擦痕のあるものもみられ、寺院あるいは人物を指す記号と考えられる。(106・107) は染付の碁笥底皿で、図柄は双方共同じである。体部下半には蕉葉文帯、内面見込には草花文が描かれる。(108) は瓦灯と呼ばれる灯火器の下部で、上部の蓋とで一式となる。本来は下部の中央に灯明皿を置く台が付き、上部の灯り調整を行う蓋の上にも灯明皿を置く台が付く。体部は横方向のミガキが施される。(109 ～ 118・121 ～ 123) は備前焼である。(109 ～ 113・123) は壺で、(109) は四耳壺になるものと思われる。(110・111) は口縁玉縁を呈するもので (112) の頸部は強いナデに



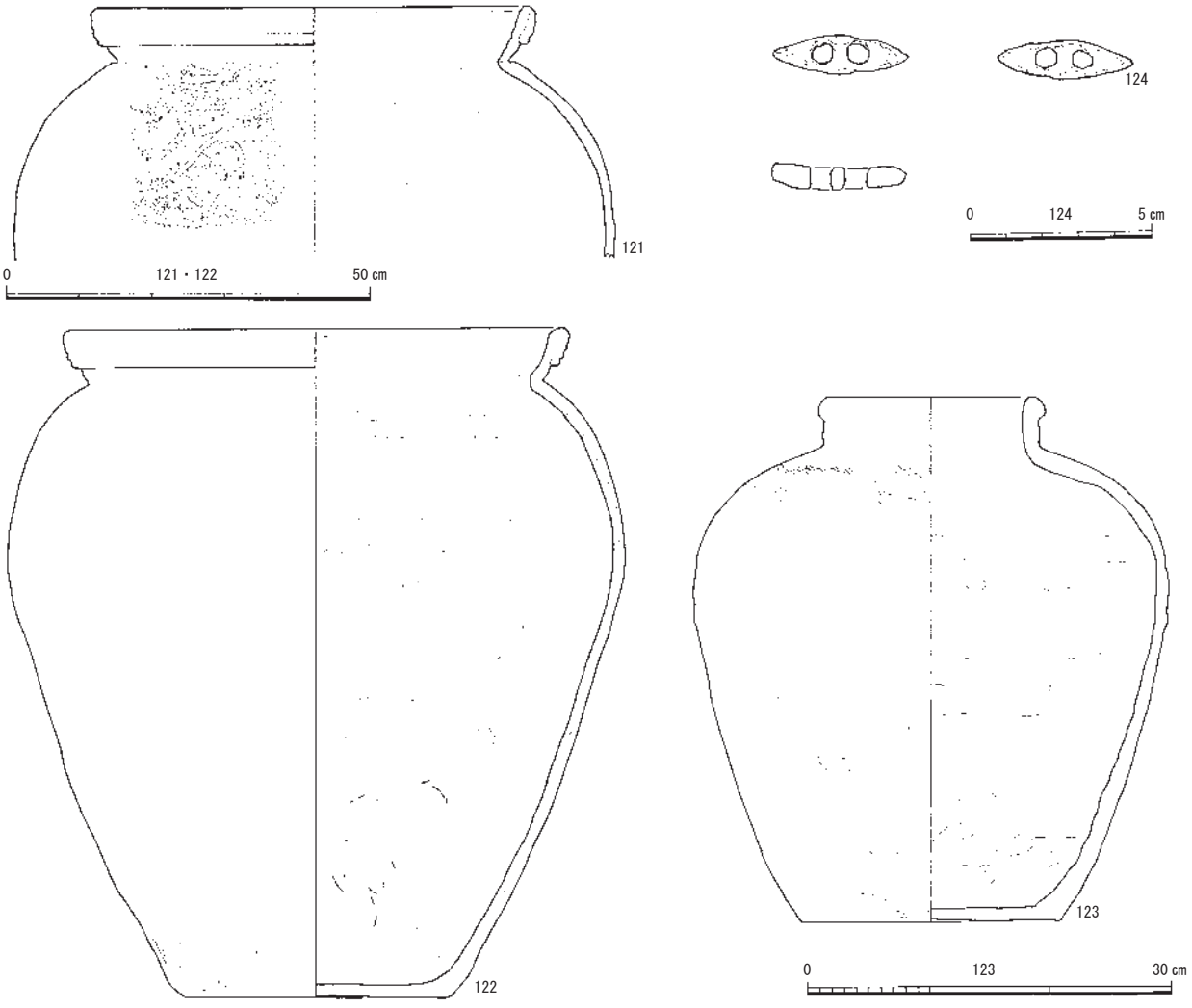
第 28 図　半地下式倉庫３　平面図及び土層図、立面図　(S=1/50)



109：半地下式倉庫３（１層）、93～108・110～120：半地下式倉庫３（３層）

第 29 図　半地下式倉庫３　出土遺物実測図１

より外反する。(113)は小形の壺である。口縁端部から体部中位にかけて胡麻状の釉がかかる。(123)は大形の壺である。直立気味の頸部から一気に肩の張るタイプである。肩部には櫛描の二条の波状文と直線文が巡る。外面の口縁端部と肩部および内面の底には灰が被る。(114) は鶴首徳利の口縁部から頸部である。(115) は水屋甕である。頸部が残っておらず、口唇部には段が付き蓋の受けとなる。(116 ～ 118・121・122) は甕である。(116) の内面は口縁端部から打ち欠かれたように剥離している。時期は乗岡編年中世５期ｂである。(117・118) は同タイプのもので、時期は乗岡編年中世６期ａと考えられる。(121) の肩部には「二石入」のヘラ描きがみられる。口縁部内面および頸部から肩部にかけて灰が被る。特に肩部の暗緑色の釉垂れは著しい。(122) は口縁から底部まで接合できた唯一の甕である。器高は 90 ㎝を測り、内面の頸部直下から体部中位にかけて指押さえ調整の痕跡が無数に残る。いずれも横方向のもので粘土紐接合痕をナデ消したものと思われる。口縁外面には３条の凹線が巡り、乗岡編年中世６期ｂに相当すると思われる。(119) は青磁の稜花鉢である。体部は斜め上方にやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに「く」の字状に水平気味に外反する。釉は淡緑色を呈し、透明感が強く高台内部までかかり、外底は削られている。露胎部は茶褐色に発

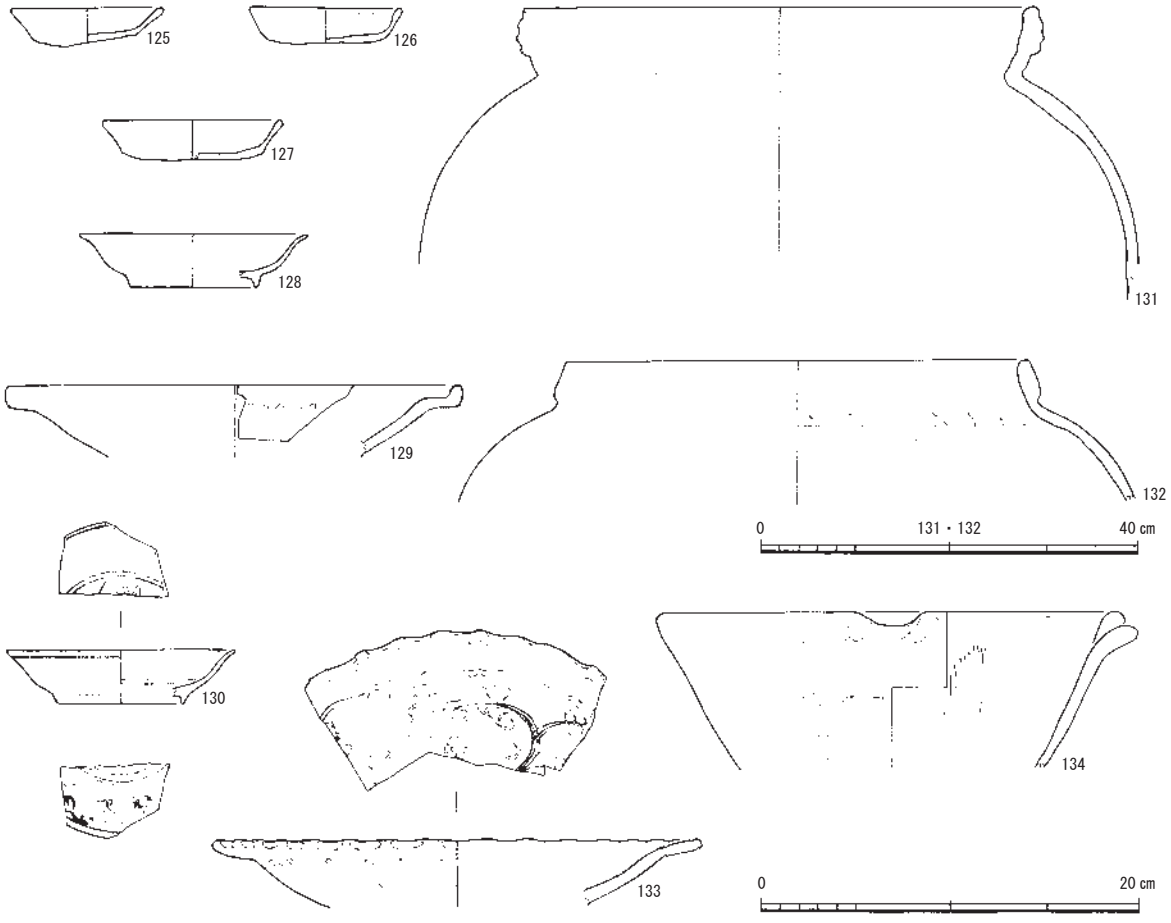


121～124：半地下式倉庫（3 層）

第 30 図　半地下式倉庫３　出土遺物実測図２

色している。外面体部は丸鑿で蓮弁状に削り、内面には櫛状工具による雲文と花文が施される。(120)は硯の海部分の破片である。裏面には外方から中方向へ幅４㎜の鑿痕が残っている。(124)は銅製の鞢である。甲冑等に使用される留め金具で、根来寺の調査において出土例が数例ある。瓦には(170)の波状文軒平瓦がある。二次焼成をうけ、器面の摩耗が著しい。

【半地下式倉庫4】(第 19・21・31 図、図版 23)　調査地の北西隅で盛土および営林署のコンクリート土間を除去後検出した。整地土上面から掘込まれて構築されている。半地下式倉庫４の南側と東側は電柱と支線が障害となって掘削範囲が限られ、北側は調査区外となるため全形を把握できなかった。規模は東西約 3.0 ｍ以上、南北約 1.8 ｍ以上のもので、残存深度は 1.5 ｍを測る。床面では直径 0.5 ～ 0.6 ｍ、深さ 0.08 ～ 0.15 ｍのほぼ円形を呈する窪みを３基検出した。この内１基には甕の底部が遺存していた。埋土は調査区北壁土層図（第 21 図）に図示したように７層（A ～ G）に分けられるが、基本的に４層に大別できた。上層（A・B）は浅黄色砂質シルトに 10 ～ 40 ㎝大の砂岩角礫を多量に含み、その下部には焼土に炭片や明黄色褐シルトのブロックおよび小礫を若干含む。中層（C）は明黄褐色砂質シルトに地山や焼土および炭片の小ブロックを含む層で、下層（D）は焼土層である。最下層（E・F・G）は白色及び黄色系のシルト土である。最下層は埋甕を固定していたと考えられる土で西側壁際に堆積が認められた。下層は 16 世紀後半以降の遺物を含んでおらず、また、



125・130～132：半地下式倉庫４（D 層）、126：溝１、133：溝２、127～129・134：溝５

第 31 図　半地下式倉庫４・溝１・溝２・溝５　出土遺物実測図

ブロック状の土や礫を含まないことから天正の兵火時にかかる焼土層と判断した。中層は遺物の時期に差異は認められないが、焼土以外の土も混入していることから天正の兵火以降の堆積層と考えられる。上層は、他に検出した半地下式倉庫と同様の堆積状況を呈し、後世の一括投棄と考えられる。

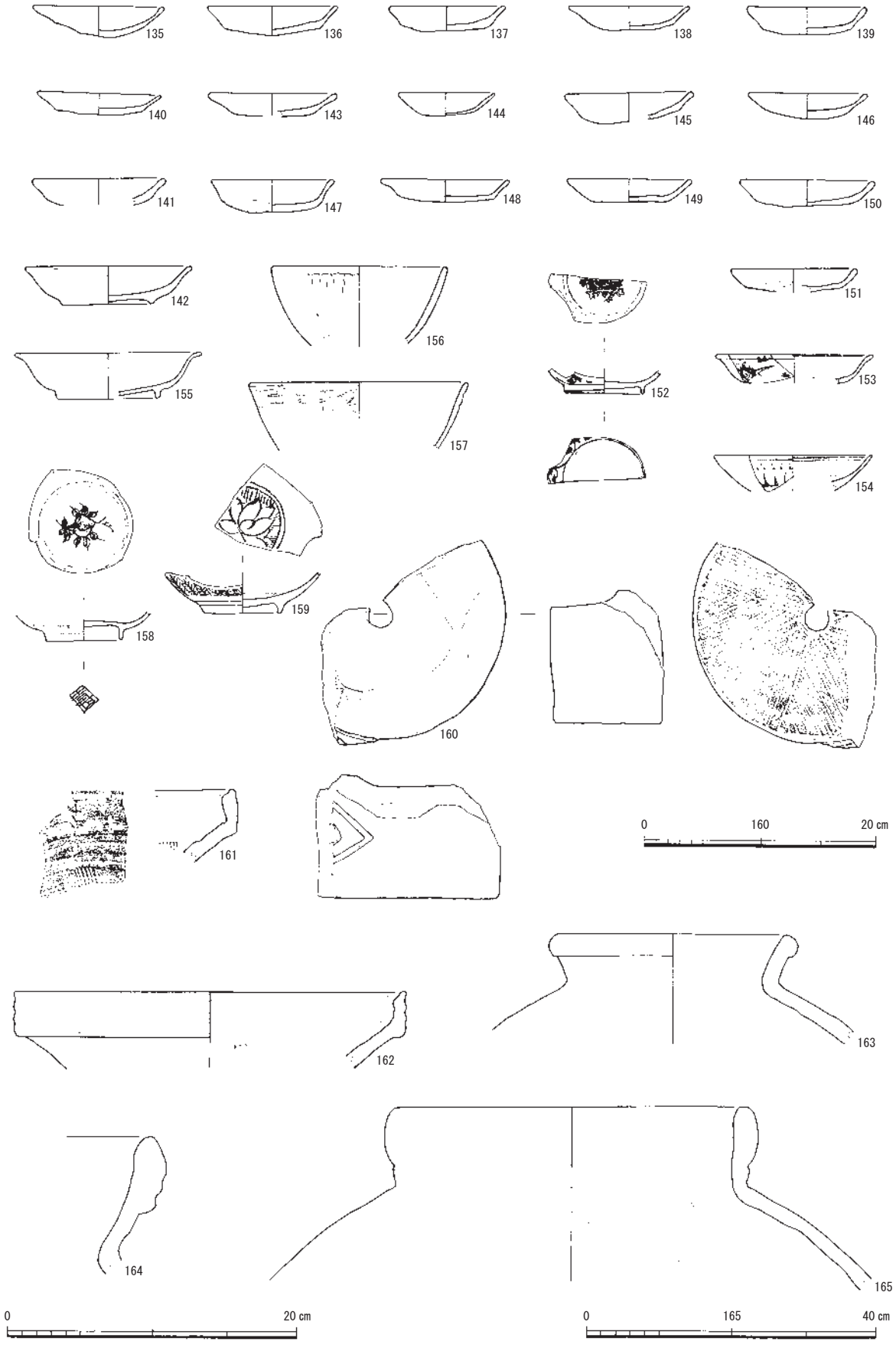
下層の焼土層からは中国製染付、土師器皿、瓦類などが出土している。(125) は口縁部の肥厚する土師器皿である。(130) の染付皿は口縁が端反のタイプのもので外面には牡丹唐草文が描かれ、見込みの圏線内の絵柄は不明である。高台畳付の釉は削り取られている。(131・132) は備前焼甕である。(131) の口縁外面には３本の凹線が巡る。乗岡編年中世６期に該当する。(132) は外面肩部から下と内面頸部から下をヘラ状工具で丁寧に削り、粘土紐接合痕を消している。乗岡編年中世５期ｂに該当する。

(C) 包含層・崩落土・盛土出土の土器（第 31 図）

包含層および崩落土は崖部の斜面から斜面裾部にかけて堆積した層である。包含層は混じりのない黄色系のシルト層である。また、地点によって崖部に堆積する範囲や厚みに著しく差異がみられる。４次調査の中央セクションベルトを設定して土層観察を行った地点では上段からの崩落が著しく、崖部の裾部のみ確認できた（第 21 図中央セクションベルト第４層～第７層)。包含層の上部に堆積している岩盤礫や粗砂が混じった層については崩落土として遺物を取上げた。下段の営林署官舎の土間コンクリート上の土については盛土として遺物を取上げた。盛土は営林署官舎建物除去時、重機等でこの辺りを平滑にした土壌と考えられる。盛土から出土する 16 世紀代の遺物は、３・４次調査地付近に建っていた子院建物の時期を示す遺物と考えられる。崩落土及び盛土から出土した遺物には土師器皿、中国製磁器（青磁・白磁・染付)、備前焼、瀬戸美濃陶器、瓦類などがある。

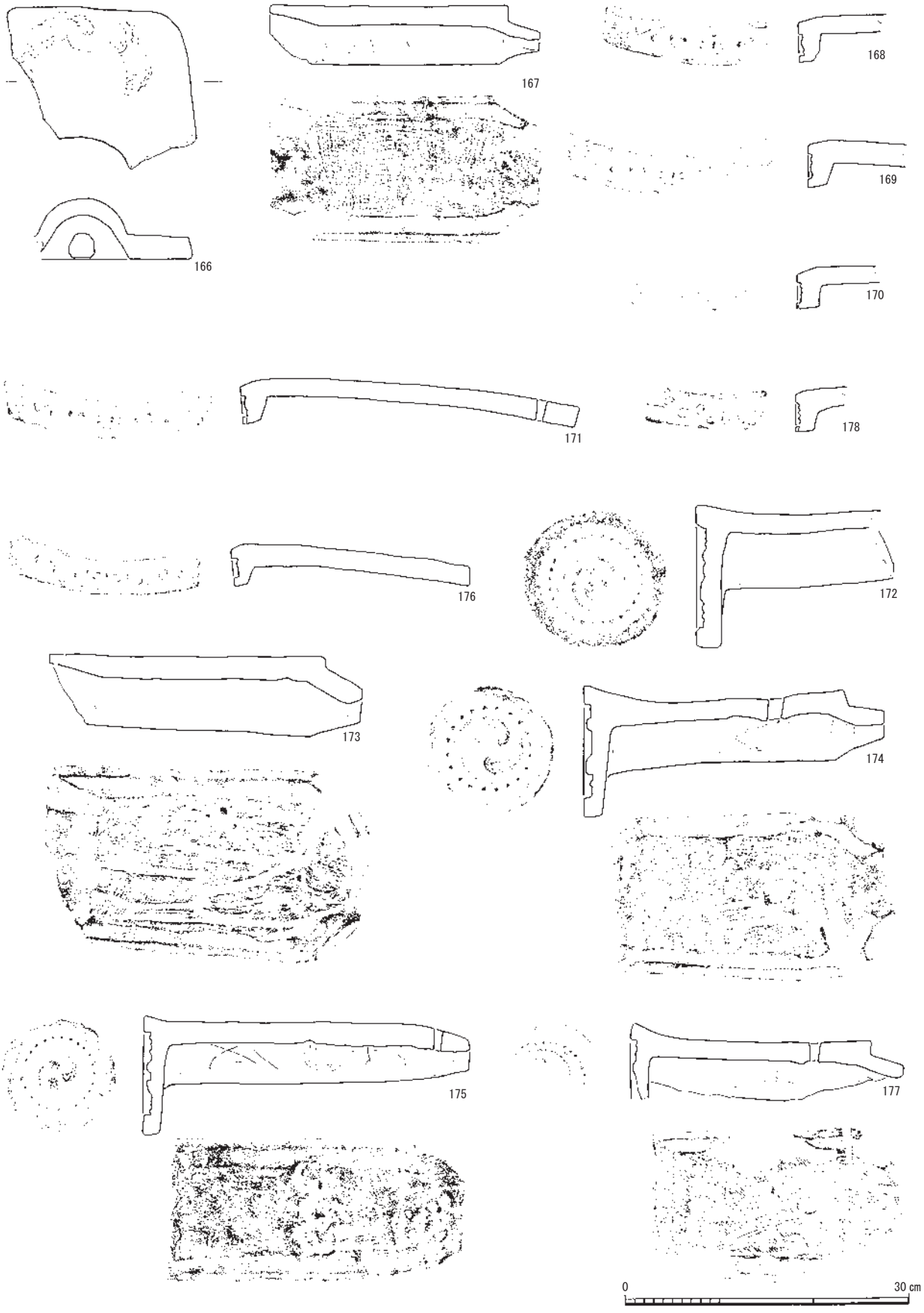
〔包含層出土の遺物〕(135 ～ 141･143･145 ～ 150) は口縁部の肥厚するタイプの土師器皿である。口径８～９㎝の範囲に収まる。この内（139・143・145・150・151）は灯明皿として使用されたもので、口唇部には煤が付着する。(144) は土師器小皿で体部は斜め上方に立ち上がり、色調は肌色を呈する。(142) は瀬戸美濃灰釉皿である。口縁は端反り、内面には粗い貫入、外面は細かい貫入が入る。内面の一部に釉溜まりがみられ濃い緑色を呈する。16 世紀中頃前後の時期と考えられる。(152 ～ 154) は染付皿である。(152) の見込の二重圏線内には花文が描かれる。(153) は端反の皿である。外面には牡丹唐草が描かれる。(154) は碁笥底の皿である。外面には蕉葉文が巡る。(161) は備前焼擂鉢である。口縁部と体部の境で重ね焼きによる変色がみられる。乗岡編年中世６期ｂである。(176) は均整軒平瓦で、５弁の中心飾りをもち、１本の支葉を３回反転さす。瓦当上縁を面取りしている。(177) は巴文軒丸瓦である。珠文は細かいが、下部が欠損しているため数は不明である。内面にはコビキＡと２回転させた吊り紐の痕跡が残る。

〔崩落土出土の遺物〕(155) は白磁の端反皿である。色調は灰白色を呈する。(156・157) は青磁碗で、(156) は線描蓮弁文で剣頭は意識せず波状となる。(157) は外面口縁に雷文帯を巡らせる



135～154・161：包含層、155～157・159・160・162～164：崩落土、158・165：盛土

第 32 図　包含層・崩落土・盛土　出土遺物実測図



166～169：半地下式倉庫（１層）、170：半地下式倉庫３（１層）、171～175：溝１、176・177：包含層、178：崩落土

第 33 図　出土瓦実測図

ものである。(159)は蓮子型の染付碗で、外面には蕉葉文が巡り、内底には蓮華文が描かれる。(160)は砂岩製の茶臼で、被熱している。上臼の部分で摺り目は９本を一単位とする。挽き手の部分には菱形の装飾が作り出されている。(162）は備前焼擂鉢で、(161）同様に重ね焼きによる変色がみられる。(163）は口縁玉縁状を呈する備前焼の壺である。口縁外面端部から内面、肩部から体部にかけて灰が被る。色調は赤茶色を呈し、焼成は堅緻である。(164）は備前焼の甕で、口縁側面に３条の凹線が巡る。(178）宝珠文軒平瓦である。１本の支葉を４回反転する。本調査でこのタイプは１点だけ出土した。

〔盛土出土の土器〕(158）は饅頭心型の底部をもつ染付碗で、見込には花弁文が描かれる。(165）は備前焼の甕である。頸部下半から体部にかけて灰が被る。乗岡編年中世５期である。

（D）出土した鯱瓦について（第 34 図、図版 27）

鯱は建物が火事の際、口から水を噴き出して火を消すという火伏せの信仰対象の架空の生き物である。日本では寺院本堂内の厨子や神社の建物の要所に使用されていた。和歌山県では西田中神社羊宮神社本殿の向拝木鼻の 15 世紀中頃と言われる木彫の鯱が知られている。城郭建築で鯱瓦を使用した初例は、織田信長の安土城と言われている。

鯱瓦の部材は、上段の西端縁辺部から崖部にかけての崩落土と下段で検出した半地下式倉庫１の上層（第１層）の瓦礫を含んだ埋土から出土した。鯱瓦は組合せ式と考えられ、下顎から胸鰭にかけての顔部、胴体部、尾鰭の３部材、あるいは顔部と胴体部から尾鰭の２部材から構成されていたものと思われるが、尾鰭の部分が出土していないため不明である。これらの部材から推定して高さ 50 ㎝程度と思われる。

組合せ式鯱瓦の最古のものとしては安土城の出土例があげられるが、完形品としては広島城出土例が最も古い。広島城の鯱瓦は目から尾鰭までを一体に製作しており、合計４部材から構成されている。今回の出土例とは組み合わせ方法が異なるが、部位の同定の参考資料となる。(注16)

今回出土した鯱瓦は口、耳、目、棘、胸鰭、尻鰭、蛇腹の一部に該当する。下顎から胸鰭の部分は一体作りであるが欠損している。この部材は２個体分が出土し、棘をもつ胴部もヘラ描き鱗の描写などに差異がみられることから雌雄２個体分と考えられる。なお、出土した部材には、いずれも釘穴が見られなかった。

(179）は尻鰭の先端と考えられる部位である。断面三角形の深い５筋の抉りで鰭を描写している。抉りの太さは統一されていないため、鑿ではなくヘラ状の工具により抉られていると思われる。(180）は胸鰭と考えられる。鯱の右側に貼り付けられたものと思われる。全体に磨滅しているため調整ははっきり確認できないが、この部位の基部には胴体部との貼り付け痕らしき箇所がみられる。鰭先の両端は若干欠損している。鰭の描写は尻鰭ほどダイナミックでなく、細い５筋で表現される。(181・183）は胴体部分に背鰭と思われる棘を３本貼り付けてから鱗と棘の側面

の筋状の意匠をヘラ描きしている。（181）の１枚の鱗の大きさは 2.0 ～ 2.5 ㎝であるのに対し、（183）は 2.7 ～ 3.0 ㎝である。（182）は目の部分と考えられる。黒目の部分は深さ約３㎝の円錐状の孔を穿って表現するが、この孔は突き抜けてはいない。（184・185）は口から耳および胸鰭、蛇腹にかけての部分である。（184）は二次焼成を受け、すでに胸鰭は剥離して欠損する。耳は三角形気味に粘土を輪状に貼り付ける。口の上部からは鱗がヘラ描きされている。蛇腹は５段に分かれている。鱗のヘラ描き表現は（181）の胴部のヘラ描きと同様と思われ、（181）と（184）は同一個体として組み合わされる可能性が高い。（185）は（184）と同一の部位の別個体である。下顎には牙の欠損部と考えられる箇所がある。蛇腹の下部は欠損しており４段分が確認できる。鱗の表現は（183）と同様と考えられることから同一個体として組み合わされた可能性が高い。

鯱瓦の部材は、上段西側崖部の崩落土から出土したもの（180 ～ 182）も含まれるため、上段に存在していた子院の建物に用いられていたことは明らかである。また、下段の半地下式倉庫１の第１層とした上層埋土（瓦礫層）から出土するもの（179・183 ～ 185）は、天正の兵火時あるいは兵火以降に崩れ落ちたものが、近世以降に下段に存在していた子院の使用石材や瓦類と一緒に、半地下式倉庫などの深度のある遺構に火事場整理として一括投棄されたものと考えられる。

鯱瓦は、大規模農道建設に伴う調査で根来寺遺跡から一例の出土例が確認されている。その出土地点は本調査地から東の蓮華谷川を挟んだ「谷部 B 地区」の包含層から出土しており、復元長約 15 ㎝を測る一体作りのもので、鱗はヘラ描きである。なお、胸鰭、尾鰭は欠損している。大きさから建物の下り棟や楼門などに葺かれていた公算が高い。

鯱瓦の初現が安土城とされることから、根来寺遺跡で出土した要因として城郭との関連性が推測される。16 世紀後半には根来寺の行人集団は各地で傭兵として働いており、地方の城郭などを見聞した結果、時流として、鯱瓦を寺院建築に取り入れた可能性も考えられる。また、中世寺院からの出土例がないということもあって特異な現象として取り沙汰されるものの、近世以降には鯱瓦が寺院に葺かれることが一般的となることから、根来寺遺跡がその初現例として位置付けられ、また今後当該期の中世寺院の調査事例の増加に伴い、類例の増加も期待される。

なお、本遺跡出土の鯱瓦と安土城や広島城の鯱瓦の意匠を比べると、安土城の鱗は作り出しであるのに対し、広島城や根来寺遺跡出土のものはヘラ描きで、やや簡略化した表現である。ただし、三者ともに鰭が胴体と一体作りで共通する。また、尾鰭の形状は安土城と広島城は古い様相の扇形を呈するが、根来寺遺

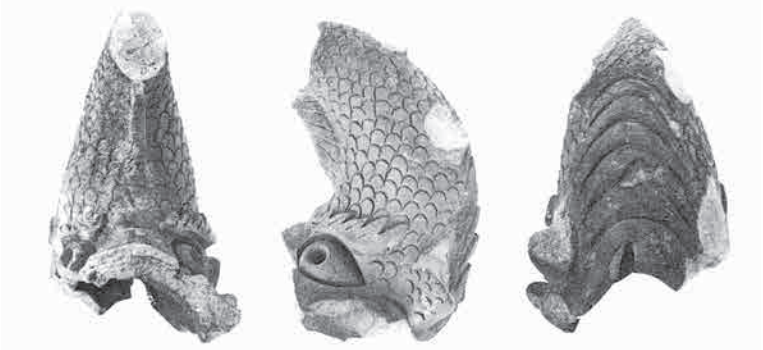
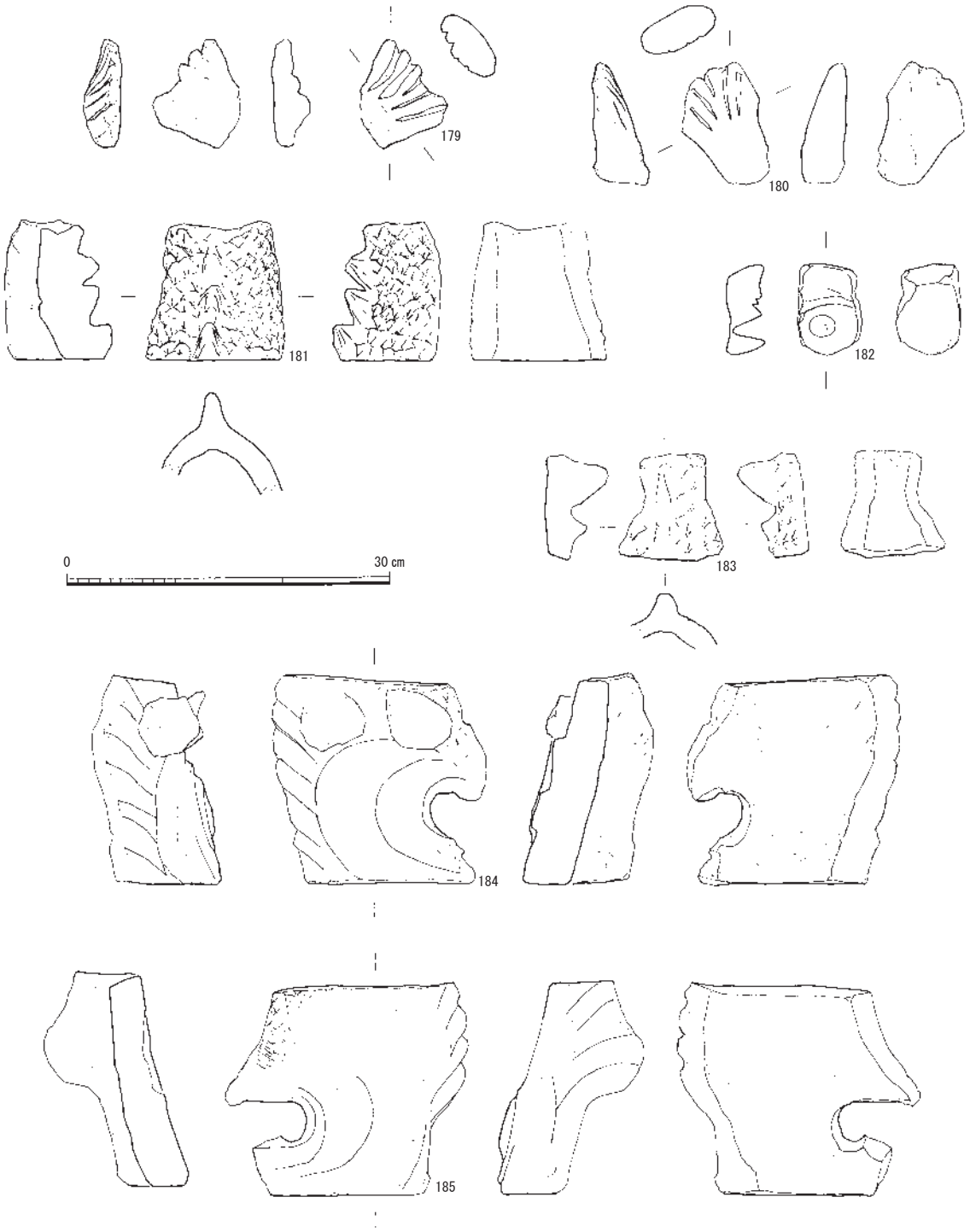


写真6　昭和63年度出土鯱瓦（昭和63年度大規模農道建設に伴う調査）

跡のものは欠損していて不明である。鯱瓦出土の安土城と広島城の築城年を確認しておくと、安土城築城開始が天正四年（1576）で天正七年（1579）が完成、広島城は毛利氏による築城開始が天正十六年（1588）で慶長四年（1599）が竣工とされている。天正十三年の兵火（1585）より以前の所産である今回出土の根来寺の鯱瓦と安土城・広島城の鱗の意匠や築城年とを比較すると、今回出土の鯱瓦は意匠から広島城の例に近似し、安土城の例に後出すると位置づけられることから、鯱瓦製作年代は 1570 年代まで遡らず、1580 年代の所産と考えるのが妥当であろう。

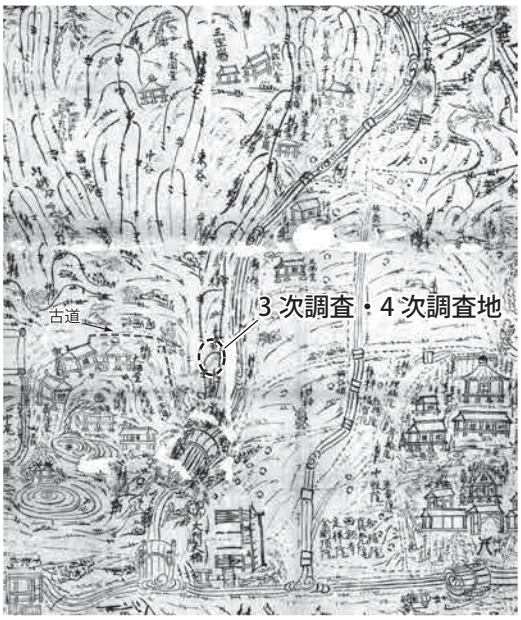


179、183～185：半地下式倉庫１（１層）、180～182：崩落土

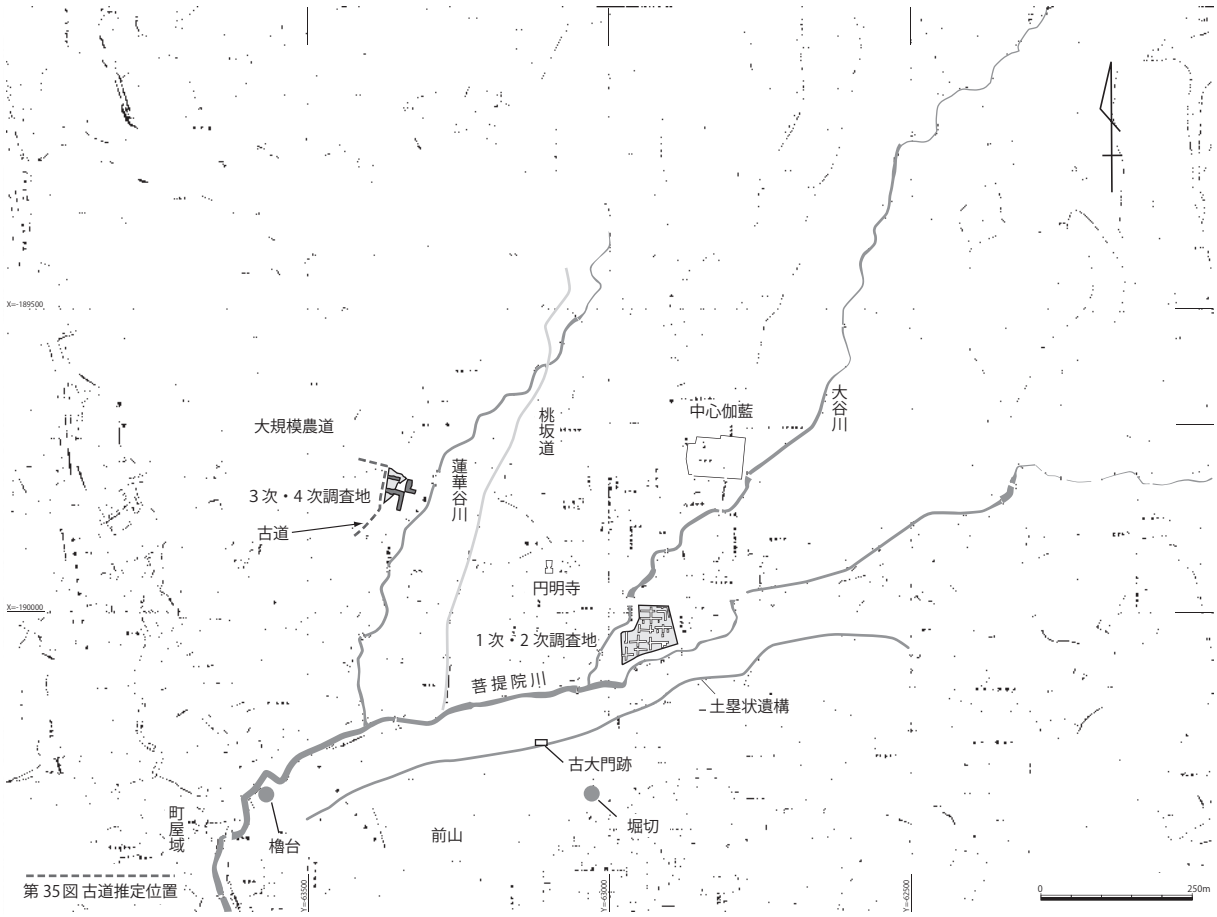
第 34 図　鯱瓦実測図

第４項　３次調査・４次調査のまとめ

今回の調査対象地は和泉山脈から南に派生する尾根筋に位置する。調査地の西側は谷状地形、現代でも南から北に段付く水田区画が写真７から認められる。東側は急峻な崖でその崖の底には蓮華谷川が南流する。調査地から南西約１㎞の地点に根来寺の城とされている西ノ山城があり、南約 400 ～ 500 ｍの地点には通称「前山」と呼ばれる独立山塊が天然の要害として存在し、尾根の西端で物見櫓、稜線上には岩盤を成形した土塁状遺構、尾根には堀切が確認されている。また、「根来寺伽藍古絵図」では調査対象地にあたる丘陵の尾根上には建物が描かれておらず、子院名も記されていない。調査対象地の西側には道（古道）が描かれ、道の南側には礎石建ちの大師堂、観音堂、薬師堂などが描かれている。また、道の北側には西南院と書かれ、子院の存在を示している。



第 35 図　３次調査・４次調査地周辺の古絵図
（根来寺伽藍古絵図）



第36図　根来寺山内における調査地位置図(S=1:12,500)（岩出市都市計画図を利用）

調査対象地は北側の和泉山脈から派生する丘陵により、蓮華谷川以東に所在する子院群と一見隔絶しているようにみえるが、第２章第３節で先述したように、調査対象地周辺の丘陵上で実施された既往の調査において子院の存在が明らかになっている。この状況は子院敷地を確保しやすい平坦地のみならず、丘陵上や谷部を造成して子院敷地を確保しなければならなかった。根来寺の最盛期の子院立地の様相をよく表しているものと捉えることができる。

上段の調査結果

３次調査では、調査対象地の丘陵頂部から西側斜面、西側平坦面でＡ・Ｂ・Ｃトレンチを設定して遺構の確認にあたった。遺構を確認できたのは丘陵頂部の西側縁辺部から西側平坦面にかけてのみで、地元住民の証言のとおり丘陵頂部ではパイロット農園として利用された際や、それ以降の削平を受けたとみられ、遺構面は遺存しておらず、遺構は一切検出されなかった。丘陵頂部のＡトレンチの南北方向の地山は、北端で標高 98.7 m、南端で標高 95.7 mを測り、比高差 3.0 mを測る。この高低差は北東方向から南西方向に傾斜がつき、重機により南側から掻き削られた様相を呈している。Ｂトレンチの南北方向もＡトレンチ程ではないが北端で標高 94.2 m、南端で標高 93.5 mを測り、0.7 mの比高差を測る。また、ＡトレンチとＢトレンチの境目で約 1.5 mの高低差が認められた。先述したとおり、３次調査時の盛土上や盛土中からは、子院の石造遺構に使用されていたと考えられる大きな砂岩礫や石造遺物などが出土しており、４次調査では溝１に瓦類が被覆するように出土していることから丘陵頂部には元々建物が存在し、子院敷地であったと考えられる。そのため、Ａ・Ｂトレンチ間の高低差は、丘陵上の子院間に設けられた段差の名残りと考えている。ただし、丘陵頂部の遺構は既に削平されていたものの、４次調査で検出した丘陵縁辺部の標高の低い範囲を中心に井戸や溜桝などの深度のある遺構のみが残存したのであろう。

また、パイロット道の進入口は本調査地の南端に在り、大門から通じる市道脇から敷設されている。パイロット道進入口付近は、この辺りの市道の東側と同様に敷設工事の際の丘陵切崖部分の岩盤が露出していることから、明らかに本調査地の上段南端部が削平されていることが現状でも看取できる。因みに、岩盤露出地点の天端の標高は約 95.6 mを測ることから、大規模な削平があったことの傍証となろう。また、３次調査時には、石垣の西側の階段上に石垣石材とみられる大きな石材が落ち込んでいた状況からも、築造時の石垣は検出時より最低一段分程度は高い位置まで築造されていたことは明らかである。

上段の西側縁辺部では溝１や石垣等の遺構を検出し、上段の北側では石積み井戸や暗渠排水溝（溝６）を検出している。石積み井戸や暗渠排水溝の存在も日常的な水利用を行うことを示すもので、丘陵頂部に子院建物が存在していたことの傍証となる。この２つの遺構は岩盤上から検出

したが、溝１の東側は削平されて平坦面となっており、その岩盤平坦面上には盛土が堆積していた。溝１の東側の岩盤平坦面上には第21図のように、被熱した瓦が入り乱れた状態で混入しており、このような状況から、この盛土は土質などから新しい時期（パイロット事業時か）の現代盛土の公算が高い。なお、岩盤平坦面直上には包含層および焼土は全く確認できず、岩盤面が溝１の東側肩口まで続いていたものと考えられるが、すでに削平されており、その上部に現代盛土が堆積する。また、溝１の東側からの流入溝も途中で消滅しており、溝１の東側の岩盤平坦面は現代の削平の結果であるため、遺構ではない。

上段西側縁辺部に築かれた石垣は、階段の正面部分には大きさ1.0ｍ弱の割石を使用し、東から流入する排水口を設えていた。石垣の存在やその使用石材を下から見上げれば威圧感も感じることはできるが、使用石材の大きさは大規模農道建設に伴う発掘調査の谷部Ｂ地区で検出した敷地の西側を限る石垣に使用されていた石材や、同調査の谷部Ａ地区と丘陵部Ａ地区を画する石垣石材等と比較しても特段大きなものでなく、根来寺遺跡全盛期の石垣としては一般的な規格である。また、石垣基底部に排水口を設える造作は昭和59年度から昭和62年度まで調査した「根来地区普通農道整備事業に伴う発掘調査」のⅣ区で検出した石垣にも認められるもので、根来寺遺跡における子院の排水施設としては一般的であったといえる。

上記の石垣の西側で検出した通路は、側溝をもち階段を登りきった所から石垣に沿って北側に向かうものである。先述したとおり、上段の敷地を最大限に確保するため丘陵西側縁辺部に計画的に通路を配したと推定できる。また、調査区の北端とでは約3.0ｍの高低差が認められ、丘陵頂部に存在していたであろう子院への通路であるとともに、その方向性や溝の連続性から大規模農道で検出されたSD46とその北隣が通路として連続し、調査対象地より北側に存在していた子院へも通じていたと考えられる。

下段の調査結果

調査地の下段は、和泉山脈から派生した尾根筋の西側にあたる。尾根筋の西側に建物の敷地を確保するために、丘陵の西側斜面を大きく掘削し、その土で西側の谷筋の一部を埋めて整地し子院敷地を確保したと推定される。

このようにして確保された下段の敷地で、半地下式倉庫が検出された。根来寺では16世紀に入り造られはじめ、天正の兵火時まで機能する施設で、兵火後の江戸時代のものは現在のところ確認されていない。その用途は、油ないしは味噌または酒などを貯蔵していたとするなど諸説が提出されている。確定はしていないが、甕が設置されていることから貯蔵施設としての機能は疑いない。また、設置されている備前大甕が高価であったことを鑑みればその対価となる物資が蓄えられていたことは想像に難くない。

半地下式倉庫[注17]は、既往の調査から本堂ないしその付属する建物の床下を利用したものであることがわかっている。半地下式倉庫が展開する天正の兵火にかかる時期は根来寺の最盛期に相当する時期であり、平坦部のみならず谷の奥深く、あるいは丘陵上のいたるところに子院が建立されており、根来寺山内において過密化が進み、各子院の敷地スペースが限られるなかで、敷地の有効的な利用方法が求められていた時代である。

また、もう一つの重要な特性は、半地下式倉庫に規模の大小はあるものの子院の既往調査例では原則として一つの子院敷地には一基の半地下式倉庫が造られていることである。下段の調査では４基の半地下式倉庫が検出されていることから、半地下式倉庫と同数の４つの子院敷地の存在が想定できる。

４つの子院敷地の境界の一つとして今回検出された階段遺構と階段に取り付いていたであろう進入路があげられる。この階段遺構より南側では、敷地の東端をなしている崖部の地山、また、これに沿って検出された溝５は調査区の南端付近で南を画するかのように南西側に湾曲しはじめている。おそらくこの付近が半地下式倉庫３が位置する一つの敷地の南端である。

さらに階段遺構より北側については、崖部の縁に直交するように位置する溝７が敷地境界を示す遺構で、階段遺構と溝７までの区画には半地下式倉庫２が存在する。

さらに溝７北側の区画は、半地下式倉庫１と半地下式倉庫４の間に敷地の境界の存在が想定されるが、この付近は営林署の官舎建設による削平が著しい箇所でもあるため判然としない。すでに削平されているものの溝や土塀ないし板塀というような境界施設が設けられていた可能性も推定されよう。

なお、これら４つの子院敷地の存在が半地下式倉庫の検出状況等から推定されるが、古絵図や旧地図、地元聞き取り調査から市道の西側の現在段々の水田となっている東隣に里道が存在しており、今回の調査で確認された下段の４つの敷地の西端はこの里道まで及んでいたものと推定することができる。この推定に基づけば子院の奥行きは 15 m前後に復元でき、この復元敷地の区画はそれぞれ 15 m ×12.5 m前後の規模であったものと推定される。

出土遺物からみた子院の時期について

今回の調査において出土した遺物には土師器皿、土師質土器、瓦質土器、中国製磁器、瀬戸美濃陶器、備前焼、瓦類、石製品、金属製品などがある。この中でも備前焼と瓦類の出土量が他の遺物に比べ突出している。備前焼では壺、徳利、擂鉢、甕があり、明瞭に時期決定ができるものに擂鉢と甕がある。擂鉢は乗岡編年中世６期ｂの時期に相当するものが最も新しく、帰属時期は 16 世紀後半である。甕は半地下式倉庫３から一定量の口縁部が出土したが、乗岡編年中世５期ｂから中世６期ｂの時期幅が認められる。土師器の皿は根来寺遺跡特有の口縁が肥厚するもので

16 世紀を通してみられるものである。この皿は既往の調査でも天正の兵火の焼土層から普遍的に出土している。中国製磁器は青磁、白磁、染付が出土した。白磁は端反皿が主体で、半地下式倉庫２や半地下式倉庫３からまとまって出土した。出土状況から５枚あるいは 10 枚のセットと思われ、器形変化のないままに 16 世紀を通して流通している。また、15 世紀に帰属すると思われる割高台の白磁も小破片ではあるが１点だけ半地下式倉庫２の下層（４層）から出土している。青磁は 14 世紀代の盤（119）や、15 世紀末から 16 世紀初めに帰属する線描蓮弁文碗（87）などがごく少量出土した。染付には 15 世紀後半の口縁が端反るものや碁笥底の皿があり、16 世紀中頃から後半に帰属するものでは饅頭心型の底部をもち口縁が内湾する碗や、口縁が内湾気味の皿がある。

以上、出土遺物から調査地の子院の存続時期は、時期幅は最大でも 15 世紀末から天正の兵火時まで、伝世品などを考慮した場合最短でも 16 世紀中頃から天正の兵火時までが今回検出した子院遺構が機能した時期幅に収まると考えられる。

調査地の遺構の性格について

昭和 33 年撮影の航空写真では調査地の西側は谷地形となり、北から南に高低差のつく水田区画があり、北側の谷の奥まで段状に続いている。場所は異なるが昭和 55 年度調査で谷奥の複数段におよぶ水田区画を調査したところ水田一区画が一子院に相当することが判明している。これ

写真７　航空写真（昭和33年撮影）

らのことから水田形状は、根来寺が天正の兵火により灰燼に帰すまでの根来寺全盛期における敷地の姿を反映したもので、谷奥まで子院が建ち並んでいたと推定されている。

第２章第３節でも記したが、本調査地の約 50 ｍ南側の丘陵部で岩出市（当時は岩出町）教育委員会が平成 13・15 年度に岩出町内遺跡発掘調査として宅地造成に伴う発掘調査を実施している。市道を挟んで西側と東側を調査し、両者の間は約 10 ｍと近接している。平成 13 年度の調査で検出した中世の遺構には、半地下式倉庫の可能性のある遺構、石組井戸、甕ピットと考えられる遺構などが検出され、中国製青磁・白磁、備前焼、美濃瀬戸陶器、瓦類などが出土している。平成 15 年度の調査地は本調査地の南、丘陵部の尾根先端部分に位置する。ここから検出された中世遺構には埋甕遺構や石組井戸などがある。これらの遺構や遺物は、根来寺遺跡の調査で一般的に検出されるものである。また、大規模農道の北側の丘陵裾部から谷筋にかけて岩出市が平成 12 年度に工場用地工事に伴う発掘調査を行い多数の遺構を検出している。検出遺構は石垣、埋甕遺構、石敷きを備えた石組井戸、石組溝、道などで、周辺の既往調査では子院と異なる性格を示す遺構や遺物は確認されていない。

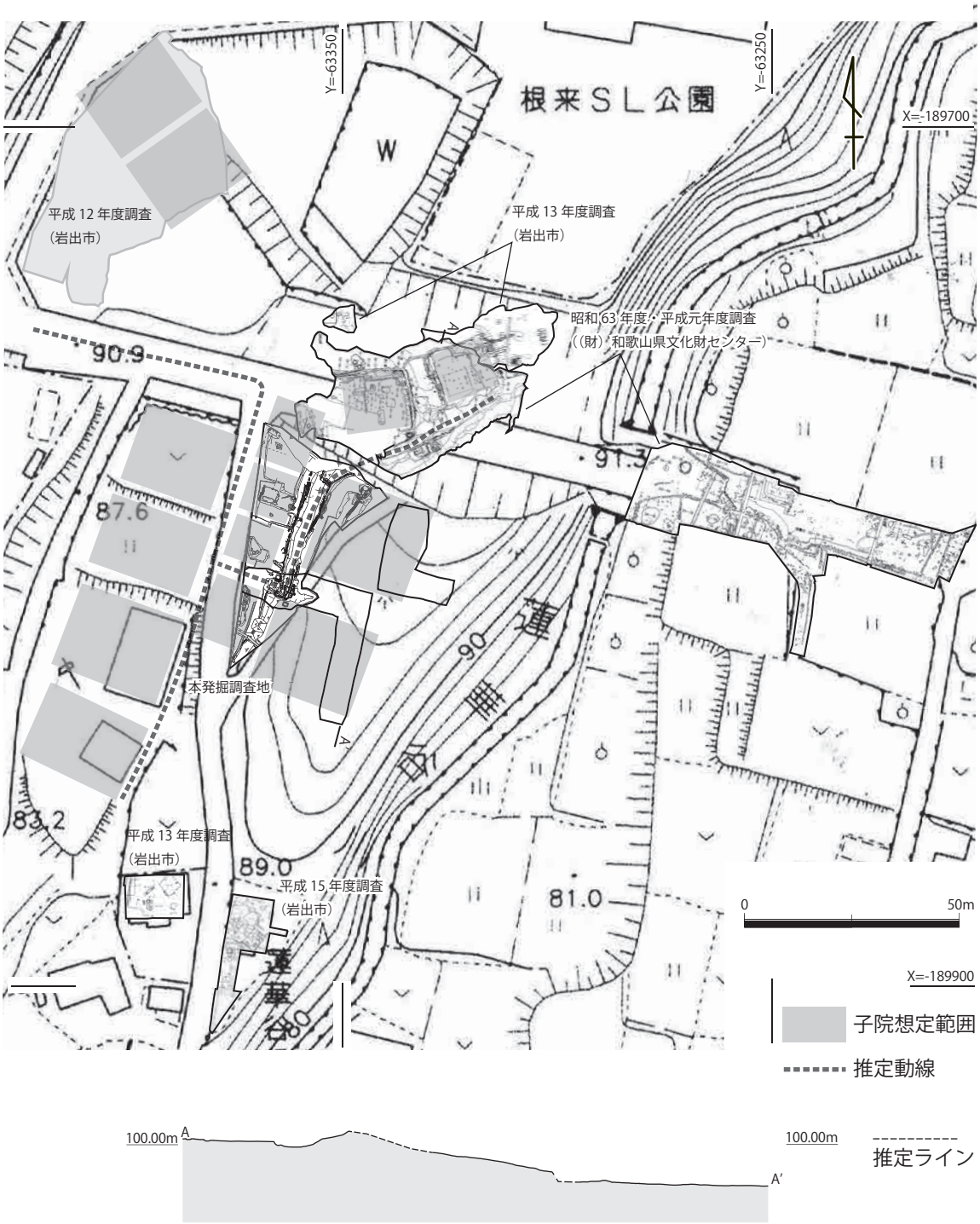
本調査地の北側隣接地における昭和 63 年度と平成元年度に実施した大規模農道建設に伴う発掘調査でも、３段の敷地を検出しており、敷地を画する石垣、上段から下段にかけての排水施設や礎石建物、石組井戸などを検出し、子院が存在していたと考えられる。更に北側に隣接する地点でも、岩出市が平成 13 年度に若もの広場前駐車場造成工事に伴う調査で、建物礎石、排水溝、半地下式倉庫などの大規模農道建設に伴う調査の遺構の延長部分を検出しており、３次・４次調査地の丘陵周辺地の発掘調査では、他の根来寺遺跡の発掘調査での子院と異なる状況は特段認められない。

これに対し、大規模農道建設に伴う発掘調査において、東の蓮華谷川を隔てた谷筋の行人方の有力な子院として知られる専識坊跡と推定される地点で高石垣を検出し、礎石などからこの高石垣上に物見櫓が建てられていた可能性が指摘されている。

今回の調査地点の丘陵頂部は地形的に更に眺望も効くことから、地形的には外敵の侵入に備えた物見櫓のような施設があった可能性も推定されるが、３次・４次調査では遺構は削平されて遺存しておらず、そのような痕跡は確認できない。

根来寺の全盛期である元亀（1570 ～ 1573）から天正（1573 ～ 1592）にかけての時期、根来寺を取り巻く情勢は緊張状態にあり、根来寺遺跡の南、通称前山と呼ばれる独立山塊上の西端には櫓、東西の稜線上には土塁状遺構、堀切などの防御機能をもった施設が発掘調査で確認され、西坂本の西側には西ノ山城が所在する。平成５年度に県文化財センターが行った西ノ山城の東堀の調査では、鎧具足の一部である喉輪が出土しており、防御施設と位置付けられている。このように外郭守備ラインは歴然としており、外郭守備ラインの内側に所在する子院にも敵の侵入を防ぐための防御施設が存在していたとも考えられる。しかしながら、今回の調査地点では、櫓、土塁

状遺構、堀切といった防御施設や西ノ山城のような特異な防御施設[注18]と評価できる遺構は検出していない。３・４次調査で検出した遺構群や調査対象地は、北側の大規模農道に伴う発掘調査で検出された子院と同様、平坦地のみならず丘陵上にも敷地確保を求めざるを得なかった根来寺全盛期の子院に関連する遺構群と評価するのが妥当である（第 37 図）。



第 37 図　既往の調査及び子院想定図（S=1:1,500）
大規模農道調査地及び３次調査地縦断面図（S=1:1,000）

注

注１　『根来寺坊院跡』和歌山県教育委員会　1989 年

注２　『根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅰ』和歌山県教育委員会　社団法人和歌山県文化財研究会　1978 年
『根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅱ』和歌山県教育委員会　1979 年
『根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅲ』和歌山県教育委員会　1980 年

注３　『根来寺坊院跡　広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
和歌山県教育委員会　財団法人和歌山県文化財センター　1994 年

注４　前掲注２

注５　『根来寺坊院跡』和歌山県教育委員会　1995 年

注６　『根来寺坊院跡　根来地区普通農道整備事業に伴う根来寺坊院跡発掘調査』
財団法人和歌山県文化財センター　1989 年

注７　『根来寺坊院跡発掘調査概報　町道根来６号線道路改良舗装工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』
岩出町遺跡調査会　2001 年

注８　前掲注３

注９　前掲注２

注 10　『根来寺坊院跡発掘調査概報　若もの広場前駐車場造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』
岩出市教育委員会　2002 年

注 11　岩出市教育委員会からのご教示による。

注 12　『平成 13 年度　岩出町内遺跡発掘調査概報』 岩出町教育委員会　2002 年

注 13　『平成 15 年度　岩出町内遺跡発掘調査概報』 岩出町教育委員会　2004 年

注 14　『根来寺西部地区遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会　昭和 56 年度

注 15　『根来寺坊院跡　県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う根来工区発掘調査報告書』 1997 年
財団法人和歌山県文化財センター

注 16　佐藤大規 「広島城出土の金箔鯱瓦についての考察」『広島大学総合博物館研究報告』 2009 年
鯱瓦は木戸雅寿氏により、鱗の表現からの時期細分がなされており、この細分によるとヘラ描きである豊臣秀吉段階Ⅰ期（天正十一年～十三年）となる。

注 17　根来寺遺跡で数多く検出される半地下式倉庫は、その用途、出現時期などについて諸説がある。
前掲注６では「根来寺の油倉」として菅原正明氏によって論じられている。また、武内雅人氏は『中世都市根来寺内周辺における荘園景観の復元研究　中世根来の社会史』「佐武伊賀働書」を読み解くで甕蔵として触れている。

注 18　菅原正明 「天正年間の根来寺の城砦化」『新世紀の考古学　大塚初重先生喜寿記念論文集』2003 年
土井孝之 「根来寺」 定本『和歌山県の城』郷土出版社　1995 年

１　Ａ区　西半部遺構検出状況（東から）

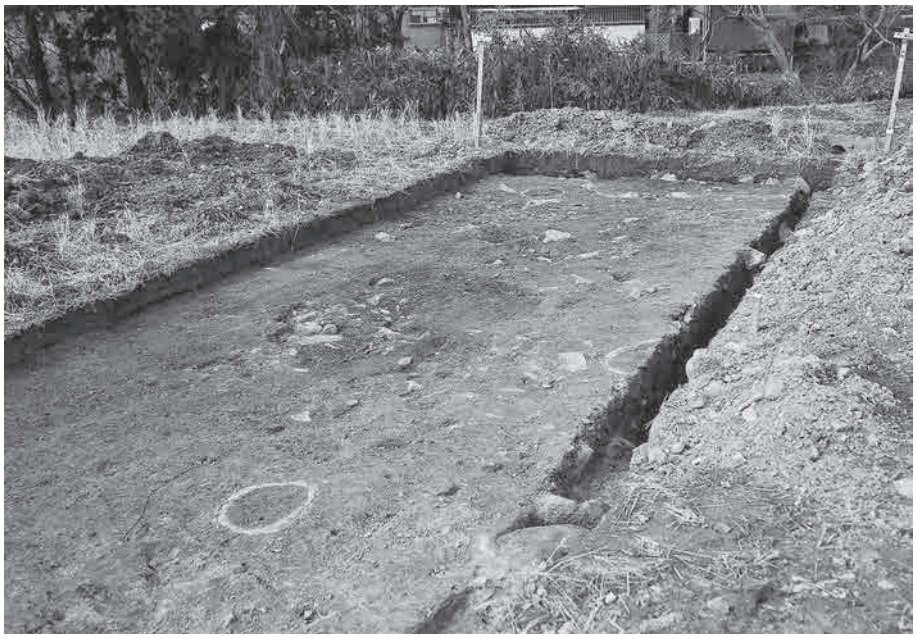
２　Ａ区　遺構３土坑検出状況（東から）

３　Ａ区　南半部遺構検出状況（北東から）

１　Ｂ区　東西方向トレンチ全景（東から）

２　Ｂ区　遺構 11 土坑状遺構
遺物出土状況（南東から）

３　Ｂ区　遺構７土坑・８土坑・９溝
検出状況（北から）



1 C区 北半部掘立柱建物検出状況
（南東から）

2 D区 西半部掘立柱建物検出状況
（北西から）

3 D区 遺構 18 土坑検出状況（東から）

1 E区 遺構 24 溝・遺構 25 道路
検出状況(北から)

2 E区 遺構 24 溝検出状況(南西から)

3 E区 基壇状遺構検出状況(北から)

１　Ｆ区　遺構 27 石垣検出状況
（南東から）

２　Ｇ区　調査区全景（北から）

３　Ｇ区　遺構 30 暗渠排水溝・
遺構 31 素掘り溝検出状況（東から）

1 H区 西半部遺構検出状況(北東から)

2 H区 遺構32石組井戸・
遺構33土坑検出状況(北東から)

3 H区 遺構33土坑半裁状況(南西から)

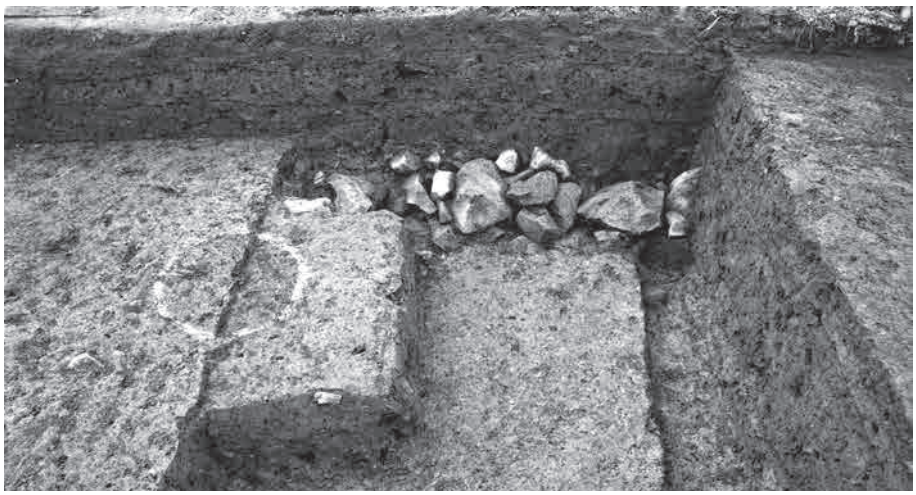
１　Ⅰ区　全景（南西から）

２　Ⅰ区　遺構 42 雨落溝検出状況
（東から）

３　Ⅰ区　階段状遺構（南から）

１　Ｊ区　全景（西から）

２　Ｊ区　遺構 44 石組排水溝（北から）



３　Ｊ区　遺構 45 石垣（北から）

1 調査前(北西から)

2 調査前(東から)

3 調査地伐木状況(北西から)

1　Aトレンチ全景（南から）

2　Aトレンチ西壁土層堆積状況（北から）

3　Aトレンチ東端南壁岩盤露出状況
（西から）

1 Aトレンチ重機による削平痕
（南から）

2 Bトレンチ全景（北から）

3 Bトレンチ北壁土層堆積状況（東から）

1　Bトレンチ石垣検出状況（西から）

2　Bトレンチ階段状遺構検出状況
（西から）

3　Bトレンチ階段状遺構検出状況
（北上から）

１　Ｃトレンチ全景（西から）

２　Ｃトレンチ石列１検出状況（南から）

３　Ｃトレンチ石列２検出状況（南西から）

1 調査地全景（北西から）

2 調査地全景（南から）

3 調査地下段全景（北から）

1 上段
井戸および溝６検出状況（北から）

2 上段
井戸および溝６検出状況（東から）

3 上段
井戸・溝６接合部（北から）

1 上段
溝１検出状況（北から）

2 上段
溝１付近瓦溜まり状況（北から）

3 上段
現代盛土（北から）

1 石垣・階段検出状況（西から）

2 上段
石垣・溝４検出状況（南から）

3 上段
石垣排水口（西から）

1 上段
集水口 1（東上から）

2 階段踏石検出状況（東上から）

3 階段南側石（北西から）

１ 下段
溝２・３検出状況（北から）

２ 下段
集水口２検出状況（南西から）

３ 下段
溜桝状遺構２（西から）

１ 下段　溝７検出状況（南から）

２ 下段　溝５検出状況（南から）

1 下段　半地下式倉庫１全景（西から）

2 下段　半地下式倉庫１
焼土層（２層）検出状況（北東から）

3 半地下式倉庫１内
井戸状遺構半裁状況（南西から）

１ 下段
半地下式倉庫２全景（東から）

２ 下段
半地下式倉庫２全景（西から）

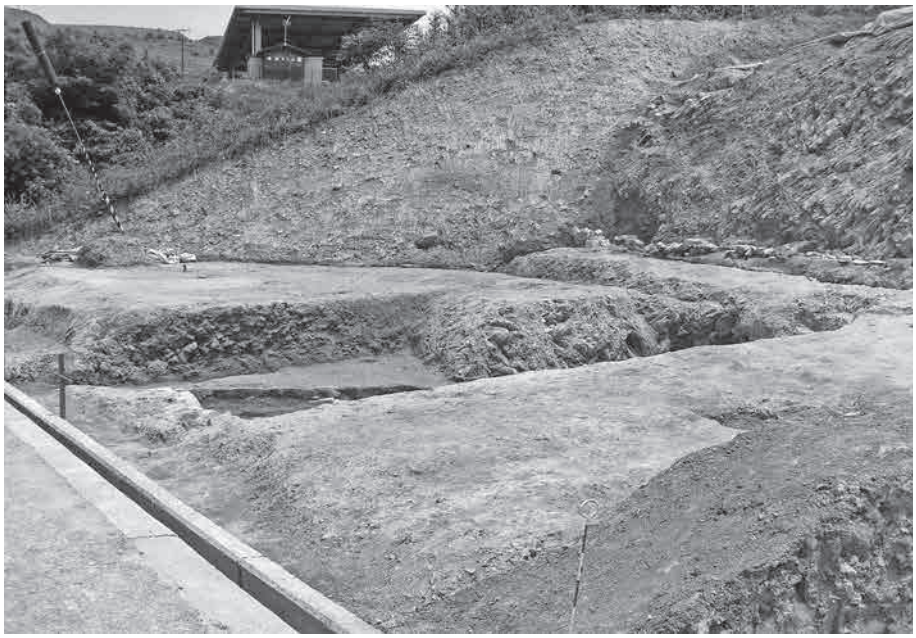
３ 下段　半地下式倉庫２貼り壁状況
（南から）

１ 下段
半地下式倉庫３全景（南から）

２ 半地下式倉庫３甕埋設坑検出状況
（南から）

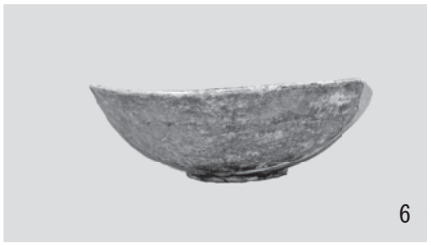
３ 下段
半地下式倉庫４検出状況（南東から）

1 上段
調査区北壁土層堆積状況（南東から）

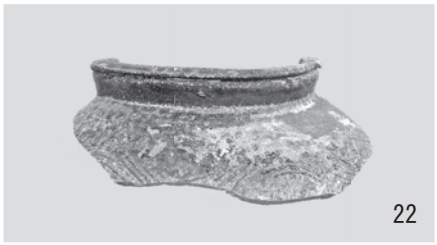


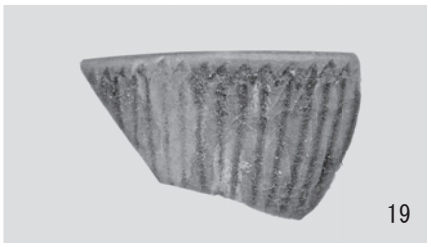
2 崖部～下段
調査区北壁土層堆積状況（南から）

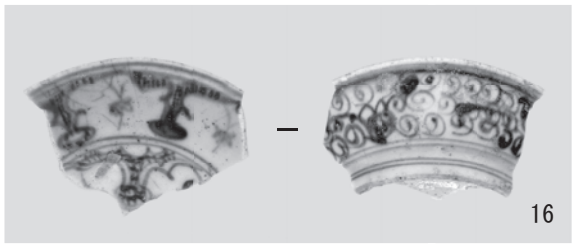
3 下段
整地土確認トレンチ土層堆積状況
（北東から）

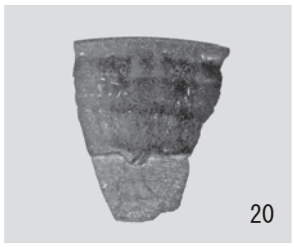

6

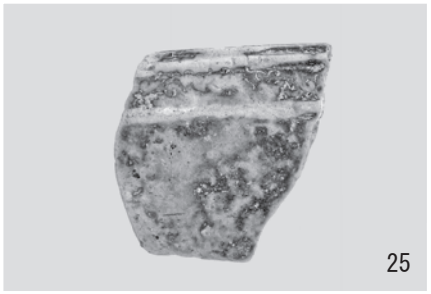
10


22


19

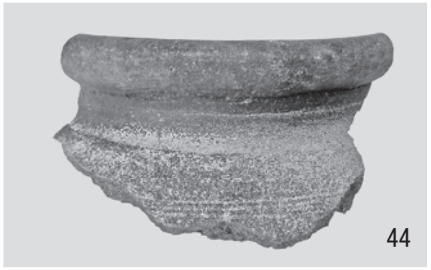

16


20


25

32

34

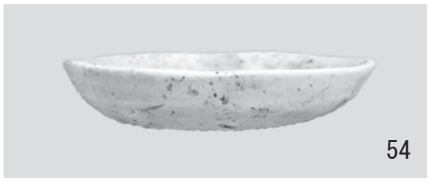

44

41

42

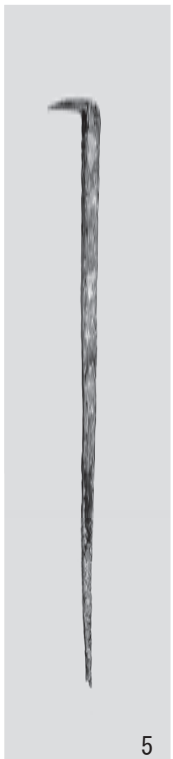
48

50


54

177

62

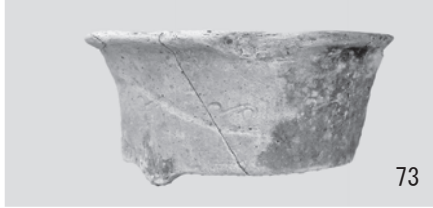

5

63

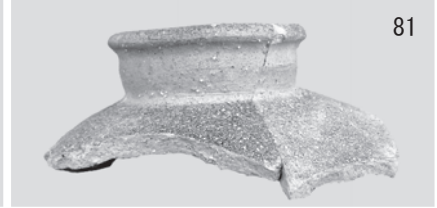
157

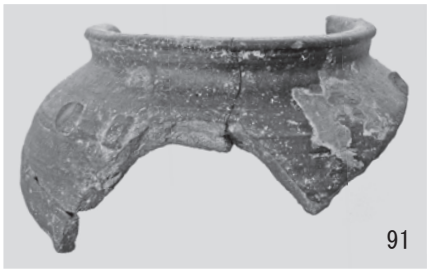
71

176


73

81

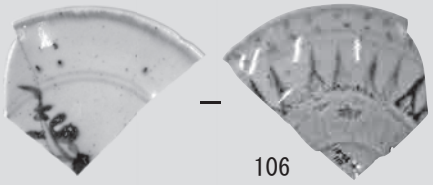



91

74

76

84

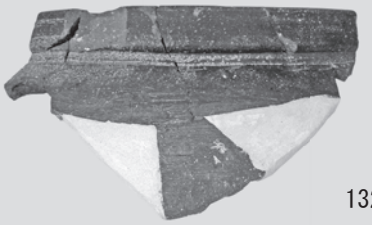

106

124

121

131

123

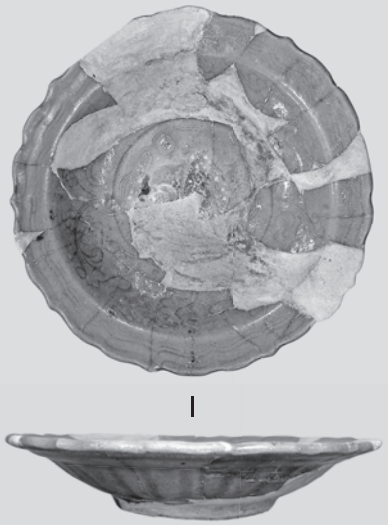

132

172

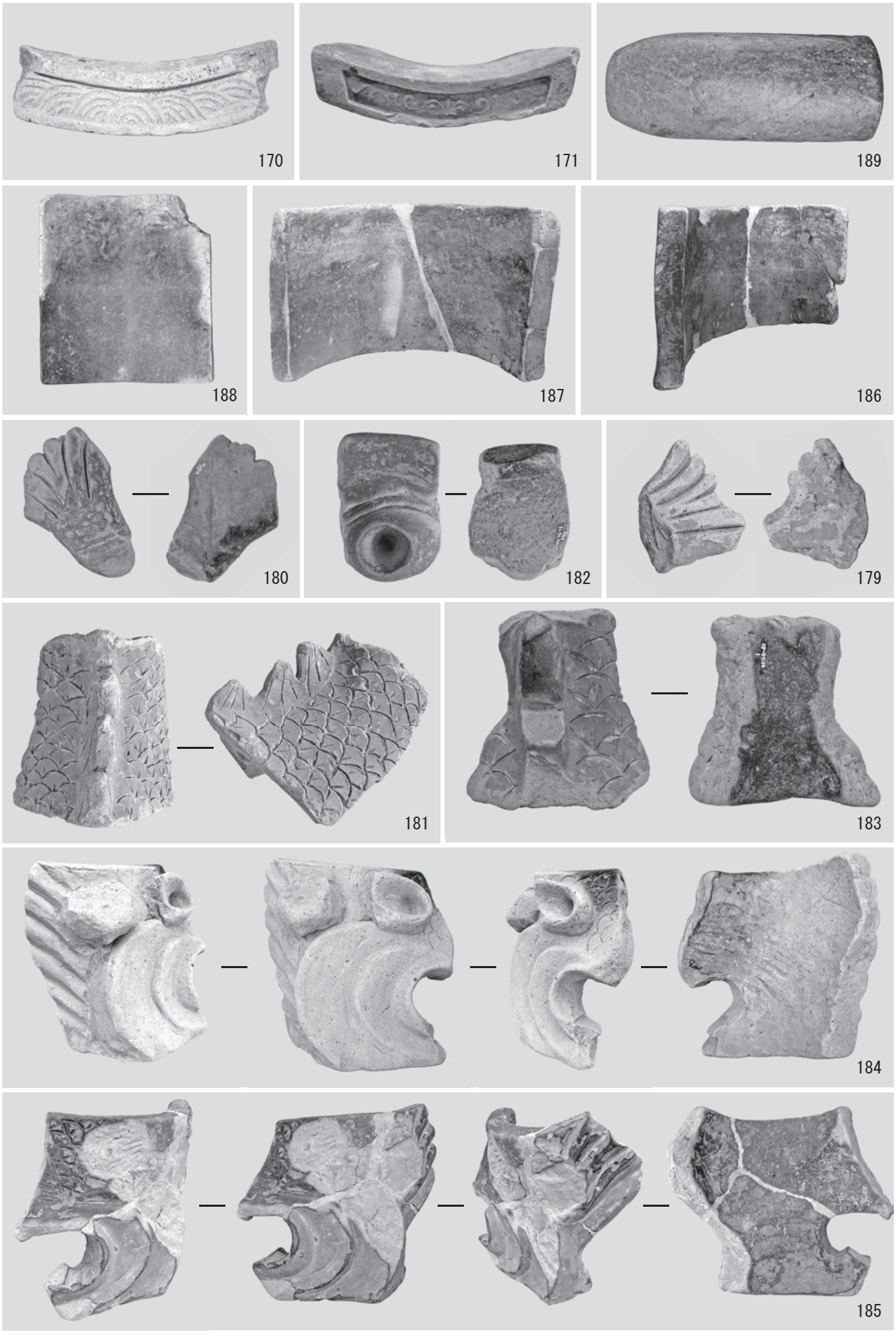
174

175

108


119

122


170
171
189
188
187
186
180
182
179
181
183
184
185

報告書抄録

ふりがな	ねごろじいせき
書　　名	根来寺遺跡
副 書 名	旧県会議事堂移転予定地における発掘調査報告書
編著者名	佐伯 和也（公益財団法人和歌山県文化財センター）ほか
編集機関	公益財団法人　和歌山県文化財センター
所 在 地	〒640 － 8404　和歌山県和歌山市湊新堤内 571 番－ 1　　TEL　073-433-3843
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 26 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ねごろじいせき 根来寺遺跡	わかやまけん 和歌山県 いわでし 岩出市 ねごろ 根来	3032670	16	1次・2次調査 34° 17′ 5″ 3次・4次調査 34° 17′ 13 ″	1次・2次調査 135° 18′ 58″ 3次・4次調査 135° 18′ 42 ″	1次調査 2005年1月13日 ー2005年3月9日 2次調査 2005年12月19日 ー2005年1月25日 3次調査 2010年7月4日 ー2010年10月8日 4次調査 2011年4月6日 ー2011年8月22日	1次調査 880 2次調査 400 3次調査 407 4次調査 795	旧県会議事堂移転

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根来寺遺跡	寺院跡	室町時代 ー江戸時代	道、階段、土坑、掘立柱、溝、井戸、溜桝、集水口、半地下式倉庫など	備前焼、土師器皿、瓦器、瓦質土器、中国製磁器、瀬戸美濃陶器、瓦類、近世陶磁器など	丘陵部と平地部に築かれた子院間をつなぐ階段と通路を検出

要　　約

（1次・2次調査）

調査地は覚鑁上人の御廟所の西側でトレンチ調査を実施した。中世の検出遺構には南北・東西方向の道や道の一部である階段遺構、地鎮遺構などを検出している。また、この他、近世の復興期（18 世紀代）の子院に伴う遺構・遺物が確認できた。

（3次・4次調査）

丘陵頂部は後世に削平されたと考えられ、遺構を確認できなかったが、丘陵頂部の西端から西側斜面および西側平地部で遺構を確認した。

3次調査で遺構を確認した範囲を対象に4次調査を実施したところ丘陵頂部の西端で子院の石垣、通路や井戸、排水施設を検出した。西側斜面では西側平地部から丘陵部の子院に繋がる階段を検出した。下段では、半地下式倉庫を4基検出した。

根来寺遺跡

—旧県会議事堂移転予定地における発掘調査報告書—

発行年月日／2012年3月26日
編集・発行／公益財団法人 和歌山県文化財センター
印刷・製本／株式会社　協　和